







狐耳妻チセ



ボクの理想の異世界生活 幸せいっぱいケモ耳ハーレム！

上原りょう

原作・イラスト／イチリ

第一章	ボクの理想の異世界生活〜二人のケモ耳妻
第二章	ピクニックでマタタビ酔いどれご奉仕
第三章	ウサギ耳隣人美少女と教室コスプレエッチ
第四章	母乳おっぱい体質にしたらミルクまみれ
第五章	発情ウエイトレスと睦み合いラブラブ3P
第六章	ボクの理想の新婚旅行〜温泉ケモ耳ハーレム

第一章 ボクの理想の異世界生活と二人のケモ耳妻

「はぁ。今日もいい天気だなあ」

ノルンは、両腕を思いっきり伸ばす。

心地いい木漏れ日を浴びるのは気持ちがいい。

(本当にここは異世界って奴なんだなあ)

ノルンは、伸びる自分の影を眺める。

頭の上には三角の耳が二つ。お尻からは尻尾が伸びている。

動かそうと思えば、耳も尻尾も腕を動かすのと同じように自由自在。

しかし自分の身体から生えているはずなのに、まだ少し馴れない。

この世界の住人は何かしらの動物の姿をしているから、ノルンが猫でもなんら問題はない。

そう、ノルンはこの世界の住人ではない。

正確に言えば、ノルンの中身は、と言ったほうがいいかもしれない。

見た目は十代の少年ながら、中身は四十歳独身のおっさんだった。

アイドルの写真撮影会に出かけてはお気に入り娘の写真を撮り、帰宅してはその写真でオナニーをしていた。

いつものようにその日もせっせとオナニーに励んでいたのだが、十二回目の射精とともに意識が途絶えた。

気付けば、ノルンという少年になっていた。

(なんだかすごく健康的な生活だな)

日が高いうちに外に出て、夜更かしもせずに寝ている。

それどころか、今は市場からの買い物帰りだった。

前の世界では考えられないと、自分でも驚いてしまう。

「ただいまあ」

ノルンは家に帰る。

すると台所で夕飯の下準備をしていた女の子がこちらを振り返るなり、笑顔で走り寄ってくれる。

「おかえりなさい、お兄ちゃんっ。お買い物ありがとうございます。荷物、お持ちしますね」

眩しい笑顔の女の子の名前は、チセ。

狐の女の子だ。

金色のセミロングヘア、チャームポイントに右側にリボンを結わえ、赤味を帯びた円らな瞳は潤みがち。

眉がちよつと下がりが気味なせいとか、気弱な雰囲気がある。

狐らしいふんわりした尻尾が可愛い。

今もフリフリと動いている。

チセは最初こそメイドとしてノルンたちの元にやってきたのだが、今は立派な家族の一員だ。

ノルンはチセの可愛らしいハートのついた首輪を見ては（首輪と言っても、輪っかそのものは大きさにゆったりしているから、苦しいということはない）、口元を緩めてしまう。

首輪は、この世界でオスからメスに渡される結婚の証。

そう、彼女はノルンの第二夫人なのだ。

あとチセにはとても大きな秘密がある。

それは魔法が使える、ということ。

ノルンも魔法についてはチセから教えてもらったりして、知識を得ている。

どうやらこの世界には魔法が存在するらしいが、それは大っぴらにはできないらしく、秘密になっている。

ちなみにチセにお兄ちゃんと呼ばせているのは、単なるノルンの趣味である。

「ボクが持つから大丈夫。これくらいなんでもないよ。——あ、忘れてた。ちゅっ」

チセのほっぺにキスをする、チセは恥ずかしそうに身悶えながらも、ノルンのほっぺにキスを返してくれる。

「ちゅっ♡」

ほっぺなのは以前唇にキスしたら、顔を真っ赤にして気絶してしまったからだ。

「お、お兄ちゃん」

「まだ馴れない？」

「は、はい。初めての結婚ですので……」

「そのうち馴れるよ。でもそのままの初々しいチセも好きだけど、ね」

台所に野菜やお肉、魚を置いた。

「今日の夕飯はなに？」

「できてからのお楽しみです」

「チセの料理はなんでも美味しいから、楽しみだよ」

「えへ♡」

チセは嬉しそうにほっぺたを桜色に染めて、モジモジした。

（やっぱチセは小動物みたいで可愛いな）

ノルンは思わず、チセの頭をよしよしと撫でてしまう。

手のひらに、よく手入れの行き届いた柔らかな髪感触が広がる。

「お兄ちゃん……♡」

チセは嬉しそうにはにかんだ。

尻尾が揺れて、耳も嬉しげに動く。

「そ、それじゃあ、待ってて下さいねっ」

「了解」

ノルンは台所を出て、居間で本を読んで待っているように思っていると、

「ただいまっ」

そう元気な声と一緒に、扉が開いた。

「おかえり、ミーシア」

「ノルン。ただいま」

ミーシアと、ちゅつと唇を触れ合わせる。

彼女は鮮やかなピンクの髪がチャームポイント。

腰まで届きそうなくらい長いロングヘアをツインテールに結わえ、青い瞳は大きく円らで、元気な光が瞬く。

その笑顔を見ているだけで、こっちまで元気がもらえるような明るい女の子だ。

ミーシアは、近所のカフェのウェイトレスとして働いていた。

この世界では、女性が働いて家計を支えるらしい。

ミーシアの首元にも、チセと同じハートの飾りがついた首輪をしている。

彼女は第一夫人。

チセとミーシアは小さな頃からの付き合いだけあって、息はぴったりで仲良くしてくれているのでノルンとしても嬉しい限りだった。

「ミーシア。今チセがご飯を作ってくれてるよ」

「チセ！ 私も手伝うね！」

「それじゃあ、ボクも……」

「ノルンは旦那さんだから、座ってて」

ノルンは立ち上がるとしたが、肩を押さえられて座らされる。

エプロンをしてチセと並ぶミーシア。

仲良く話しながら手を動かす二人の後ろ姿を、ノルンは微笑ましく眺めていた。

「ノルン、お待たせ」

「おお！」

ノルンは思わず声を上げてしまう。

お皿にたっぷり盛られたのは、クリームシチューだ。

食欲をそそる香りが鼻腔をくすぐり、ゴロゴロした野菜がたっぷり入っている。

それから三人で食べられるか分からないくらい大きなパン。

そして緑黄色野菜たっぷりのサラダ。

「チセ、ミーシア。すごい豪華だね！」

「お兄ちゃんに喜んで欲しくって……。喜んで下さいましたか？」

チセがモジモジする。

今すぐ抱きしめたいくらい可愛い。

「すごい喜んだよ！」

「ノルン。パンも食べてね」

「いつの間に？」

「あらかじめ私がつけておいたの」

「ミーシアもありがとう」

「ふふ。じゃあ、ノルン、チセ、食べよう」

三人で「いただきます」と声を合わせて、早速クリームシチューに手をつける。

コクのある味わいで、野菜を口に入れた瞬間、ほろほろと崩れて旨味が口の中いっぱい広がった。

「おいしい！」

元の世界では身体に悪い食事ばかり摂っていたから、こういう美味しい料理（それも奥さんによる手料理！）を味わえるのは何にも代えがたい幸せだ。

パンも柔らかく、甘みが口の中に広がる。

「ミーシア、仕事はどうだった？」

「うん、やっぱり人とお話ししたりするのは好きだから、楽しいよ。常連さんに私の顔を見ると、元気をもらえてって言うてもらえたし」

「変なお客さんはいない？」

「変？」

「色んな人がお客さんでいるでしょ？　なんか、いろいろ……嫌な思いをしたりさ」

あははは、とミーシアは、ノルンの言葉を笑い飛ばす。

「もー。ノルンってば、なに言ってるの？　お客さんはほとんど常連さんなんだよ？　そんなことあるわけ……あ」

「やっぱり何かあったの!？」

ミーシアはポケットを探ると、お菓子を取り出した。

「な、なにそれ」

「お仕事してたら、常連のおじいさんからお菓子をもらったの。ご飯が終わったら食べようね」

ノルンは、ほっと胸を撫で下ろした。

「まあ何事もなくよかった」

「何もあるわけないよ。ノルンったら、おかしい」

「チセも、ミーシアとカフェで働いてみたら？　厨房担当とか……」

ノルンが話を振ると、チセはぷるぷると首を横に振った。

「わ、私は無理です……。しょ、初対面の人とはすごく緊張しちゃいますし」

うんうん、とミーシアはうなづく。

「チセは昔から人見知りだったからね。ノルンだって、初めて会った時のチセのことは覚えてるでしょ？」

「もちろん。泣かれちゃうかと思ったもん」

「そ、それは……。すみません……。っ」

ミーシアがやんわりと間に入った。

「もー。ノルン。チセを困らせないで」

「ごめんごめん」

「チセは家事が得意なんだから、外に働きに出る必要はないの。だって私たちが二人とも働いたら、誰が家のことをするの？」

「まあ、そっか」

「それに、チセはノルンのお世話をしたいんだもんね？」

「そうです、お兄ちゃん！ 私はお兄ちゃんのお側でお料理したり、洗濯物を畳んだり、家の掃除をしたりするのが楽しいんです！」

チセが勢い込んで言った。

「あはは。そんな風に言われると照れちゃうな」

「ノルン、別に変なことじゃないよ。だって私たちは、ノルンのことが大好きなんだから。ね、チセ」

「そうです！」

二人から言われて、ノルンは本当に照れてしまった。

夕食を食べ終わり、ミーシアとチセと本を読んだり、ボードゲームをしたりして楽しんだ。

時間はあつという間に過ぎてしまい、就寝の時間。

「チセ、ベッドに行こう」

ノルンがチセの肩を揺するが、「んん……。っ」と小さく声を漏らすばかりで、起きなかった。

「チセ、寝ちゃったみたい」

ミーシアが微笑ましそうに、チセの寝顔を覗き込んだ。

「じゃあ、ベッドへ寝かせてくるよ」

ノルンはチセを起こさないよう気をつけながら抱き上げると、寝室へ運んだ。

ベッドに寝かせると肩までしっかり布団をかけて、寝室をあとにする。

（こう見ると、チセはまだまだ子どもって感じたなあ）

口元を緩めていると、背中に柔らかな感触がひつついた。

「ノルンっ♡」

「うわっ」

ミーシアが背中に抱きついてきたのだ。

「しーっ。大きな声を出したら、チセが起きちゃうよ？」

「い、いきなりだったからつい……」

「ふふ。ノルンを驚かせたくって。ね、来て」

手を引かれてリビングに戻ると、一緒にソファに座った。

ノルンの左隣に座ったミーシアは、潤んだ瞳を向けてくる。

「最近、なかなか二人つきりになれなかったから……♡」

ミーシアがそつと目を閉じた。

「ミーシア」

ノルンは優しく唇を塞ぐ。

帰宅した時にしたのよりずっと、情熱が籠もった口づけ。

みずみずしい唇と触れ合うだけで、気持ちいい。

「ん……っ♡」

ミーシアの肩がピクンと震える。

彼女の柔らかな舌が、ノルンの唇を優しく撫でた。

今度反応するのは、ノルンの方だ。

「ミーシア、ネットリとしたキスをするんだねっ」

「ノルンが、私をこんなにしたんだからあ」

ミーシアの猫耳が、ピクピクと小刻みに揺れる。

ノルンも舌を這わせ、お互いに舌を絡め合う。

「んん……っ♡ の、ノルンう……♡」

ミーシアは甘く囁きながら、舌を積極的に動かしてくれる。

ピチャピチャと淫靡な音が二人の唇からこぼれ、ノルンの身体が芯から火照る。

「ミーシアのキス、すごく気持ちいいっ」

「わ、私もっ。ノルンとのキス、蕩けちゃう……っ♡」

ミーシアは湿った息遣い混じりに、積極的な口づけをしてくれる。

透明感のある肌が、ぼうつと艶やかに紅潮していった。

「んちゅっ♡ ちゅびい♡ れろっ♡ んんっ♡ ああっ♡ んふう♡」

ミーシアは唇の周りをヨダレまみれにしながら、ますます熱っぽい口づけをしてくれる。

ノルンが唇を離すと、「ああっ♡」と寂しそうな声を漏らすほどだ。

「ノルン、どうして？」

「キス以外のこともしたいから」

席を立ったノルンはミーシアの前で両膝をつくと、スカートをまくり上げた。ピンク色の下着が露わになる。

「ああっ♥ ノルン……♥」

「下着に、染みがついちやってるね」

「そ、そんなこと言わないで……っ♥」

「ほら、ミーシア。パンツを脱がせるからねー」

「ああんっ、私、子どもじゃないから」

「そうだね。子どもがあそこをお汁で、ぬるぬるにするわけないもんなっ」

下着を脱がせれば、蜜が糸を引いた。

ツルツルの恥丘、そして秘めやかな蜜裂。

ノルンがクンクンと匂いを嗅げば、甘酸っぱい発情の香りがした。

オスを誘うフルーティーなフェロモン。

「匂い嗅いじゃだめえっ♥」

ミーシアはノルンの頭を押して遠ざけようとするが、その力は弱々しい。

「大丈夫。ミーシアをたっぷり気持ちよくするからっ」

ノルンは蜜にまみれた秘処に吸いつく。

「あああああんっ♥♥」

ミーシアはソファアの背もたれに背中を押しつけるように、全身をビクンッビクンッと痙攣させて果てた。

「ミーシア、大丈夫？」

「んん♥ ぜんぜん大丈夫じゃないっ♥ ノルンがいきなりするからあ♥」

ミーシアは眉を顰め、尻尾をフリフリと上機嫌に揺らす。

「感じてくれて嬉しいよ。もっと気持ちよくするから」

「ああんっ♥」

絶頂したことで、さらに蜜を溢れさせる蜜裂を舌で引つ掻くように刺激すれば、柔肉がキュンッと伸縮する。

「ミーシア、気持ちいいでしょ？」

「ああっ♥ はあっ♥ き、気持ちいい……♥」

ミーシアは恍惚とした表情で、よがった。

さらにノルンは、陰核を舌先で優しく押す。

「ああああんっ♥」

ミーシアはさらに派手な反応を見せながら、上り詰めてしまう。

プチャッと小さく潮を吹く。

「ここ、すごく気持ちよかったんだ」

「頭が爆発しちゃうそうになっちゃうから、くりとりす、ダメえっ♡」

ミーシアは肩を大きく上下させて、声を上擦らせた。

「ペロッ」

「ああああんっ、ダメって言ったのにいいっ♡」

ノルンが陰核を優しくしゃぶれば、ミーシアは涙を流しながら極まる。

ミーシアは全身を痙攣させ、

「ノルン……そ、そこばかり本当にダメっ♡ お、おかしくなりすぎちゃうから許してっ♡
と、請うた。」

「じゃあ、これはどう？」

ノルンは右手の人差し指を、ゆっくりとミーシアの秘処へ埋めていく。

火照った膣粘膜が、指先に吸いついた。

「あああっ♡ ノルンの指が私の中に入ってくるうっ♡」

膣内を傷つけないように気をつけながら、根元まで押し込む。

蜜肉が指を抱きしめるように、締めつけてきた。

「ミーシアのおま×こ、ボクの指に夢中だねっ」

「あそこだけじゃないのっ。私だってノルンに夢中なんだからあっ♡」

「分かってる」

ノルンはミーシアとディープキスを紡ぎながら、指を前後にゆっくりと動かす。

「ふあっ♡ あああっ♡ んんん……っ♡」

ミーシアは秘処からこみ上げる快感に負けまいと、ノルンの唇を貪る。

噛みつかれるような口づけながら、ノルンはミーシアの貪欲さに嬉しくなった。

「れろれろおっ♡ あああっ♡ の、ノルンの指が、私のあそこを掻き混ぜてるううっ♡ グチュグチュされちゃって……ん
んっ♡」

「ミーシアのペロもおま×こも、どっちもボクの身体を締めつけてすごいんだ」

ノルンも夢中になって、ミーシアをさらに気持ちよくしようと奮闘する。

と、指を締めつける媚肉がプルプルと小刻みに震え出せば、ミーシアの上擦りが熱を運び、息遣いがますます荒くなった。

「う！ またイっちゃいそうなんだ」

「んっ♡ んうっ♡」

ミーシアはこくこくと小刻みにうなずく。

「イってよっ」

「イくううっ♡♡」

潮を指にちびらせながら、ミーシアは背を仰け反らせた。

ミーシアの身体は、火傷^{やけど}してしまいそうなくらい熱い。

「あああっ……」

ミーシアはソファアーにぐったりと崩れ落ちてしまう。

「ミーシア平気!？」

「はああっ♥ はああっ♥ ああっ♥」

ミーシアは大きく息をしながら、目の焦点が合っていないかった。

(やばい。調子にのってイかせすぎちゃった)

声をかけ続けたその時、ミーシアの目がノルンを見た。

「目が覚めてよかった、ミーシア——うわっ!？」

本物の猫のような俊敏さでミーシアが飛びついたのは、テントを張ったズボンの股間。

「ノルン、こんなにおちん×んを、膨らませちゃってる……♥」

ズボンを下ろされてしまえば、あっという間にペニスを引っ張り出されてしまう。

露わになった男根の先端部分は、我慢汁でベチョベチョに濡れていた。

(ノルンのおちん×ん、ビクビク脈打って可愛い……っ♥)

ミーシアは湿った吐息混じりに肉塊のすごさに圧倒されつつも、こぼれる雫を嬉々として舐め取った。

「う!」

ノルンが顔を引き攣らせた。

「ふあっ♥ ノルンだっけ発情しちゃってるうっ♥ 気持ちよくなってるの、私だけじゃなかったんだっ♥」

「あ、当たり前だよ。ミーシアのキスもおま×こも気持ちいいんだから、昂奮しないわけないだろうっ」

「よかったあ♥ れろれろっ♥ ちゅぴいっ♥ んっ♥ ぢゅるるっ♥ れらあっ♥ ああ、すっごい♥ 舐めても舐めても、どんどん発情汁が溢れてきちゃうっ♥」

咽せてしまいそうなくらい濃厚なオスのフェロモンに、ドキドキと鼓動が高鳴ってしまう。

もつと舐めたい。もつとしゃぶりたい。もつともつともつと——。

ミーシアはノルンを上目遣いに窺う。

「ミーシア、しゃぶって!」

「あむうっ♥」

ミーシアは嬉々としてノルンのペニスに、大きく開けた口をかぶせる。

「むうう……んぐっ……んん……っ♥」

(ノルンのおちん×ん、顎が外れちゃいそうなくらい太い……っ)

それでももつと深く、もつとたくさん啜えたいという気持ちに、心が逸った。

「ミーシアっ!? そんなに無理しなくても……っ」

ノルンの顔が気持ちよさをこらえるように、顰められた。もっと気持ちよくなって欲しい。

自分が一方的に気持ちよくなるだけじゃなく、ノルンにも気持ちよくなって欲しい。

（だって私は、ノルンのお嫁さんなんだからっ♥）

愛情を込めて、ディープスロットをおこなう。

「んんっ……んぐ……ちゅう……んぐ……んぐ……」

根元まで咥え込むと、ペニスがビクビクと切なげに震える感触が口の中で響き、それだけで下腹の辺りがキュンツと戦慄わななく。

逸物の切っ先で喉を押されることさえ、気持ちいい。

「ノルン、どお？ 私の口、気持ちいい？」

ノルンは何かをこらえるようにしながら、うんうんとうなずいた。まるでさっきの自分みたい。

ノルンが気持ちよくなってくれるのが嬉しくって、ミーシアはますます激しく頭を動かしながらペニスを咥えた。一生懸命しゃぶり、こぼれる我慢汁をヂュルルツと吸る。

濃厚なフェロモン臭が、口内で溢れ返った。

「うううっ！ ミーシアの口の中で蕩けちゃいそうだ！」

陰茎がビクビクと戦慄わななきながら膨張する。

（ノルン!?）

びっくりしながらも、ミーシアはノルンのペニスを吐き出すまいと唇を窄めた。

と、ノルンに頭を抱えられたかと思えば、

「ンンン!?」

ノルンが腰を動かし始めたのだ。

口内を引っ掻くように肉棒をなすりつけられ、グチュグチュと掻き混ぜられる。

口の端っことから、ヨダレが泡立ちながら滲んだ。

「み、ミーシア！ 勝手に動いちゃってごめん！ でもこうしないと、おかしくなっちゃいそうで……!」

「大丈夫だよ、ノルンっ。もっと動きたいように動いてっ！ ノルンを蕩けさせるためにしてるんだから!♥」

こんなにも熱心に腰を動かすくらい気持ちよくなってくれていることが嬉しくって、胸の中が温かくなる。

「ミーシア！ ミーシア……っ!」

ペニスがこれまでと違う反応を見せると、同時にフルーティーな甘い香りと味が、口の中に満ちる。

「ノルン、出してえ♥」

「うううううう!!」

顔をくしゃくしゃにしながら、ノルンはそのまま果てた。
瞬間、ドロドロした精液が喉奥めがけ押し寄せた。

「ンンンンンツツツ♥♥♥」

ドロドロした子種をぎゅぎゅつと、喉を鳴らしながら嚥下していく。

苦しかったけど、ノルンの子種を無駄にしたくなかった。

お腹がぼうつと熱を帯び、恍惚としてしまう。

（ノルンの精液を飲みながらイっちゃう♥）

ノルンはペニスを咥え込みながら、一生懸命精液を飲んでくれるミーシアを微笑ましく見つめた。

（ミーシアがボクの精液をぐくぐく飲んでくれてるっ。ああ、すごい！ボクのちん×んまで引っ張られそうだ！）
それも、飲んで終わりではなかった。

ミーシアは飲み終わるとペニスを解放し、射精直後でビクビクと戦慄しているペニスに優しく舌を絡ませ、鈴口に口づけをして尿道口の残滓まで余さずしゃぶってくれるのだ。

「ああ、す、すごいよ。ミーシア……！」

「汚れはしつかり落とさなきゃ♥ ああ、ノルンのおちん×んって、やっぱりすごい……♥」

陰茎は、そっくり返ったように天井を睨みつけた。

熱っぽい視線を注いだミーシアは、甘いため息をつく。

そしてノルンのことを見た。

「ね、ねえ、ノルン……っ♥」

ミーシアはびったり太腿を閉じ合わせながら、しきりに擦り合わせていた。

「ミーシア。ボクのが欲しいんだよね？」

「うんっ♥」

「ボクもミーシアが欲しいよっ」

「嬉しいっ♥」

ミーシアは床の上で仰向けに寝転がると大きく両足を開いて、散々ノルンが舐めたり弄くったりしていた秘処を誇示する。
ただ両足を開くだけでなく、右手で割れ目を自分で弄くるのだ。

クチュクチュとミーシアが指を前後に動かせば、淫靡な音が弾けた。

「ノルン、来てっ♥ 私のここに、おちん×んをちょうだいっ♥」

ミーシアは甘えた言葉でノルンを求めてくれる。

ノルンはできるだけ体重をミーシアにかけないように気をつけながら、優しくのしかかって抱きしめた。

「ああ、ノルうんっ♥」

ノルンはミーシアの唇を奪いながら胸元をくつろげば、ささやかな胸が露わになる。

秘めやかな膨らみの頂きで、桜色の乳頭がツンと勃^たっていた。

「ミーシアのおっぱい、可愛いね」

「ねえ、ノルンっ♥ 胸の先っほがさっきからウズウズしちゃって、しょうがないのっ♥」

ノルンは右胸の乳首を優しく舐めた。

「ふあああっ♥ のるうんっ♥」

ミーシアは歓喜の声を漏らしながらノルンに抱きついて、もっと刺激して欲しいと言うかのようにしきりに身体を擦りつけてくる。

そんな行動も猫らしい。

ノルンは右胸を舐めたりするだけでなく、歯を立てて甘噛みする。

「ひいんんッ♥」

右胸だけでなく、左胸の乳首も優しく抓^{つま}んだ。

「ああああっ♥ ノルン……っ♥」



ミーシアは身を振らせながら、身悶えた。

息遣いは悩ましく弾み、瞳を涙ぐませて、小鼻を膨らませる。

そんなミーシアの発情した表情を目の当たりにしたら、股間がズキズキと疼いて仕方なくなる。と、そこへミーシアが鼻にかかった声で訴えてきた。

「の、ノルンっ♡ このままじゃまたイっちゃいそうだから、私のおま×こにおちん×んを入れてえっ♡」

うなずいたノルンは、ミーシアのヨダレまみれの逸物を秘裂へそつと押し当て、力をかける。と、ぬるぬるの肉洞めがけペニスが埋まっていく。

「はあああっ♡」

ぎゅっときつい膣圧に襲われながらも、ゆっくりと腰を押し進める。

グチュッ！ ズチュウッ！ ヌチャァ！

「ノルンのおちん×んがきてくれるうっ♡ わ、私の中に深いところまでくるのおおお♡♡」

ミーシアは手足をじたばたさせながら、小さく上り詰めた。

ペニスを締めつける膣肉が引き攣る。

ミーシアの長い絶頂の間、ノルンは暴発しないようにこらえた。

「ノルンのおちん×ん、私の行き止まりにまで来てるよっ♡ 私の中が気持ちいいって震えてるうっ♡」

ミーシアは下腹をさすりながら、幸せそうなうっとりした声で、独りごちた。

「ボクもミーシアのおま×こを感じてる。ボクのに吸いついて……蕩けちゃいそうだよ」

「嬉しいっ♡」

「そろそろ動いてもいい？」

「うん♡ お願いいっ♡」

ノルンが腰を引けば、ミーシアは「ああああんっ♡」と恍惚とした嬌声を漏らしてくれた。

腰を引き、返す刀で一気に奥まで埋める。

「ああああんっ♡ ノルンっ♡ ノルウウッ♡」

ミーシアはキスを求めた。

唾液でぬるぬるに濡れた舌を悩ましく絡め合わせれば、快感がさらに増幅され、ノルンは居ても立ってもいられなくなって腰を前後に動かす。

パンパンパンツ!!

「ああっ♡ はあああんっ♡ んっ♡ は、激しいっ♡ ノルンっ♡ ズブズブ刺さって気持ちいいっ♡ あああああんっ♡♡」

ミーシアは足の指を丸め、身悶える。

腰を動かすたび、蜜汁の飛沫がプチャプチャツと爆ぜた。

遅しいペニスが激しくミーシアの胎内を、掻き混ぜる。

ミーシアの柳腰に甘い電流が閃き、ビクビクと全身が戦慄く。

（ノルンの遅しいおちん×んが、私の中を埋め尽くしてるうっ!!）

ゴツゴツした形状の逸物で深い場所を突かれるたび、腰がクネクネと躍ってしまう。

「あああっ♥ ノルン、感じるよ♥ おちん×んが私を気持ちよくするために動いてくれて、幸せえっ♥」

ミーシアはツインテールを揺らしながら、ノルンの腰遣いに酔い痴れる。

子宮口をズンズンと突かれると、もっとノルンと密着したくなった。

（ノルンを感じたいっ!）

ミーシアはキスをしながら腰を蠢かし、猫の尻尾をノルンの身体に巻きつけてスリスリと身体を擦りつけて、甘えまくった。

「立つよ?」

「へっ!」

不意にお尻を握りしめられたかと思えば、ノルンが結合したまま、いきなり立ち上がった。

「い、いきなりめええっ!」

ますますノルンにしがみつく。

（おちん×んがさつきよりも、深い場所にきてるよおっ♥）

正常位で交わるよりも、ペニスがより深く食い込んだ。

体重が乗れば、突き殺されてしまいそうな心地になりながらも、気持ちよくって腰を動かさずにはいられなくなった。

ヌチュ! ヌチュッ!

桃尻を捏ねられながら、杭打ちにされる。

「この格好はどう、ミーシアっ?」

「す、すごいのおっ♥ ふにやああっ♥ しゅきいつ♥ ノルンのおちん×んだいしゅきいつ……♥」

ミーシアはノルンのペニスに翻弄されるがまま、腰を動かして、深く逸物を受け入れようと身動く。

「ミーシア!」

ノルンが昂奮に染まった声を上げ、ミーシアの胸に顔を埋めてくる。

「ンンンッ♥」

ミーシアは仰け反り、全身を震わせた。

乳頭を甘噛みされ、舌先で転がされ、吸いつかれてしまう。

ミーシアの背筋に甘い電流が逆^{ほとぼし}った。

ミーシアは、身体を紅潮させながら甘える。

同時に膣圧が高まり、ペニスへの締めつけがきつくなった。

「ミーシアのおま×こ、最高だよっ」

「あぁっ♥ ノルンのおちん×んもイイツ♥」

汗を飛び散らせ、ノルンはますます昂奮したように身動く。

「ノルン♥ ノルン♥ ノルン……っ♥」

ミーシアは執拗に口づけを求め、舌を絡めれば絡めるほど、蜜に濡れた膣肉はますます収斂^{しゅうれん}する。

桃尻を弾ませ、ツインテールを波打たせ、逸物を深い場所で啜えた。

胎内で、ビクンビクンと逸物が戦慄く。

蕩けてしまいそうな熱気と柔らかさで、骨抜きにされてしまいそうだったが、ノルンはミーシアを最高に気持ちよくしたい一心で腰を叩きつけ続ける。

パンパンッ！ プヂュッ！ チュプッ！ グピュッ！ スツプッ！

「はぁぁっ♥ あぁぁんっ♥ ノルンのおちん×んが激しいっ♥ 壊れちゃう♥ 私のおま×こ、壊れちゃうっ♥」

ミーシアの表情が、喜悅に染まる。

腰を前後に動かすたび、愛液が泡立ちながら、掻き出された。

まるで失禁してしまっているみたいだ。

「好きっ♥ ノルン、好きいつ♥」

ミーシアは全身を使ってノルンを食べる。

（ミーシア！）

そんな溺れそうな発情膣肉に、ノルンはいつまでも、こらえられない。

「み、ミーシア！ 出そうっ！」

「ノルン♥ 出してえっ♥ 私も気持ちよくなりたいからぁっ♥ わ、私も……も、もううう……っ♥」

「い、いくよ……！」

ノルンは、ミーシアの胎内めがけマグマを解き放った。

びゅるううっ！ びゅるううっ！ びゅぶうっ！

「にやぁぁぁぁっ♥ あぁ、出てるうっ♥ ノルンの精液がどびゅどびゅって、子宮の入り口をたくさんノックしてきてえ

……イクウウウウウッ♥」

ミーシアは、ノルンの背中に爪を立てながら激しく極まった。

そうかと思えば、全身から力が抜けて崩れ落ちそうになったので、ノルンは慌ててミーシアを抱き留めた。

ミーシアが潤んだ眼差しで、ノルンを見つめてくる。

涙ぐんだ瞳の中に、ノルンの姿が映り込んだ。

「のるうんの精液い、たくさん中に出してもらえたぁっ♥ 嬉しいいつ♥」

「ボクもミーシアの中にたくさん出して嬉しいよ……っ」

膣内に収まりきれず逆流した樹液が、二人の足下に液溜まりを作る。

二人は汗だくのまま、ソファ―に寝転がった。

チセは、ミーシアとノルンが留守の間に（ノルンは散歩中）、家の用事を済ませる。

掃き掃除を終えると、干していた洗濯物を取り込んだ。

物干しにかけているシーツを取り込む時に、顔を埋める。

（んーっ。お日様のにおい……）

チセは、お日様の香りが大好きだ。

ぽかぽかする日向ひなたにいただけで、幸せな気持ちになれる。

お日様にさらした布団にこっそり飛び込んだこともあった。

洗濯物を取り込むと、ノルンたちの洋服を畳む。

その時にノルンの洋服を広げる。

辺りを見回して、誰もいないことを確認すると、洋服にも顔を埋めた。

もちろん洗濯をしているからノルンの匂いは残っていないが、ノルンに抱きしめられているような気分になる。

こんな気持ちを抱けるようになったのも、ノルンとミーシアのお陰だ。

（お兄ちゃんとミーシアのために、美味しい料理を作らなきゃっ）

よし、と拳を握って、エプロンをして台所に立つ。

今日の夕食は、ハンバーグだ。

「ふんふん♪ ふうーんっ♪」

耳をピクピク、尻尾をフリフリしながら挽肉を捏ねる。

「うんっしょっ。よいっしょっ」

小さな手を一生懸命動かす。

「――チセ」

「ひゃっ!？」

びくっとして涙目になりながら振り返れば、ノルンがいた。

「お兄ちゃん!？」

「びっくりした?」

「び、びっくりしましたあっ」

涙の粒を浮かべながらうなづく。

「ごめんごめん。でも『ただいま』って言ったよ? 聞こえなかった?」

「集中してたみたいです。――おかえりなさい、お兄ちゃん」

「ただいま、チセ」

チセのほっぺに触れるだけの口づけをする。

「今日の夕飯は？」

「ハンバーグです♥」

「じゃあ、ボクも手伝うよ」

「大丈夫です。馴れてますから……ああっ♥」

チセはピクンツと震え、頬を染めた。

「お、お兄ちゃん……っ♥」

チセがモジモジする。

「どうしたの、チセ？」

ノルンがわざとらしく聞いてくる。

「ううう……っ。そ、そこ、違いますからあっ♥」

ノルンはチセのおっぱいを、服ごしに触っていたのだ。

「チセ、どういう風に捏ねたほうがいいの？」

「んんっ♥ く、空気を抜くみたいにい……ああっ♥」

チセは柳眉を顰め、身を振る。

「こう、かな？」

「アアッ♥」

ノルンの大きな手が無遠慮におっぱいを、揉みしだく。

洋服ごしだというのに、身体に電流が走り抜けてしまう。

「お、お兄ちゃん……だ、だめっ♥」

「ダメじゃないよ。だってハンバーグを作ってるんでしょ？」

「そ、そこは挽肉じゃあ……♥」

「でも揉みたいんだ」

と、ノルンの手が不意にブラウスをたくし上げ、胸を露わにさせてしまう。

「ひゃあっ!？」

「やっぱり直接揉んだほうが、いいよね？」

かすかな膨らみの上で色づく乳頭は目立っていた。

チセのささやかな胸をノルンの手が包み込めば、乳首を指先で抓んで引っ張る。

「ひあああ……っ♥」

頭の中が真っ白になり、チセは呆気なく絶頂を遂げてしまう。

腰が抜けてしまうが、お腹にノルンの左手が回されて支えられた。

「ンン……っ♥」

そこでチセは、右のお尻に密着する硬い感触に、身を強張らせた。

「あ、当たってます……♡」

ズボンごしなのに、その硬さやビクビクと戦慄く具合も生々しく伝わる。鼓動が高鳴った。

ノルンは帰宅して声をかけたが、チセは台所で作業に熱中しているせいか、ノルンに気付いていないようだった。最初はただ驚かせようと思ったただけだったが、チセの無防備な後ろ姿に別の気持ちが湧き上がった。そうして後ろから抱きついたので。

チセのおっぱいを揉んでいるうちに股間が熱を持ち、痛いくらい張り詰める。

彼女は恥ずかしがるように距離を取ろうとするのだが、その時にペニスをお尻で刺激されてしまう。

「ふぁっ♡ お、お兄ちゃん……っ♡」

「チセの乳首、カチカチだね」

チセの狐耳がピクンツと震えた。

「い、言わないでください……♡」

チセは涙目になって、いやいやとかぶりを振った。

「ボクを気持ちよくして」

ノルンはチセのスカートを下ろしていけば、幼児パンツ(?)めいたデザインの白いパンツに包まれた、大きめのお尻が露わになった。

(胸はミーシアの方が大きいけど、チセはお尻が立派だ)

「チセは、お尻が立派だね」

「~~~~♡」

首だけで振り返ったチセは、瞳をウルウルさせるが、それがまた可愛い。

「そんな顔しないで。褒めてるんだから」

「そ、そうなんですか？」

「お尻が大きい人は安産型っていうし」

「あんざん……?」

「赤ちゃんをたくさん産めるって感じかな？」

「……あ、赤ちゃん……。お兄ちゃんの赤ちゃん……」

「うん」

「そ、それなら嬉しいです♡」

チセは「えへ」と微笑んだ。

「パンツ、脱がせるよ？」

「は、はい♡」

下着を下ろせば、柔肌の桃尻がふるんと揺れながら、こぼれ出た。
ノルンは右手で、尻を捏ね回すように揉む。

「ふぁっ♥」

手のひらに桃尻が吸いつくモチモチした感触が、気持ちいい。

ほどよく汗ばんでいるのも、劣情がそそられた。

「チセのお尻、ホントに可愛いね」

ノルンはズボンを脱いでペニスを露わにすると、それを尻たぶに密着させた。

「お兄ちゃん……っ♥」

我慢汁を桃尻に塗りつけるように、ペニスを動かす。

「チセ。ボクのおちん×んはどう？」

「……お、お兄ちゃんの、ビクビクしてて……っ♥」

「おちん×んって言って」

「ふぁっ♥ おちん×ん……っ♥」

恥じらうチセの可愛らしさに、胸がドキッとした。

「チセのお尻もすごくふかふかしていいね。こうしてスベスベのお尻に擦りつけてると、すごく気持ちいいんだ」

「お兄ちゃん……っ！」

チセの声は恥じらいを感じさせながらも、いやらしく上擦っていく。

「チセ、出る！」

「ンンンンン……♥」

チセのお尻めがけ勢いよく射精する。

ビュルビュルと勢いよく解き放った樹液で、チセのお尻がドロドロに汚れた。

「ンンン♥ お兄ちゃんの、熱いですう……っ♥」

チセもビクビクと全身を痙攣させる。果てたようだ。

「イってくれて嬉しいよ」

「はぁっ♥ あぁっ♥ んっ♥ あぁんっ♥」

肩で息をして呆然としていたチセだったが、円らな瞳を見張った。

「あ、お兄ちゃん……っ」

そう、チセはお尻に押しつけられた逸物が、まだ逞しいままだということを、そこで察したのだ。

「うん、一度じゃぜんぜん足りないんだ」

「えっと……それじゃ、何をしたら……？」

「チセは、そのままでもいいよ」

「？」

ノルンは不思議そうな顔をするチセに、両足を少し開いてもらうよう頼んだ。
開いた足の間に、元気なままの逸物を差し入れた。

「ひゃうっ!？」

いきなりのことに、チセが狐尻尾をビーンと立たせた。

ノルンは剥き出しの秘処にペニスを押し当てるように調節しながら、密着させる。

「お兄ちゃん、こ、これなんですかあ……っ♡」

いきなりのことにチセは慌てていた。

「素股だよ」

「す、また……?」

「このままこうして、おちん×んを動かせば……」

解説を交えながら、ペニスを引く。

「ふああああんっ♡」

チセは全身を粟立てながら、身悶える。

同時にラブジュースが掻き混ぜられて、ヌチュヌチュと悩ましい音をたてた。

「ふあっ♡ ああっ♡ お、お兄ちゃんっ♡ ゾクゾクしちゃうのおっ♡」

チセは爪先立ちになって、上体を伸び上がらせた。

逞しい男根がチセの太腿の間で激しく前後に動くたび、背筋に快感の電流が這い上がってくる。

（これ、せつくすしてるみたい……っ）

チセは小鼻を膨らませ、喘ぎ声を弾ませる。

と、耳に湿った息遣いがかかった。

「太腿を締めて、ボクのを圧迫して」

「は、はいっ♡ お兄ちゃんっ♡」

チセは、ノルンに言われるがまま太腿を閉じれば、陰茎の熱く硬い存在感を嫌というほど感じてしまう。

（お兄ちゃんのおちん×んがビクビク震えるのを、すっごく感じちゃうっ。お兄ちゃんのおちん×んって怖い形してるけど、
こうして震えてるのを感じると可愛い……っ）

涙目のチセは、腰をクネクネと揺らしながら、ますますペニスを圧迫してしまう。

その間もペニスは激しく動き続け、チセの秘部を蕩けさせるのだ。

「チセ、素股は好き？ 気持ちよくなってくれてる？ 教えて」

「お兄ちゃん、気持ちいいですうっ♡ す、すまたしてると、まるでせつくすしてるみたいなんです……♡」

昂奮が高まれば、勃起してる乳首がジンジンと熱く疼く。

「こっち見て」

優しく振り向くよう顎を掴まれた。

「お兄ちゃん……んんっ♡」

振り返れば、唇を奪われた。

（お兄ちゃんのツバ……）

すぐに舌が押し入ってくれば、チセの小さな舌を巻き取り、ぬるぬると擦り合わせながら唾液を飲ませてくれる。餌を求めるヒナみたいに、チセはノルンのツバをこくこくと飲んだ。

「んちゅっ♡ ちゅるっ♡ んふっ♡ はあっ♡ お兄ちゃんとのキス、気持ちいいですうっ♡」

気持ちよくなると、自然と太腿を締めた。

素股とキスの快感で、頭がぼーっとしてしまう。

太腿の間でペニスがぐぐツと膨張した。

「んんっ!？」

チセはびっくりして、口づけをほどいてしまう。

「チセ。ボク……!」

ノルンの言わんとしていることが、痛いくらい伝わってくる。

「お兄ちゃん、出して下さいっ♡」

「ううう!」

チセの太腿に圧迫されるがまま、白い逆りが弾けた。

とろんとした眼差しで、床に飛び散っている精液を眺める。

「ああ、床が汚れちゃったあ♡ 拭かなきゃ……♡」

「そのままで大丈夫だから」

「ふえ?」

ノルンは戸惑うチセを振り向かせ、対面させる格好になった。

じっと見つめられると、鼓動が高鳴る。

「お兄ちゃん……?」

「チセ。見て」

ノルンは昂ぶった陰茎を突きつける。

目が離せなくなった。

チセが、ノルンのペニスをじっと見つめながら、小さく生唾を飲みこむ。

「チセが欲しい。いいよね?」

「……は、はい。お兄ちゃん」

チセは今や、エプロンすら満足にまもっていない。

ノルンは、男根をチセの秘処に押し当てた。

「あぁっ♥ お兄ちゃんの大クビクビしてるおちん×ん、私のあそこに吸いついてきますぅっ♥」

「チセのおま×こ、グチョグチョだね。そんなに素股がよかったんだ」

「うう……」

チセは恥ずかしがって俯いてしまうが、その双眸は淫靡に潤んでいた。

「チセ。入れるよ？」

「はいっ♥」

ペニスをゆつくりと挿入していく。

ぬるぬるに潤んだ柔肉がペニスに殺到すれば腰がヒリヒリして、全身が総毛立った。

（チセのおま×こ、すごく窮屈だ……っ）

気を抜くと、あっという間に搾り出されてしまいそうだ。

「お兄ちゃんが深く入ってきますぅ♥♥」

奥まで押し込めば、チセは「んんんん〜♥」と噎ぶ。

同時に絶頂して、痙攣した秘壺に根元まで啜えられる。

ノルンは慌てて肛門に力を入れ、暴発をギリギリ抑えた。

「お、お兄ちゃん……っ♥」

「チセ、イってくれたんだね。おま×こで、ぎゅうぎゅう締めつけてくれて嬉しいよっ」

「ううう……♥ そんなはつきり言われちゃうと、恥ずかしいですぅ……っ♥」

チセが弱りきって、狐耳を萎れさせる。

「チセのおま×この奥までいけたよ。分かる？」

チセが上目遣いに見てくる。

「……お兄ちゃんのおちん×んが大クビクビ震えて……っ♥ んんっ……お腹が引き攣っちゃってますぅ♥」

「チセ」

ノルンは唇を塞ぐと同時に、腰を引く。

「んんんんんんっ♥」

チセは激しい口づけを交えながら、快感をこらえようとしているようだった。

腰を前後に動かすたび、ヌチャヌチャツと悩ましい音と一緒に蜜汁を掻き出していく。

「あぁっ♥ はぁんっ♥ お兄ちゃんのおちん×ん、私の深い場所にまできて、しゅごいっ♥」

チセは涙の粒を目の端に浮かべながら身悶える。

そんな顔をされたら、もっといじめたくなる。

ディープキスをさらに激しくしながら、腰を叩きつける。

「ふぁぁぁぁぁぁんっ♥」

パンパンと腰を打ちつければ、チセはもつと言わんばかりに柳腰をクネクネと動かした。

ノルンの逞しい男根が、ズンズンと深い場所を掻き混ぜる。

奥を突かれるたび、快感電流が爆ぜた。

「ンンンッ♥ お兄ちゃんっ♥ 気持ちいいのおっ♥ ああんっ♥ もっと深い場所に来て下さいっ♥ いっぱいしてください……っ♥」

チセは舌つ足らずに喘いだ。

繋がっている部分からはブヂュブヂュと糸を引く音が間断なく響き、さらに逞しい男根が引かれると、身体の深い場所にあるものが全部引つ張り出されてしまいそうになるような気がして、快感が膨れ上がった。

（お兄ちゃんとせつくすをすればするほど、快感が強くなってる気がするうっ）

チセは吐息を弾ませながら、ますます求める。

「お兄ちゃんっ♥ もっと深くまできてくださいっ♥ 私をめちゃくちやにしてくださいっ♥」

次の瞬間、ペニスが一気に抜けてしまった。

「お兄ちゃん、私の中、気持ちよくありませんでしたかっ!？」

「そうじゃないよ、だって、チセ言っただろ？ もっと深くまでって。だから……こういう体位でするんだよっ」

と、不意にノルンに抱きかかえられたチセは床に下ろされ、四つん這いの格好にさせられた。

「お兄ちゃん!? こ、この格好……っ♥」

「チセのおま×こやお尻の穴も、丸見えになっちゃってるね」

どっちもヒクヒクと戦慄している。

「お兄ちゃん、見ないでえっ♥」

チセは抗おうと身動ぐが、ノルンががっしりとお尻を握りしめているせいで、どうにもならなかった。

「この格好のまま、入れるよっ」

ズブズブッ！

「ああああああんッ♥♥」

挿入されれば、蕩けた声が出てしまう。

「お兄ちゃんッ♥ ああああんっ♥」

ノルンの逞しい手にお尻をまさぐられながら、犯された。

「深いですうっ♥ お兄ちゃんのおちん×んが深い場所にまでえ……♥ さっきよりもすごいですうっ♥」

チセは狐耳をピクピクさせ、尻尾をぶんぶんと振り回し、全身で快感を表現する。

と、繋がっている部分に神経が集中していた瞬間、乳首をぎゅつと抓まれた。

「あああんっ♥♥」

頭の中が真っ白になって、上り詰めた。

後背位の格好でエッチをすると、チセの反応はさっきよりもずっと敏感になっていた。

ペニスを抜き差しすれば、チセの秘処がいやらしく啞え込んでいる様子が手に取るように見えていた。

腰を前後に動かし、チセのお尻を弾くたび、ボリュームのある桃尻がたふんつたふんつと艶めかしくたわんだ。

「ああんっ♥ お兄ちゃん、激しいいい♥」

「でもこれが気持ちいいんでしょう？」

「んんっ♥ 気持ちいいですうっ♥ お兄ちゃんのおちん×んが気持ちいいですっ♥」

チセはよがりながら、身を躍らせた。

さらにノルンは両手を伸ばし、チセのおっぱいを手のひらで圧迫しながら、乳首を刺激する。

「はううっ♥」

膣圧が高まれば、ペニスが根元から食いちぎられんばかりに締めつけられてしまう。

「お兄ちゃん……♥」

乳首をくすぐるように疼かせながら、腰を立て続けに打ちつける。

腰を打ちつけるたび、美しいセミロングの毛先が乱れ、吐き出す息遣いも熱く、上擦っていく。

「お、お兄ちゃん、もうう……っ♥」

締めつけている膣粘膜が痙攣する。

チセのお尻の穴もぎゅっと締まった。

「うん、ボクも！」

「一人でいきたくありませんっ♥ お兄ちゃんと一緒にいいですうっ♥」

「一緒にイこうっ!!」

収斂する柔肉めがけ、搾り出されるがまま解き放つ。

びゅるうっ! びゅるううっ! どびゅう!

「ふああっっ♥ イっちゃうっ♥ お、お兄ちゃん……イっちゃいますううっ♥ イクウウウウウ♥♥」

チセは射精の勢いに合わせて、全身をブルッブルッと痙攣させた。

「チセ」

「ふあ……? んん……っ♥」



チセを振り向かせ、キスをする。

「んっ♥ ふぁっ♥ はふうっ♥ お兄ちゃんのおちん×ん、私のお腹で、ビクンビクンってすごく震えてますう♥」
まるでミルクを飲む子猫みたいに、恐る恐る舌を動かす。

「チセ、すごくよかったよ」

「わ、私ですう♥ お兄ちゃんに気持ちよくしてもらって、嬉しかったですう♥」
舌っ足らずな声を漏らしたチセは、ぎゅっと抱きついてくる。

ノルンは、チセを抱き上げた。

「ご、ごめんなさい、お兄ちゃん……。もう動けなくって、せつくすは……」
「違うよ」

ノルンはチセをソファーに寝かせると、自分の上着をかぶせる。

「チセはそこで休んでて」

「で、でも夕食の準備が……」

「大丈夫。ボクがやっておくからさっ」

「……お兄ちゃん、ありがとうございます……♥」

チセは嬉しそうに、はにかんだ。

第二章 ピクニックでマタタビ酔いどれ奉仕

ノルンは今日の夕食の食材を買うため、市場に来ていた。

オスは働かなくてもいい世界とはいえ、さすがに何もしないで一日過ごすのは飽きてしまうので、買い物しがてら散歩していた。

（よし。これで全部だな）

チセの書いてくれたメモを確認して帰路につこうとしていると、声をかけられた。

「ノルンくん♪」

「ああ、どうも」

声をかけてくれたのは、ウシの女性店員だ。

「これ、ミーシアちゃんにどう？ 緊急入荷したもののなんだけど」

見せてくれたのはマタタビ酒。

「もらいますっ！」

マタタビ酒を購入して意気揚々と帰宅の途についたノルンだったが、これを普通に飲ませるよりも、もっといい使い方ができるかもしれないと思いついた。

いつものようにミーシアやチセと食卓を囲んだ。

夕食はカルボナーラ。

「んー。さすがはチセだ。すごく美味しい」

「ありがとうございますっ」

チセは照れ恥ずかしそうに微笑んだ。

ミーシアがうなずく。

「さすがはチセ。でも私も負けてないからね？ ——ノルン、明日の夕食は私が作るから、楽しみにしてて」

「うん。楽しみにしてる……って、そうだ。明日、ミーシアは仕事は休みだよね？」

「そうだけど？」

「実は明日、ピクニックに行こうと思って。二人とも、どうかな」

「いいに決まってるよ！ ね、チセっ！」

「うん！ お兄ちゃん。明日が楽しみです！」

二人の喜びを見ているだけで、ノルンまで嬉しくなった。

「ところでさ、提案しといてなんなんだけど、どこかピクニックに丁度いい場所って、あるかな？」

ミーシアとチセはお互いを見合うと、にこりと微笑み合う。

「あそこがいいね、チセ」

「うんっ。あそこなら、お兄ちゃんも喜んでくれそう」

「どこ？ 教えて？」

「明日のお楽しみ」

「「ねーっ」」

ミーシアとチセは顔を見合って、はしゃいだ。

翌日。ランチをバスケットに詰め、ノルンたちは出かけた。

雲ひとつない快晴の下、町を出て、緩やかな道を進んで森へ。

「おーい、二人とも！ 歩くの早いよ……！」

草木の生い茂る中をミーシアたちは軽々と進むのだが、ノルンは道なき道に苦戦してしまう。

十メートルほど先にいるミーシアが、手を振りながら声をかけてくる。

「ほーら！ ノルン！ こっちこっちー！」

「ね、ミーシア。お兄ちゃんが大変そうだよ？」

ミーシアははしゃぐが、チセはハラハラしている。

「もー。しょうがにやいなあ」

ミーシアはチセに耳打ちをする。

うなずいていたチセは、笑顔になった。

「よしっ！ いくよ、チセ」

「うんっ！」

ミーシアはチセの手を引っ張り、耳や尻尾をフリフリと揺らしながら、ばてるノルンの元まで戻ってきてくれた。

「ああ、二人とも。ありが——うわ!？」

と、右手をミーシア、左手をチセに掴まれ、引っ張られる。

「さ、ノルン。歩いて歩いて」

「お兄ちゃん、頑張って下さい」

「よ、よし！」

息を切らせながらも、ノルンは一生懸命に足を動かした。

二人に手を引かれ、鬱蒼とした森をジグザグ（ノルンはそう感じた）に進んでいくと、不意に視界が開けた。

「うわあ！」

目の前の光景に、ノルンは思わず声を上げてしまう。

そこには色とりどりの草葉の咲き誇る花畑が広がっていたのだ。

日射しが降り注ぎ、葉っぱの緑も花びらの鮮やかさも映えている。

「うわあ！」

ミーシアとチセはイタズラを成功させた子どものように、笑ってはしゃいだ。

「どう？　びっくりした？　喜んでくれてる？」

「うん、びっくりしたし、喜んでるよ！」

「ふふ。お兄ちゃん。ここはね、私たちの秘密基地なんですっ」

「秘密基地？」

ミーシアがうなずく。

「そ。私たちが偶然発見した場所ですね、私たちだけの場所。旦那さんのノルンにも教えてあげようって、ね？」

チセがえへへと微笑んだ。

「お兄ちゃんが喜んでくれてよかったです♥」

ミーシアは大きくシートを広げて、早速バスケットから食事を出してくれる。

サンドイッチにたこさんウインナー、コロツケに唐揚げ、ポテトサラダにフライドポテトなどなど豪勢だ。

「ノルン。召し上がれ」

「いただきますっ！」

「お兄ちゃん、どうぞ♥」

チセが水筒に入れたコンソメスープを渡してくれる。

至れり尽くせりに、ノルンはお腹がパンパンになるくらい食べた。

「ふあっ」

チセが小さく欠伸あくびをした。

「眠たい？」

ノルンが聞けば、チセははっとしてぶんぶんっと頭を振った。

「ね、眠くありませんっ」

チセはそう言うが、普段から下がり気味な眉がいつも以上に下がってしまっているのが、微笑ましい。

「いいよ。チセ。朝早かったんだから。ほら、ボクの膝でさ」

「あ！　ノルン、私も！」

ミーシアも負けじと、ピンツと手を挙げて主張する。

「ミーシアは眠くないでしょ？」

「ぶうっ」

チセはノルンの膝に頭を置くと、あっという間にすうすうと寝息を立ててしまう。

「それじゃ、デザートの時間だ」

「デザートはもう食べたでしょ？」

「もう一つのデザート」

ノルンは、マタタビ酒をバッグから取り出した。

「あっ」

ミーシアの目が一瞬で輝いた。

「マタタビ酒好きだろ？」

「うんっ。そんなもの用意してくれてたんだ」

マタタビ酒を紙コップに注いで渡す。

「いただきますっ！」

ミーシアはぐっと呷^{あお}った。

「ふはあゝっ！」

コップ半分飲んだだけで、頬が染まり、猫耳が萎れ、目がとろんとした。

「ノルンも飲まないとおゝっ」

「飲んでるよ」

「にやううんっ。暑いゝっ」

胸元をくつろげ、バタバタと風を送り込む。

「涼しいゝ！ にやははあゝ！」

「どうした、ミーシア？」

「ふああゝ、気持ちよくって、笑いたくにやったあゝゝ！ ノルンも飲んでるかにやあっゝ？」

ミーシアは上機嫌で手足をバタバタと動かす。

「ああうん……。飲んでるよ」

「むうっ？」

じろりと見つめられた。

「な、なに？」

「もつと飲まなきゃダメにやあ♥」

頬を染めたミーシアがのしかかってくる。

「うわあっ!？」

ノルンは下敷きにされてしまうが、ミーシアが軽いから苦しくはない。しかし酔っ払っている彼女を転ばせないようにするために、抵抗できない。

ミーシアは酒瓶を右手で持ち上げると、ぐびぐびと飲み始めた。

「の、飲みすぎはよくないと思うけど!？」

「飲むのは、ノルンのおうっ」

「え？　——んん!?」

柔らかな唇がかぶさってくれば、とろりとお酒が口移しされる。

ミーシアの口内でマイルドになったお酒の風味が、ノルンの口の中いっぱい広がっていく。

「おいしい？」

「うん、美味しいよ」

「やったにやあ。これでノルンと一緒にやあっ！」

「ミーシア。あんまり大きな声を出したら、チセが起きちゃう」

「チセは寝付きがいいから大丈夫にやあっ♥　これからは大人の時間だにや♥」

「お、大人の時間……？」

お酒を飲ませたのは失敗だったかと思っていたその時、股間に不意に甘い電流が逆った。

「ミーシア!?」

ミーシアが、ノルンの股間をスリスリと撫でる。

「ふあ♥　ここお、硬あいつ♥」

「そ、そんなに撫でられちゃうと……ううっ」

「ノルン、気持ちいいのかにやあ？」

「気持ちいいっ」

「もーっとスリスリしてあげるっ♥」

ズボンごしに擦られて劣情が高まり、陰茎のシルエットがくつきりと浮かんた。

ミーシアは股間に顔を寄せて、すんすんと鼻を動かせば、口元を綻ばせた。

「んう……♥　いい匂いがするにやあ♥」

ミーシアは嬉々としてズボンを脱がしてくれば、ビィンツとペニスが力強く飛び出す。

ミーシアは逸物をまじまじと眺めると、舌なめずりした。

「ああ♥　おっきいおちん×んっ♥」

逸物は青筋を浮かべ、ビクビクツと戦慄く。

「レロツ♥」

ペニスに舌を這わされれば、ビリビリと快感電流が走った。

「気持ちいい！　ミーシアの舌、とろとろに絡みついてくる……っ!!」

「もつと舐めちゃうにやあ♥」

瞳を潤ませたミーシアはペニスを両手で包み込んで固定すると、アイスクャンディーでもしゃぶるように舌を這わせてくる。

舌肉の柔らかさに、ノルンの全身が粟立った。

「んちゅっ♥　ちゅぴいつ♥　れろおっ♥　あぁっ……雫がこぼれてきちゃう♥　ちゃんとこっちもにやめちやおおっ♥　ぢゅるるうっ♥」

ミーシアは唇の周りを我慢汁まみれにしながらも、貪るように舐り回す。
「ううう！　ミーシア、いいよっ！」

ミーシアは根元から先端まで余さずしゃぶり、裏筋を舌尖でくすぐる。
ペニスがビクンビクンと激しく戦慄き、我慢汁が溢れる。

ミーシアは亀頭冠にまで舌を満遍なく這わせてきた。

「ヂュルルウツ♥　ングウツ♥　ぢゅばおっ♥　ングウツ♥」

尿道口を引っ掻くように舌をくねらせ、そのままの勢いで頬張った。

「うぐう!？」

いきなりのことに腰を動かせば、ミーシアの喉奥を突き上げてしまう。

「ンンツ♥　ノルンツ♥」

ミーシアは小さく嗚咽をこぼしながらも、唇を窄めて締めつけ、濃厚なフェラチオを紡ぐ。

ミーシアがお酒を飲んでるせいか、亀頭冠にもアルコール成分が浸透してくる。

（お酒のせいか、ヒリヒリして疼く!）

さらに根元からペニスをもぎ取られてしまいそうなくらい、強烈な吸引感にさらされた。

「んぢゅうっ♥　ぢゅるるうっ♥　ノルンのおちん×ん、私の口の中でビクンビクンしちゃってて、可愛いにやぁっ♥」

射精欲求が膨れ上がれば、排泄感のような焦燥感が腰を包み込んだ。

「ミーシア、ごめんっ！　もう……!」

しかしミーシアは不意に顔を引っぱり上げ、ペニスを解放してしまう。

「ミーシア!？」

いきなりのことに動揺してしまう。

ペニスは射精寸前で『待て』をされてしまったせいで、精液混じりの体液を滲ませながら、ビクンビクンと切なく戦慄いた。

「まだ出しちゃだーめっ♥」

ミーシアは服を脱いで、生まれたままの姿になったかと思えば、仰向けに寝転がったノルンの顔を跨ぎ、ペニスに顔が行く格好になった。

（これは!?　AVでよく見えるシックスナイン……!!）

ノルンがリードしたのではなく、ミーシアが自分からこんなことをすることに驚きを隠せない。

「ミーシア、この体位……なんで知ってるの?」

「こうすればぁ、ノルンは私のおま×こを舐められるしい、私はノルンのおちん×んを舐められるもおんっ♥」

ミーシアは舌っ足らずに言った。

(すごい！ 本能以シックスナインをしてるなんて！)

ノルンは驚きつつも、目の前にあるミーシアの蜜唇を見やった。

ミーシアの秘裂はびっちり潤み、ヒクヒクと小刻みに震えて、ノルンを求めている。

ノルンはクンクンと匂いを嗅げば、濃厚な匂いで咽せてしまいそう。

まるで熟れた果実のように甘酸っぱい香りに鼓動が高鳴り、ペニスがヒクンツと反応してしまう。

「ノルンってばあ、匂い嗅いじゃうとかいやらしーんだにあっ♡」

ミーシアは逆ハート型の桃尻をプリプリと揺らしながら、悦ぶ。

「ミーシアのおま×こ、グチヨグチヨだし……。ミーシアだって、ボクの股間の匂いを嗅いでただろ？」

「えへへ♡ 私たちって、似たもの夫婦うつ♡」

ミーシアは声を弾ませて嬉しがった。

「そうだね。夫婦は似るって言うし……。レロっ」

「ひゃああんっ♡」

秘裂の表面を撫でるように舌を這わせれば、ミーシアがピクンツと肩を戦慄かせた。

蜜汁が糸を引きながら、垂れた。

「ミーシアってば、野外でおま×こをビチヨビチヨに湿らせちゃってるね」

「ああんっ♡ いいのおっ♡ 私はせつくす好きだし、ノルンのおちん×んを子宮で感じるのが大好きなんだからいいのおっ♡」

もつと刺激が欲しいと訴えて、桃尻を弾ませる。

「よしっ」

ノルンはお尻を握りしめ、ひくつく秘処をしゃぶる。

「ンンンツ♡ 舌、気持ちいいのおっ♡」

ミーシアはツイントールを揺らめかせ、背筋を仰け反らせた。

「ミーシアもおちん×んをしゃぶってよ」



「うんっ♥」

ミーシアは、ペニスへ口を寄せた。

ミーシアは、青筋を浮かべたグロテスクな逸物を見つめた。

（ああんっ♥ マタタビ酒やっぱりだいしゅきいっ♥ 一番好きなのはノルンだけどお♥）

ペニスを見ているだけで、ごくつと生唾を飲み込んでしまう。

「あん、ノルンのおちん×ん、だいしゅきいっ♥ れろおっ♥」

「う！」

先端肉を舐れば、ノルンが小さく呻く。

まるで溶けかけのアイスクリームを食べるみたいに、我慢汁まみれの逸物を無我夢中でしゃぶりまわす。

「んちゅっ♥ れろおっ♥ ああっ♥ ノルンのおちん×ん熱々うっ♥ ふにやああっ♥ だいしゅきいっ♥ んぢゆるるるっ♥」

舌を這わせ、我慢汁を吸えば、下腹がズキズキと甘く疼く。

「ンチュッ」

「んんん…っ♥♥」

秘裂をしゃぶられれば、ミーシアは軽く達してしまう。

「ミーシア、イった？」

「うんっ♥ イっちゃったっ♥ ノルンの熱々の舌が気持ちよかったのお♥ ふにやああんっ♥」

ミーシアは、発情している割れ目の心地よさに蕩ける。

快感が昂じれば、胸がズキズキと疼き、内側から這ってきた。

疼いて我慢できなくなつて、ゴツゴツした逸物に胸を密着させる。

「にやあああんっ♥」

ピンと勃った乳頭が潰れれば、背筋に甘い電流が迸った。

「ノルンのカチカチおちん×んで、私の乳首潰れひやうっ♥ ビリビリ痺れちゃうにやッ♥」

ミーシアは、勃起乳首でくびれや裏筋を満遍なく刺激する。

「ミーシアの乳首、気持ちいいよっ！」

「乳首がこんなに硬くなっちゃってるの、ノルンのせいなんだからにやあ♥ 責任取って、私を満足させるのおっ♥」

乳首とペニスとが擦れ合うたび、目の中で火花が弾け、シナを作ってしまう。

柔肌は昂奮と快感とで真っ赤に染まった。

「ノルンっ♥ しゃぶるだけじゃなくって、中に入れてえっ♥」

お尻をくねらせ、誘う。

「分かった」

膣穴に右手の中指を挿入させた。

「ふにゃあああうううんっ♥♥♥」

ゾクゾクした甘美が秘処から全身に、波紋のように広がっていく。

指一本だと分かっているはずなのに、もっと太くて大きい異物を挿入されているような心地。意識して指をぎゅっと締めつけられ、ノルンの武骨な指を感じた。

「ミーシア、そんなに締めつけたら、奥までいけないよっ」

「くるのおっ♥ 私を満足させなきゃダメなおっ♥」

ミーシアは駄々をこねながら、もっともっとと貪欲に求める。

「ワガママだな」

ぶつくさ言うノルンは、舌先で陰核を刺激してくる。

「だめえだめえっ、そ、そこお♥ イクウウウッ♥」

ミーシアは絶頂してしまい、全身を弛緩させてしまう。

ノルンは中指だけでなく、人差し指まで挿入する。

「ノルン……い、イってるのにいいいっ♥」

指を二本挿入した上で、ゆっくりと前後に動き出す。

「ふにゃあっ♥ イイツ♥ も、もっともっと動かしちゃっ♥」

「魅力的な奥さんだ」

ミーシアは猫尻尾をぶんぶんと振り回し、身悶えた。

「ンンン……ッ♥♥♥」

グチヨグチヨと濁った音が膣肉からこぼれた。

マタタビ酒の影響もあって、ミーシアはいつも以上にふしだらに乱れ、貪欲にノルンを求めてくれる。

その雰囲気にあてられ、ノルンも積極的になれた。

（ミーシアのおま×こに締めつけられすぎて、鬱血しそうだ……っ）

指を動かせば、泡立った蜜汁が真っ赤に爛熟した柔肉をグチヨグチヨと汚す。

膣肉が締まると同時に、お尻の穴がキュッと窄んだ。

（ミーシアをもっと感じさせるぞっ！）

そう勢い込んでいた次の瞬間、

「ううう!？」

股間から下腹に響く痛気持ちいい感触に、ノルンは目を瞠ってしまう。

「ミーシア、何してるの!？」

「ノルンを気持ちよくしてるのっ♥」

ミーシアが睨丸を両手で包み込みながら、ほどよい力強さで責めていた。

「ノルン。ここを弄くつたら、おちん×んがもーつとガチガチになって、大きく膨れちゃったにやあ♥」
目元を赤らめたミーシアは悩ましく玉袋を弄くりながら、逸物を啜えて来た。

「ミーシア、それ、だめ……っ!」

逸物の先っぽを貪るように舐られると同時に、玉袋まで弄ばれてしまえば、肛門を締めていなければ呆気なく解き放ってしまいそうだ。

「ミーシア! うううう! 両方は、ダメだから……!」

「ノルンをどんどん気持ちよくして、溺れさせちゃうからっ♥」

ミーシアは立場が逆転したことに気分をよくしたように、猫耳をピクピクとしきりに動かす。

「んぢゅるうっ♥ おちん×んから、昂奮した匂いがするうっ♥ ぢゅるるっ♥ ぢゅぞおおおっ♥」

ミーシアは悩ましい顔をさらしながら、腰が抜けてしまいそうなくらい濃厚なおしやぶりをする。

玉袋をまさぐられるのが、余計に刺激を増幅された。

（ミーシアがここまでするなんて、マタタビ酒で酔っ払うのヤバすぎだよ!）

ミーシアが喜悦の声を漏らす。

「んうゝゝゝっ♥ ノルン、もう出ちゃいそうなんですよ? ねえ、出してっ♥ 私の口の中に出して欲しいにやあっ♥」

ミーシアが、唇の輪っかを収斂させる。

パチン!

「にやおおおんっ♥」

玉袋を夢中で刺激していたミーシアが、肩を震わせた。

ノルンが、ミーシアのお尻を優しい力で叩いたのだ。

叩けば、お尻がじんわりと赤く火照る。

パチン!

「にやふうっ♥ お、お尻叩くのらめえっ♥」

いやいやと反応する割に、本気で嫌がっていないのは弾んだ声から明らか。

「ミーシアはマゾなのかな」

「ま、まぞ……?」

「こうして叩かれたりするのが好きってこと」

「そ、そんなこと……いひああんっ♥」

話している途中で、パチンッと尻たぶを叩いた。

もちろんあまり痛くならないように気をつけるが、ミーシアの反応は実際の刺激と比べても大きい。

「お尻、ペンペンダメえ♥……あむううっ♥」

「うううう!」

お尻を叩かれる衝撃を忘れようとするように、ミーシアはますます逸物に食いつく。

「ぢゅるるうつ♡　ングウツ♡　ぢゅばあつ♡」

脈打つ逸物への激しいフェラチオに、射精欲求が激流となって股間に殺到する。

「で、出るうつ……!!」

ノルンは、ミーシアの口の深い場所で果てた。

ビュルルウツ！　ドビュウツ！　グピュツ！　ビュウツ！

「ンンンンンン……ッ♡♡♡」

ミーシアは苦しい息遣いを交えながらも、ごきゅつごきゅつと樹液を浴びるように嚥下してくれる。

「んっ……♡　あふうっ……♡　ん……っ♡」

ミーシアがゆつくりと頭を持ち上げれば、逸物がビイインツと力強い形を保ったまま、露わになった。

「ふあっ♡　ノルンの精液おいしいにやあ♡　んんっ……酔っ払っちゃいそうだにやあっ♡」

ミーシアはシックスナインの体勢を終わらせると、肩で息をしながら呆然とした声で呟いた。

「ミーシア、すごかったよっ」

ミーシアの澄みきった青い瞳が、ノルンのペニスを見ると口元をほころばせる。

「……ノルンのおちん×ん、まだ元気みたいだにや♡」

本物の猫ならゴロゴロと喉を鳴らしていてもおかしくなくらい、声が弾んでいた。

「私……ノルンのおちん×ん、欲しい……♡」

「ボクもミーシアのおま×こが欲しいよっ！」

ノルンが覆い被さろうとするが、ミーシアはそれを避けて逆に押し倒してくる。

「うわっ!？」

「今日は、私がノルンを犯すの♡」

ミーシアは妖しく瞳を輝かせてのしかかってくるや、馬乗りでペニスを受け入れる。

グチュグチュツ！

「ふにやっ♡　おちん×んが入って来るにやあっ♡」

ところどころにほぐれて火照った膣肉の感触に、腰を動かそうとするが、太腿でガッチリと締めつけられてしまう。

「ミーシア、それじゃ動けないよ……っ」

「動かなくていいからあっ♡　ふにやあっ♡　私が気持ちよくしてあげるから！」

ミーシアは甘いため息混じりに言った。

ミーシアはノルンの逸物を受け入れる。

「にやふんっ♡　私の中でビクビクって震えてるの感じるうつ♡」

下腹を撫でた。膣内が過敏になっている。

（おちん×んの先っぽ、私の子宮の入り口を押し上げて苦しいけど、おま×こをこんだだけいっぱい満たされて嬉しいっ）
ミーシアはノルンを見下ろす。

ノルンは動けないせいでフラストレーションが溜まっているのか、表情を引き攣らせている。
その悩ましげな表情に、ミーシアの子宮はキュンツと甘く疼く。

「動くにゃ♥」

ミーシアは両足をM字に開いたかと思えば、ゆっくりと腰を持ち上げた。

グチュグチュツ。

「ふにゅあああああんっ♥」

全身に快感の電流が逆れば、身体をヒクヒクツと戦慄かせてしまう。

腰が抜けてしまいそうくらい爛熟した媚肉が疼き、張り出した笠肉で掻き出された蜜汁がこぼれた。

「ミーシア、そんなに無理しなくても……」

「無理じゃにゃいのおっ♥」

と、不満そうな顔をしていたかと思えば、すぐに蕩けるような笑顔になった。

「にゃはははっ♥ 大丈夫うっ♥ ノルンのこともちゃーんと気持ちよくしてあげりゅからあっ♥」

ミーシアは上半身に重心を移して、ノルンの逸物を咥え込みながら背筋を仰け反るような格好になれば、上半身を躍らせるように動かす。

「み、ミーシア……うぐっ!？」

大きな振幅ではなく、小刻みな動きによって、ノルンを翻弄する。

「ノルンのおちん×ん、私の深いところに突き刺さるのイイツ♥」

「ミーシアの蕩けたおま×この感触、分かるよ！ すぐく締めつけて……食いちぎられそうだ！」

「ノルンのおちん×ん、食べちゃうのっ♥」

「ミーシア、ボクもそろそろ動いていい？」

「だゝめっ♥ 私がやってるんだからあっ♥」

「そ、そうなんだけど……。でもやっぱりボクも動いて、ミーシアを気持ちよくしたくって……」

ノルンは、もともと口ごもる。

それが微笑ましくて、ミーシアは思わず笑った。

ノルンは戸惑った。

（酔っ払ってるミーシアって、いつもとぜんぜん違う。ただ陽気なだけじゃないっ！）

しかしそんなミーシアとのエッチも、最高かもしれない。

そう思った次の瞬間、いきなりミーシアが腰を止めた。

酔っ払ったミーシアはとろんとした瞳で、ノルンを微笑ましげに眺めた。

「ノルン、気持ちいい？」

「すっごくいいよ」

「えへへ♡ よかったあ♡」

「ミーシア、そろそろ動いていい？」

「えへへ。まだだ〜め……ヒアアッ♡」

ミーシアが身を振って、喘いだ。

ノルンが、ミーシアの乳首を握りしめたのだ。

「ひいひい♡♡」

不意打ちで乳首を圧迫されたミーシアはあつという間に絶頂して、全身から力を抜く。

太腿の拘束から解放されたノルンは、深く収まっているペニスを引く。

「ああああん、ノルン♡ い、いきなりひどいい♡」

「ひどいのはミーシアでしょっ」

ミーシアは体勢を崩せば、その拍子にペニスがズルッと抜けてしまう。

「ああん♡ 抜けちゃったあ♡」

「ミーシア、大丈夫。また入れればいいよっ」

ノルンは脈打つ怒張を握りながら覆い被さると、膣口へ切っ先を密着させる。

「ふえ……？」

間の抜けた声を漏らすミーシアに、ノルンは笑いかけた。

「このまま入れてもいいけど、どうしよっかな」

「ノルン、ひどい！ 焦らさないでっ！」

「ミーシアの真似をしたんだよ」

「うううう……イタズラしてごめん！ ノルンのおちん×んを入れてくれなきゃ……おかしくなっちゃうからっ♡」

「……ボクもつらいし、入れるよ」

「きてえっ♡」

激しく求めてくれるミーシアの膣穴へ、ゆっくりと勃起を挿入する。

クチュクチュ……！

「ああああああん♡ ノルン……ッ♡♡」

ミーシアは挿入と同時に絶頂し、ぎゅっと抱きついてくる。

ノルンはミーシアの唇を塞ぐと、腰を大きく前後に動かす。

パンパンパン！

「ンンンッ♡ ノルン、気持ちいいっ……♡」

ミーシアは、ノルンの腰に両足を巻きつけてきた。

自ら腰をくねらせ、ノルンの逸物を堪能する。

「ノルンのおちん×ん、火傷しちゃいそうなくらい熱いよおっ♥ もっと奥を突いてっ♥ おま×こをグチャグチャに掻き混ぜて欲しいにやあっ♥」

ミーシアの秘壺が、ますます激しく締めつけてくる。

「ミーシア！」

ノルンはミーシアの唇を塞いで生々しい口づけを繰り返しながら、両手でころんと勃起した乳首を強い力で搾る。

「ノルウンツ♥ イイツ♥ 気持ちいい場所、いっぱいノルンに弄ってもらえて嬉しいにやああっ♥ ふにやあっ♥ もっと舌からめてえ♥ いっぱいノルンのツバ、欲しいにやあっ♥」

ミーシアの切れ切れに吐き出す息遣いは、火照り、湿っていた。

「ミーシアの乳首、カチカチだね」

「んんっ♥ さ、さつきからズキズキ疼いちゃってしょうがないのおっ♥ だ、だからノルンに鎮めて欲しいのお♥」

激しく口づけをしつつ、乳首を握れば、

「にやううんっ♥」

ミーシアが嗚咽を上げ、小さく上り詰めるのがペニスの締めつけで分かった。

「いくよ！」

「ふえ!？」

ノルンはこれまでとは違う激しい腰の動きで、ミーシアの膣内を掻き混ぜる。

「の、ノルン……イクツ♥♥」

ミーシアは悩ましい顔をさらす。

そんな表情のミーシアの膣内を、めちゃくちやに攪拌かくはんした。

グチョッ! ズチュッ! スチュッ! グチュッ!

掻き出された蜜汁があぶくを作りながら、繋がっている部分をベチョベチョに汚した。

「ノルン! イってるのおっ♥ ふにやああっ♥」

「今さら止まらないよ! ボクが射精するまで我慢してっ!」

「ラメツ♥ ラメエツ♥ ズンズンって何度も突かれひゃつたら、い、いきすぎて頭が爆発しちゃうのにやああ~~~~~」

♥

「あむっ!」

ノルンはさらに、ミーシアのおっぱいを強く吸う。

滲んだ汗の味が口の中に広がれば、劣情が掻き立てられた。

「またイっちゃううッ♥」

ミーシアの膣肉はとろとろに蕩け、ペニスに吸いつく。

「ミーシア!」

ペニスがググツと反り返る。

「ノルン、出してっ♥ ひ、一人でいき続けるのはイヤにやああ……♥」
「一緒にいこう……ううっ!!」

ノルンはミーシアの膣内めがけ、精液を解き放った。

「イクツ♥ イっちゃうううううツ♥♥」

ドクンドクンツと子種を注ぎ込めば、収まりきれなかった分がブヂュツと濁った音をたてながら、逆流してくる。

「ふあっ……♥ ああっ……♥ シン……ツ♥」

ノルンは腰を持ち上げ、ペニスを抜く。

「の、ノルン……っ♥」

しかしノルンのペニスは、元気なままだった。

「散々焦らされて、これで終わりじゃないよ」

「ふえ!？」

と、ミーシアはノルンの力によって体勢を変えられ、まんぐり返しにされてしまった。

「ノルン!? これ、にゃんの格好おっ!？」

酔っ払っていた頭でも、この体位の異様さは分かっていた。

「まんぐり返しって言うんだ」

「ううう……く、苦しいよお……っ」

「大丈夫。これから気持ちよくなるからっ」

ノルンは、ガチガチに硬いままの怒張で秘処を貫く。

「ふにやあっ♥ ノルンのおちん×んが刺りゅううううツ♥」

ミーシアは髪を振り乱し、両足をバタバタさせた。

まだ絶頂感が尾を引いている中で再挿入に、ミーシアの頭の中はあっという間に真っ白に染まってしまふ。

「んーッ♥」

爪先までピーンと伸ばす。

（ノルンのおちん×んで、あそこがビリビリしちゃう……っ）

これまでのように、ただの挿入ではない。

「ミーシア、いくぞっ」

ノルンが腰を持ち上げれば、ズルズルツと逸物が露出し、カリで柔壁をゴリゴリと抉られてしまふ。

「ひああああああん……っ♥」

さらに男根を挿入される。

「ノルンのおちん×ん、ブスブスきちゃう♥」

腰を上下に弾ませれば、ラブジュースがブヂュグチュツと濁った音をたてながら掻き出されていく。

「ミーシアのおま×こも吸いついて、腰が止まらないよっ！」

「ふぁあっ♥ んんっ♥ す、すごいっ♥ シンンッ♥」

「ミーシア、この格好、悦んでくれてる!？」

「よ、悦んでにやいっ! く、苦しいだけえっ♥」

「でもおま×この締めつけがすごい……!」

パンパンパンパン!

垂直による抽送がますます激しくなっていけば、ミーシアはあっさりと本音をこぼす。

「本当は気持ちイイのお♥ でも、どうしてこんなに気持ちよくなっちゃってるのか分からにやいけどおおお♥」

快感とマタタビ酒の効果で、全身が浮遊しているような感覚になっていた。

身も心も快楽に酔い痴れ、こんなとんでもない体位でのエッチにもかかわらず、蕩けてしまう。

秘肉の中でペニスが膨張した。

「ノルン、出してっ♥ 出してくれなきゃダメだからあ♥」

「ミーシア!」

射精の気配が濃くなるにしたがつて、抽送の勢いがなくなり、子宮口にペニスが押しつけられた。

ペニスが余裕を失い、ビクビクと震える。

「ひゃああん♥」

「出る!」

ノルンが声を上げた次の瞬間、ビュルルルッ!と射精をする。

「にゃあああうううっんっ♥ イクウウッウウッ♥ ノルンの精液、たくさんっ……お、お腹パンパン……ふにや

あ~~~~♥♥

もう何度も出したにもかかわらず、子種の量がすごく多くて溺れてしまいそうだった。

「ミーシア……っ」

ノルンはペニスを抜くと、その場でべたんと座り込んだ。

ミーシアは仰向けの格好で寝転んだ。

秘裂からゴポポツと下品な音をたてながら、精液が逆流する。

「……すごかった。ミーシア……」



「うんっ♡……」

「――ふぁ……お兄ちゃんたち、すごい……っ♡」

その聞き覚えのある声に、ノルンとミーシアはそっちを向いた。

「チセ!? 起きてたの……っっていうか、どこまで見てたの!？」

チセはモジモジしながら、「さ、最初から、です……」とぼつりと呟いたかと思えば、発情した瞳をとろんろさせた。

「私もせつくすしたいです……!」

「よ、よーし! 頑張るぞー!」

「お兄ちゃんっ♡」

ノルンは、チセを押し倒した。

第三章 ウサギ耳隣人美少女と教室コスプレエッチ

「ふう。朝風呂は気持ちいいなあ」

前の世界では無頓着だったが、二人の奥さんたちに「臭いと思われたくない!」という感じで、朝風呂に入るのが習慣になっていた。

（昨日たくさんエッチしたから、つていうこともあるけど……）

昨夜のことを思い出すと、股間が疼く。

（ヤバッ）

ノルンは股間に、鎮まれ鎮まれと言い聞かせる。

朝はミーシアは仕事に出かけ、チセは朝から家事に取りかかるから、エッチしている暇なんてない。

かと言って、一人寂しくオナニーなんて、もう連日連夜エッチ漬けの日々を送っているノルンには無理だ。

（欲望は夜にまで取っておけ……!）

しかしガチガチに昂奮したペニスは、なかなか収まってくれない。

諦めて、ため息を漏らす。

（しょうがない。部屋でしよっ）

勃起したペニスをブラブラさせながら、風呂場から出る——と。

「っ!？」

ノルンは動きを止めた。

脱衣場に、チセがいたのだ。

「……………」

「……………」

チセの視線が、ノルンの股間に注がれた。

「え、えっと……チセ、家の仕事、頑張っつ!」

はっとしたノルンは早口でまくしたてると股間を押さえながら、逃げるように自分の部屋に籠もった。

（いや、逃げる必要はさすがになかった!）

冷静になると、チセへの対応があまりに不自然だった。

（股間もばっちり見られちゃってたし、さ、最悪だ……っ）

そして、こんな時にも股間はギンギンに勃起続けている。

（ああもう!）

ノルンが身悶えていると、扉が小さくノックされた。

慌ててベッドのシーツを腰に巻くと、「ど、どうぞ」と呼びかければ、扉がゆっくりと開いた。

「お兄ちゃん……っ」

「チセ、さっきのは……」

「これ、使ってください」

チセが差し出してくれたのは、バスタオル。

「濡れたままでしたから……。風邪引いちゃうと思ひまして」

「あ……ありがとうございます」

「後ろ向いてますね」

チセは、くるつとこちらに背中を向けてくれる。

「さ、さっきはびっくりさせてごめんね」

ノルンは身体を拭きながら、チセに謝った。

「い、いえっ。お兄ちゃんがお風呂に入っているのを知ったのに、不用心でした……」

チセの狐尻尾が、ぶんぶん揺れている。

（チセ、可愛すぎる……！）

本当は襲いかかりたいが、家事をこなすのに忙しいチセの邪魔をするのは気が引けた。

「お、お兄ちゃん、大丈夫ですか？」

「うん。チセがタオルを持ってきたから……」

「そ、そちらではなくって……」

「ん？」

「おちん×んの方です……」

「へ!？」

チセからの思わぬ一言に、ノルンは啞然としてしまう。

「……まあ、苦しい、かな？ あははは」

チセはこちらに振り向く。

「……私にやらせて下さい」

「いやでも、チセには仕事が……」

「だ、旦那様を気持ちよくするのも、奥さんとしての務め、ですから……っ」

勢い込んでチセが言えば、首輪についているハートの装飾がチャリツと音をたてて揺れた。

「失礼、します……っ♥」

チセが、ノルンをベッドの縁に座らせるとシーツを剥ぎ取れば、逸物がビィンツと大きくしなりながら露わになった。

チセは逸物を跨いで、ノルンと対面する。

「ち、チセ……？」

「お兄ちゃんのおちん×ん、カチカチですね。どうしてですか？」

「き、昨日のエッチを思い出して」

「そ、そうなんです」

チセは口元を綻ばせて微笑んだ。

「お兄ちゃんを気持ちよくしますねっ」

頬を染めたチセはゆっくりと腰を落として、ペニスに秘処を擦りつける。

「うう!!」

チセは軽く息を荒げながら、腰を前後に動かしていく。

温かなぬくもりが、ビンビンに勃起しているペニスに伝わってきた。

「んっ……お兄ちゃんのおちん×ん、ゴツゴツしてます……っ♡」

チセは悩ましい顔をしながらも、腰を動かし続けてくれる。

秘裂から染み出す愛蜜で、ペニスグチヨグチヨに濡れていく。

「お兄ちゃんっ♡ ああんっ♡ んふっ♡」

「ううっ」

「き、気持ちいいですか……?」

「気持ちいいよ。チセのおま×こ、温かくって……。それに、ぬるぬるしたお汁も。チセも悦んでくれてるみたいで嬉しいな」

「は、はい……っ♡」

頬を染めたチセは俯いてしまう。

「チセ、顔を上げて」

チセが恐る恐るという風に、上目遣いでノルンを見た。

ノルンはチセの唇を塞ぐ。

「んん……っ♡」

チセの下がり気味な眉が、ピクンッと跳ねた。

身を任せてくれる。

「んちゅっ♡ ちゅびいっ♡ はあっ♡ お兄ちゃん……っ♡」

チセは積極的に舌を使い、ノルンの口の中を掻き混ぜてくれる。

ノルンもチセの積極的な舌遣いに応えようと、舌を触れ合わせてくれた。

「んっ!」

積極的ながら、どこか怖々したチセの舌遣いが嬉しく、その間も腰を一生懸命動かしてくれる様子が微笑ましい。ノルンはキスを交わしながら、チセを抱きしめる。

「ふぁあっ♡」

チセはか弱い声を漏らし、シナを作った。
童顔な表情は赤らんで、瞳は潤む。

「お兄ちゃん……っ♥」

チセが抱きついてくる。

抱きつきながらも甲斐甲斐しく腰を動かし、秘処にペニスを擦りつけてくれた。

「チセ、気持ちいいっ」

「わ、私も、気持ちいいですうっ♥」

唇を離せば、チセは「ああ♥」と物欲しげな声を上げた。

二人の間に架かる糸の橋を、愛おしげに眺める。

「もっとなしたい？」

ノルンが声をかければ、チセはこくりとうなずいた。

「は、はいっ♥」

チセの方から今度は唇を塞いでくれた。

チセは、自分でもどうしてこんなに積極的に振る舞えるんだろうとびっくりしてしまう。

（……それだけ、お兄ちゃんが好きってことなのかも♥）

お風呂場で出くわして、ノルンの大きくなったペニスを目の当たりにして。

すぐに反応できなかったのは、どうしたらいいか、咄嗟に思いつかなかったから。

悶々としてしまって仕方なかった。

だから、バスタオルを持っていくという理由を作って、ノルンの元にやってきたのだ。

奥さんとして、ノルンのために何かしたかったのだ。

（お兄ちゃんを独り占めにしちゃってる♥ ミーシアと一緒にお兄ちゃんとセックスするのも楽しいし、嬉しい……けど、一

人の時も……♥）

チセは口元がだらしなくなってしまうのを我慢しつつも、ノルンの唇を塞ぐ。

小鳥が啄むような口づけではなく、舌を絡める、身体がビリビリと痺れてしまうような魅力的なキス。

キスのやり方は、全部ノルンが教えてくれた。

キスだけじゃない。どんな風にエッチをするのかも。

「お兄ちゃんっ♥ 好きいっ♥」

「チセ。クリトリスを押しつけて」

「えっ!？」

自分からペニスに跨がっておきながら、びっくりした声が出てしまう。

「ダメ？」

ノルンにそう言われれば、意識する前に首を横に振っていた。

「わ、分かりましたっ♡」

チセはうなずくと、クリトリスをペニスに押しつけるように前傾姿勢になった。

「ひああああンッ♡」

陰核が擦れた瞬間、目の眩むような快感電流が全身に迸ったかと思えば、あっという間に絶頂を遂げてしまう。

「チセ、大丈夫!？」

「は、はい♡ 大丈夫、ですうっ♡」

息を切らせながらも、もう一度クリトリスを押しつける。

「ンンンン♡♡」

狐耳や尻尾までビクビクと戦慄させながら、上り詰めた。

（やっぱり、く、くりとりす、他の部分より敏感すぎちゃうよぉ♡）

全身から力が抜ければ、ノルンがしっかりと抱き留めてくれる。

でもノルンの奥さんとして、甘えているばかりではいけない。

「す、すみませんっ。私ばかりイってしまっ……♡」

「すぐく頑張ってくれた。嬉しいよ。じゃあ、次はボクが頑張る番だねっ」

「え……?」

チセがぼかんとしていると、ノルンは男根をチセの足から抜く。

「セックスしよっ」

「お兄ちゃん……ふあああっ♡」

ペニスが、ズブズブと膣内に挿入されてしまう。

「ああああ、お兄ちゃんのおちん×んが、深くまでえ……♡」

頭が真っ白になる。

チセは小さな身体を大きく仰け反らせながら、達した。

ペニスの切っ先でぐっと押し込まれてしまえば、チセは「ああっ♡ ああんっ♡」と息を切らせながら、上半身をベッドに

寝かせる。

両手は無意識にシーツをぎゅっと握りしめて、シワくちやにしてしまう。

「お、お兄ちゃん、ごめんなさい。ベッドをクシャクシャにしちゃってえ……♡」

「気にする必要ないよ。あとでボクが直しておく。だから、チセはセックスを楽しんでいればいいんだよっ」

ノルンはチセの腰に手をかけると、腰を動かし始めた。

チセの秘処は、グチュグチュに蕩けていた。

チセの初めてをもらってから、何度もエッチをしているというのに、秘処の窮屈さは処女の時のまま変わらない。

吸いつく膣内を掻き混ぜ、チセを気持ちよくしたいと頑張る。

「お、お兄ちゃん……♡」

弾けた飛沫がシートに染みを作った。

「見て、チセ。シートについた黒い染み、ぜんぶチセのお汁だよ？」

「い、イヤです！ そんなこと仰らないで下さいいっ！」

チセは恥ずかしがって、顔を両手で覆う。

「どうして？ それだけチセが気持ちよくなってくれてることなんだよ？」

「それでも……恥ずかしいんです……っ♡」

「はは。チセが気持ちよくなってくれてボクは嬉しいよ」

「そ、それは……お兄ちゃんのせつくすが、うまいから、ですう……」

か細い声でチセが答えてくれた。

「ありがとう。チセのおま×こが気持ちいいから、ボクも頑張れるんだよ」

「ほ、本当、ですか？」

「もちろん！」

ノルンは腰を大きく動かす。

「あああああんっ♡」

「チセ、顔を見せて」

ノルンが、顔を覆っている手を外せば、瞳を艶やかに潤ませたチセの顔があった。

チセの唇を塞ぎ、濡れそぼつ割れ目を掻き混ぜた。

「お兄ちゃあっ……ンンッ♡」

チセから芳しい甘いかおり——フェロモンが醸し出される。

ノルンは、チセの身体にキスをして玉の汗を吸う。

「お兄ちゃんっ♡ 匂い嗅いじゃらめえっ♡」

「いい匂いだよ？」

右に左と順繰りに乳首を吸えば、チセの媚身がピクピクツツと反応する。

「お兄ちゃんッ♡ くすぐったいいっ♡ お兄ちゃん、だめえっ♡」

最初はくすぐったいと言いながらも、どんどんその息遣いは荒く、上擦っていく。

ノルンは脇にしゃぶりつく。

白い柔肌に赤い痕がつき、艶めかしさが増す。

「お兄ちゃん♡ あああああんっ♡」

チセの秘処が伸縮し、ノルンの腰に快感の電流が走った。

奥歯を噛みしめながらも、ノルンはチセの反応の大きかった脇を舐める。

「そ、そこ、汚いですうっ♥ 本当にダメなんですう♥」

チセは拒絶するが、その声は本気で拒んでいるように思えなかった。

「お兄ちゃん♥ ああっ♥ 許して下さいいっ♥」

「こんなに締めつけられたら、やめられないよ」

「ンンンッ♥ お兄ちゃん……っ♥」

不意に、チセがノルンの腰を両足で挟んできた。

「ううっ!」

ノルンは突然のことに身体を強張らせてしまう。

「お兄ちゃんに気持ちよくなってもらうために、頑張ります……!」

「チセ、いきなりどうしたんだ!」

「お兄ちゃんがしていることを真似してるだけですっ♥」

チセは今にも快感に負けそうな顔をしながらも、腰を動かしてペニスを圧迫した。

「ぐうう!? そんなに締めつけられたら……!?!」

「お兄ちゃんも早く気持ちよくなって下さい……っ♥」

チセが見せた積極的な腰遣いに、ノルンがこらえていたものが決壊してしまう。

「お兄ちゃん♥」

「う! 出るううう!!」

精液を、チセの深い部分めがけ放出する。

「お兄ちゃんの熱いのきますう♥ ああっ! いつ、いつちゃいますうううううっ♥」

チセはあどけない表情をメスの喜悦で染め上げ、派手に絶頂を遂げた。同時に、

「ふあっ、だ、ダメえ♥」

「チセ、どうしたの!」

「お漏らししちゃう……っ♥ ひiiiiiiiiンンッ♥」

プシャアアアアアッ!!

チセは盛大に潮を吹く。

「ふあ……♥ ああ……っ♥ ご、ごめんなさい……っ♥」

「え? どうして謝るの?」

「シーツがべちょべちょに……っ」

チセは涙目になって「えうう」とか細い声を漏らして、俯いてしまう。

ノルンはそんなチセを抱きしめて、涙をハンカチで拭く。

「お兄ちゃん……?」

「二人で片付けよう。ボクもやりすぎちゃったかもしれないし。ね?」

「でもお兄ちゃんにお手伝いをさせてしまうなんて。お買い物と違って雑用ですのに……」

「ボクがやりたいんだから。ね？ いいでしょ？」

「は、はい……。お兄ちゃんにそう仰って頂けるのなら♥」

「夫なんだから当たり前だよ」

「ありがとうございます♥」

チセはようやく笑顔になってくれた。

（……暇だ）

ノルンは家で留守番をしていた。

ミーシアは仕事、チセは市場いちばに買い物に行っていた。

ノルンは暇を持て余して読書をしているのだが、目が滑ってしまう。

（チセ、早く帰ってこないかなあ）

そんなことを考えていると、コンコンと扉がノックされた。

「はあい」

ノルンが出ると、

「こんにちわー」

「ラビメア。どうぞ、入ってっ」

「あれ？ おにーさん、すごい笑顔ね？ いいことでもあったの？」

（ふむ、あいかわらずデカイ）

ノルンは、ラビメアを家に招きつつ、心の中でそんなゲスいことを考えてしまう。

ラビメアはお隣に住んでいる女性だ。

特徴的なのは腰まで届くくらいの銀色のロングヘア、そしてそんな髪の間からピヨンと飛び出している髪より淡い銀色のウサギの耳。

そう、ラビメアはウサギの女の子だ。

そして彼女と向き合えばついつい見てしまうのが、ノースリーブブラウスの胸元がはちきれんばかりのおっぱい。

ミーシアもチセも愛しているし、大好きだが、やっぱり巨乳の魔力というものは特別だった。

ぶるんぶるんと、まるでプリンのおっぱいのようにおっぱいが揺れる。

「——ちよつと、おにーさん。どこ見てるのー？」

「え！ いや、その……あはははー」

そんなことで照れてしまうのだが、ノルンはラビメアとエッチ済みである。

ノルンは台所でイチゴのジュースをグラスに注ぐと、ラビメアに渡す。

「どうぞ」

「おにーさん、ありがとっ♪ 二人は？」

「ミーシアは仕事で、チセは買い物。ラビメアが来てくれてよかったよ。することがなくて暇だったんだ」
「こうもラビメアが来てくれたことが嬉しいのには、理由があった。」

「話せば暇を潰せるのと、あと一つ。」

「実はラビメアもまたノルンと同じように、この世界に転生したのだった。」

「ラビメアは前の世界でも、女性。」

「漫画やアニメのオタク趣味があつて、イラストを描いたり、宅コスプレイヤーをしていたらしい。」

「おにーさん、まだこの世界に順応が足りないみたいね」

「さすがにネットがないと時間が潰せなくって……。ラビメアはそういう時、ない？」

「んー。あたしはコスを作ったり、着たりするから、特に暇だなんて思わないかな」

「そっかあ」

「おにーさんは、元の世界が懐かしく思ったりする？」

「特に思わないな。ここにはミーシアやチセがいてくれるし……」

「あたしは、ときどき懐かしく思うよ？」

「どういうところ？」

「学校かな。うちの高校、ブレザーで。それが可愛くって、その学校に行ったくらいだもん。はあ、楽しかったな♪ ——おにーさんの学生時代はどうだった？」

「特に思い出という思い出はなかったな。友だちと喋って……。帰宅部だったし……。でもその時からアイドルは好きだったなあ。バイトして、休みの日にアイドルのライブに出かけて。そこで会った人たちとSNSで情報の共有とか、オフ会したり……」

「うん♪ うん♪ 好きなものがあるっていいことだねっ♪ あたしも同じ趣味の友だちと、ネットで話したなあ」

「うんうん」

「——でさ、恋人はいた？ 学生時代」

「そ、それは……」

「いきなりの質問に、ノルンはそつと目を逸らした。」

「いつつもミーシアちゃんやチセちゃんを、エッチで泣かせてるんでしょ？ 学生時代は相当モテた、とか？」

「ぜんぜん！ 学生時代は恋人なんていないし……」

「ふうん」

「ラビメアは疑うように見てくる。」

「ラビメアこそ、いきなりボクを誘惑したりしたけど……経験多いの？」

「あたしだって、趣味に没頭しまくりなせいで、そういう色気のある学校生活なんて送ってこなかったし……」

「なるほど。ボクらは似たもの同士なんだね」

「そう考えると、すごい縁ねっ。同じ趣味……それに、転生者」

「ところでラビメアはコスチュームを自作してるんなら、高校の制服を作ったりしないの？」

「制服の？」

「だってその高校の制服が好きなんでしょ？ だったらそういうのもアリなのかなーと思って……」

「しばらくラビメアは考えて、「いいかも」と呟いた。

「なんでだろ。言われるまで全然気付かなかった」

「そうなの？」

「ね、おにーさんの学生時代の制服のデザイン教えて」

「どうして？」

「いいからっ」

「うちは詰襟めの制服だったよ。下は、ワイシャツに黒いスラックスで……」

「なるほど。オールドタイプね。分かった。それじゃ帰るね」

「もう？」

「うん。ちょっと急用ができたから♪」

ラビメアはご機嫌そうに耳を揺らしながら、出ていってしまう。

（どうしたんだろ）

ノルンは啞然として、ラビメアの背中を見送った。

数日後。いつものようにノルンが一人で留守番をしていると、来客があった。

「はあい」

扉を開けると、ラビメアがいた。

「ラビメア、こんにちは」

「こんにちは。ね、今一人？」

「うん。またこの間みたいに話に付き合ってくれる？」

「それよりも楽しいこと、しない？」

「それって……」

思わず生唾を飲み込んでしまうと、ラビメアから笑われてしまう。

「とりあえずうちに来て」

ラビメアに腕を引かれて、彼女の家へ。

居間の椅子に座らされると、大仰なことにスカーフで目隠しをされてしまう。

「えーっと……これから何が起こるのか、すごく怖いんだけど……」

「安心して。取って食べたりしないから。ウサギは草食だし、ね。——お互いの望みが叶うことだから」

ゴソゴソと衣擦れの音が聞こえた。

「ラビメア、着替えてるの？」

「どうかなー♪」

ドキドキと心臓が高鳴った。

目隠しされているせいもあるだろうか、聴覚が過敏だった。

「さあ、いいよ。目隠しを取って」

目隠しを取って視界に飛び込んでくる光景に、ノルンのはっと息を呑んだ。

ラビメアは、キャラメル色のブレザーの制服姿だった。

ブレザーの胸元には校章。

チェックのスカートは太腿の半ばくらいの丈で、白いブラウスの胸元には赤いリボン。

足には、これも校章入りの黒いハイソックス。

「どう？」

「おお……」

ラビメアはピンと伸びたウサギ耳を得意げに揺らしながら、右足を軸にくるりと回ってみせる。

その瞬間、チェックのスカートがふわりと舞い上がる。

思わずそこに目が釘付けになってしまつて、ラビメアに笑われてしまう。

「でも、これだけじゃないんだあ」

「他にもあるの？」

「おにーさんにプレゼントがあるんだ。じゃーん！」

「おおっ！」

ノルンはさっきから言葉を忘れてしまったみたいに、感嘆の声しか上げられなかった。

ラビメアが見せてくれたのは、ハンガーにかけられた詰め襟制服。

「すごいよ！」

「おにーさんはこれ着てねっ」

「ありがとうっ」

ノルンは嬉しくつて、詰め襟制服に袖を通した。

「すごい！ サイズもぴったりだ！」

「ふふ。エッチが終わった後、眠っているおにーさんをこっそり計ったことがあったからね♪」

「いつの間に……。——それじゃあ……」

キスをしようとするが、やんわりと止められた。

「ふふ♥ そんな泣きそうな顔しないで♥ ——せつかなんだから、もっと雰囲気があったほうがいいでしょ？」

「もつと？ これ以上雰囲気出せるの？」

ラビメアのあとに続いて部屋に入れば、

「教室!？」

教室の椅子と机が二つ置かれて、壁の一面には黒板を模したイラストの描かれた布が張られていた。黒板の隅の目直の欄には、ノルンとラビメアの名前が並ぶ。

「すごいよ!」

「でしょ？ 座ってみて」

ノルンが椅子に座ると、前の席にラビメアが座った。

「本当に学校みたいだ！ まさかこんなものまで用意するなんて!」

ノルンが感慨に耽っていると、ラビメアに手を握られた。

ラビメアと目が合う。

「おにーさん♥」

ラビメアに唇を塞がれた。

「んんっ」

最初は啄むような口づけだったが、次第に舌を絡めていく。

触れ合わせるだけのキスが、どんどん高揚感に突き動かされ、貪るように互いの舌を味わった。

「んちゅっ♥ ちゅびい♥ んん♥ おにいさあんっ♥」

「ラビメアの舌、気持ちいい」

と、不意にラビメアが唇を離す。

「教室でのキス、初めて♥」

「ボクも……」

「制服を着て、キスするの不思議な感じね」

「うん。日常じゃないって感じがする」

ノルンは、ラビメアのブレザーを脱がせた。

と、おっぱいでパンパンに膨れ上がったブラウスが目飛び込んできた。

ごくつと生唾を飲み込んでしまう。

「おにーさんってば、やらしいんだから♥」

「うん。だってラビメアのおっぱいが、すごいから……」

「ふふ♥ 素直な人は好きだよ♥」

ラビメアは面白がりながら、ノルンの詰め襟のボタンを上から順々に外してくれる。

詰め襟の下からワイシャツが露わになれば、それもボタンを外して、前をだけさせた。

ラビメアは胸板にタッチする。

ピクンッと震えてしまうと、ラビメアはくすぐすと笑った。

「こうして改めて触れると、おにーさんって結構正しいんだっ♡ どうりでミーシアちゃんやチセちゃんを、メロメロにできちゃうわけだぁ♡」

ラビメアが艶めかしい視線を向けてくる。

その妖しい雰囲気、背筋がゾクゾクしてしまう。

「ね、先輩♡」

「え？」

「先輩とこういうことができて、すごく嬉しいなっ♡」

ラビメアのやろうとしていることに気付いて、ノルンはうなずいた。

先輩後輩プレイ。

「ボクも、ラビメアとこうして二人きりでいられて、嬉しいよ」

「ふふ♡ 明日は、みんなに自慢できちゃいますっ♡」

ラビメアのウサギ耳が機嫌がよさそうに揺れた。

「先輩♡」

再びキスをする。今度は初っ端からディープキス。

「んちゅっ♡ ちゅびいつ♡ れろおっ♡ んんっ♡」

リズミカルに舌を這わせて糸引くような音を紡ぎながら、ノルンは自己主張が激しいおっぱいに触れた。

「んっ♡」

ラビメアは、鼻にかかった切なげな声を漏らす。

（ラビメアのおっぱいすごい！ 触れてるだけで、蕩けちゃいそうだし！）

まるで焼きたてのパンみたいになつくらしく、ブラウスごしに指先に少しでも力を入れれば、すぐに弾かれてしまう。

「先輩、本当におっぱいが好きなんですっ♡」

「うん。ラビメアのおっぱいなら特に、ね」

「きやううん♡ 先輩っ♡」

「うう!？」

ノルンは、ビクッと肩を震わせてしまう。

ラビメアが股間をスリスリと擦っていたのだ。

「ふふっ♡ 先輩、昂奮ではちきれそうですっ♡」

「ラビメアのおっぱい見てたから」

ノルンがラビメアのブラウスのボタンを外していけば、

「っ！」

たわなおっぱいが弾けるようにこぼれ出た。

乳肌はクリームのように真っ白で、大きいが決して重力に流れておらず、乳首の位置が高い。

乳首は真っ赤に染まって、ビンビンに勃起している。

そして何より、嵌まったら逃れられないような深い谷間。

グラビアアイドル顔負けのおっぱいに、目が釘付けにならざるをえなかった。

「先輩、吸っていいですよっ♥」

「ラビメア！」

ラビメアのおっぱいに顔を埋めれば、ノルンの顔を優しく包み込んでくれる。

ふにゅふにゅとした柔らかさと弾力感。

そして鼻腔を刺激する、汗と甘いフェロモン。

「もう先輩ったら、まるで赤ちゃんじゃないですかっ♥」

「どんな人でもラビメアのおっぱいと出会ったら、赤ちゃんになっちゃうよ」

「でも、実際私がおっぱいを見せるのは先輩にだけですよっ♥」

ノルンは右乳首に吸いつく。

「あああああんツ♥」

ノルンが背筋を仰け反らせて身震いすれば、椅子がガタガタと音をたてた。

乳首はガチガチに強張って、感触が最高だ。

本当に赤ん坊みたいに、チュパチュパと吸ってしまう。

「あああんツ♥先輩ったら……っ♥」

ラビメアは、ノルンの頭を抱えると優しく撫でてくれる。

それが心地よく、ますますノルンの乳首を吸った。

「んんんツツ♥」

ラビメアは甘い吸り泣きを漏らす。

ノルンは左の乳首にも吸いつく。

「先輩はほんとうにおっぱい星人なんだからあ♥」

「乳首吸われるの、ラビメアも好きでしょ？」

「んっ♥……は、はいっ♥ ああああん♥先輩、歯を立てちゃイヤです♥」

ラビメアの悦びの声が熱を帯びた。

ノルンは乳首を責めながら、おっぱいに指を食い込ませ、さらに揉みしだく。

「あああんっ♥」

「ほら、どんどん噛んだり、搾ったりしちゃうぞ……うう!?」

と、余裕綽々だったノルンは呻く。

腰で、甘い電流が閃いたのだ。

「せ、先輩のここ、弄ってあげなきゃいけませんよね……っ♥」

ラビメアは頬を染めて呟く。

スラックスごしに扱かれたり圧迫されたり——刺激にさらされる。

セックスに比べれば他愛のないものだったが、それでも欲情してしまうには充分すぎた。

「……先輩、ここ弄って欲しいって言ってくださいっ♡」

「い、弄って欲しい」

「誰に、ですか？」

「ラビメアにだ」

ノルンは呆気なく、ラビメアに白旗を揚げた。

ラビメアはおっぱいを吸われるたび、子宮がキュンと疼き、身体が淫らな熱を帯びていくのを実感した。

（おにーさん、たっぷり気持ちよくしてあげるからっ）

ラビメアは舌なめずりをしつつ、

「それじゃあ先輩、おちん×ん、ズボンから出しますね？」

と問いかけた。

「……頼む」

チャックを開ければ、テントを張った下着が飛び出す。

テントの先端は、我慢汁でネットリと濡れている。

（おちん×ん、ガチガチになってるっ♡ これじゃあ、つらいかもしれませんねっ♡）

ラビメアは、下着の合わせ目からペニスを引っ張り出す。

「ああ……っ♡ 先輩、すごい……っ♡」

ラビメアは甘いため息をついてしまう。

露わになった逸物は青筋を立てて、ゴツゴツしていて、露出した龟头冠は我慢汁に濡れていた。

ラビメアは思わず見入った。

「ラビメア、もしかして焦らしてる？」

「ふふ、どうでしょ♡ 今、気持ちよくしてあげますから♡」

ラビメアは、まるで熱した鉄の棒のような逸物に指を絡める。

「うう……！」

「先輩、すごいっ♡ 熱々で、ガチガチに硬くって……あたし、どんどん発情しちゃう♡」

「ラビメアの手、ひんやりしてて気持ちいい……」

「やだなあ、先輩♡ あたしの手が冷たいんじゃないかって、先輩のおちん×んが熱すぎるんです。我慢汁もすごいっ♡」

少し呼吸を上擦らせながらも、ラビメアはゆっくとペニスを扱き始めた。

「うう！」

ノルンが快感に酔った顔をさらす。

（おにーさんが、あたしの手で蕩けてるっ）

ラビメアは嬉しさもあって、最初から激しく扱いた。

「ビクビク震えて可愛いつ♡」

我慢汁を巻き込むように扱けば、グチュグチュと悩ましい水音が弾けた。

「ふふ。おしっこの孔が、ヒクヒクって震えてる♡ もう出ちゃいそうなんですか、先輩」

「ま、まさか……ンチュ！」

「そんないきなり……ふぁぁぁあんっ♡」

ノルンに右乳首を吸われながら歯を立てられてしまえば、ラビメアはあっという間に昇り詰めてしまう。

「イクウウツ♡」

「イってくて、嬉しいよ。ラビメア」

「うう。あたしが先輩をイかせたかったのにつ」

ラビメアは、陰茎を握る手に力を込めた。

「ラビメア、ごめんっ」

「だ、ダメですっ♡ 許しませんからっ♡」

ラビメアは問答無用とばかりに、手を動かし続ける。

「ラビメア……っ！」

ノルンは射精を我慢しようと奥歯を噛みしめるが、ビュルビュルツと勢いよく樹液を解き放った。

「ふぁぁあん……♡」

勢いよく噴き出すマグマが、ラビメアの全身に降りかかった。

ザーメンが制服に染みこめば、熱さが伝わった。

「熱うい……っ♡」

心地よさに、ラビメアの下腹がピクピクと戦慄く。

「ごめん。せつかくの制服なのに……」

「大丈夫ですよ、先輩」

慌てるノルンをなだめたラビメアは戦慄く逸物を眺めれば、まだそれは天井を睨み続ける。

「ふふ♡」

ラビメアは指先で軽く逸物を弾く。

「う！」

「先輩、まだまだやる気満々なんですねっ♡」

いたずらっぽい笑顔を見せる。

「ラビメアの手が気持ちよかったから」

「そう言ってもらえて嬉しいですっ♥……あ、忘れてた♥」

ラビメアは勃起に舌をチロチロと這わせる。

「ここを、ちゃんと綺麗にしないとぉっ♥ レロレロッ♥ んちゅうっ♥」

男根を縁取るようにラビメアは舌を這わせ、汚れを綺麗に舐め取っていく。

蒸れた樹液の臭気を嗅いでいるだけで、頭の芯がジーンと甘く痺れてくる。

（やっぱりにーさんの精液、濃度も匂いも最高……！ この世界に来てからこんなセックスに溺れちゃうなんてびっくりいっ♥）

ラビメアは無我夢中でしゃぶった。

ラビメアのお掃除フェラに、ゾクゾクしてしまう。

「ラビメア、すぐ気持ちいいよっ♥」

「んんっ♥ そおですかぁ？ レロオッ♥ 先輩が気持ちよくなってくれるのが、嬉しいからあっ♥」

ラビメアは、下唇についた子種の残滓をレロッと舐め取った。

逸物はビクンビクンと戦慄きながら、新しい我慢汁をこぼす。

「ラビメア」

「なんですか？」

ラビメアはこちらの心を見抜きながらも、そしらぬ顔で言った。

「そろそろ、いいだろ？」

「先輩。何がしたいのか、ちゃんと言ってくれないと分かりませんよ？」

ラビメアは机に腰かけると、足を組んだ。

ちらりと覗く、オフホワイトのショーツにドキッとしてしまう。

ノルンがしゃぶりまくったおっぱいが、ゆさゆさと艶めかしく弾む。

「ラビメアとセックスがしたいっ」

「あたしも……先輩としたい、ですっ♥」

ラビメアがチェックのスカートをそろそろと持ち上げれば、ショーツを強調してみた。

「ラビメアっ」

ノルンは、ショーツごしのおま×こに触れた。

「ンンッ♥」

ラビメアは、悩ましい表情を見せてくれる。

ウサギ耳が少し後ろに伏せていた。

ショーツごしに割れ目をなぞるように指を動かせば、ぢゅわっ……と、淫らな黒い染みが滲んだ。下着が割れ目に張りつき、スジが浮き彫りになる。

「余裕そうに見えたけど、ラビメアもボクとセックスがしたくて、たまらなかったみたいだ」

「……そ、そんなこと……ヒイイインっ♥」

ラビメアが過敏な反応を見せた。

ショーツごしに陰核がある辺りに触れたのだ。

「今、ちよつとイったでしょ？」

「先輩、そんなにイジワルしないで下さいい……♥」

教室に模した部屋、机、そして黒板。

本当に教室でエッチしているような気になった。

ノルンは、ラビメアの皺クチャのショーツに鼻を寄せる。

「うん。いい匂い」

「い、いや！」

ラビメアは慌ててスカートを下ろして、隠してしまう。

「どうして隠すの？」

「……そ、それは」

「でもラビメアの恥ずかしがり屋なところも、好きだよ」

「違いますっ。そうじゃなくって……っ」

慌てている様も可愛い。

「分かった。もう匂いは嗅がないから、おま×こ見せて」

「……約束、ですよっ♥」

ラビメアのウサギ耳は倒れてしまっている。

それだけ匂いを嗅がれるのは恥ずかしかったのか。

再び露わになった下着に手をかけて脱がしていく。

クチュッ。

秘処に張りついた下着が脱がされることで、淫らな水音が弾けた。

割れ目は鮮紅色の膣肉を露わにして、膣穴がヒクヒクつと小刻みに戦慄いていた。

「ラビメアのおま×こ、素敵だね」

「先輩のおちん×んだって、充分素敵ですよ……っ」

ノルンは秘処に顔を近づけ、潤んでいる膣肉をしゃぶる。

「ああああんっ♥」

「ちよつとおしつこの匂いが……」

「先輩!？」

ラビメアはスカートを下ろそうとするが、ノルンはすかさずクリトリスにしゃぶりつく。

「ひあああああああンンン♥♥♥」

ラビメアは美しい銀髪を振り乱し、スイカくらい大きいおっぱいをたぶんったぶんっと大胆に弾ませながら感極まった。
プシャプシュッ……。軽く潮を吹く。

「ラビメアも、教室でのセックスにノリノリだね」

「と、当然ですうう……。♥♥♥」

ラビメアは絶頂のただなかにあるらしく、円らな瞳をとろんとさせている。

「イっちゃってるみたいだから、ここは慎重にイジらなきゃね」

「今だめ♥ ふああッ♥♥」

右手の人差し指をゆっくり挿入しつつ、包皮が剥けて芯が露わになっている陰核にキスをする。

「あ、あたしのおま×こにキスしちゃダメえっ♥♥」

ラビメアは抗議の声を上げるが、結局はノルンの指先に身を任せてしまう。

温かく柔らかな膣壁に指を吸われる。

締めつけられるよりも、優しくくるまれるような感じだ。

「ああああ、先輩の指があたしの中を掻き混ぜてますうっ♥ やらしいっ♥ みんな部活で頑張ってるのに、あたしたち、こんなにいけないことを、教室でしちゃって……。♥♥♥」

「ボクらだってセックスを頑張ってるよ？」

「ぜ、全然違いますうう♥♥」

ラビメアが身を震わせれば、腰かけている机がガタガタと揺れた。

「もっと気持ちよくなっつてっ」

掻き出される蜜汁が膣口の辺りでグチョグチョと濁った音をたて、泡立ちながら秘処で滲んだ。

蒸れたメスの臭気が、教室に満ちる。

「先輩いっ♥♥ 先輩いっ♥♥」

「すごい量のお汁だっ」

ノルンはデュルルルッと溢れる蜜汁を吸る。

「ひあああああんっ♥♥ せ、先輩、お汁吸っちゃだめええっ♥♥」

ラビメアは手足をピーンと伸ばしながら、上り詰めた。

「ラビメア、敏感だね。これくらいでイっちゃうなんて」

「ああっ♥♥ 先輩、変態……。っ♥♥」

「今、気付いたんだ」

執拗に、吸い続ける。

「ふああっ♥♥ あああっ♥♥ 先輩、イっちゃってるからあっ♥♥ 何度もお汁を飲まれながらイってるからあ♥♥」
目尻に涙の粒を浮かべ、ラビメアは煩悶した。

「だ、だめっ♥ イってるのに、またイっちゃうっ♥ 先輩の指で、おま×こ掻き混ぜられながらイっちゃいますっ♥」

さらに、とろとろに蕩けた蜜肉の圧迫感が強まった。
食いちぎられそうなほどの強い伸縮感。

指を鉤状に曲げ、柔肉を引っ掻く。

「ンンンンンン……ッ♥」

ラビメアは快感に溺れながら、上り詰めた。

バランスを崩して机から転げ落ちそうになるのを、ノルンが支えた。

「すぐくイったんだね」

「……先輩いつ♥ い、いくらなんでもやりすぎだからあ♥」

ラビメアは快感のあまり半泣きで、恨み言を呟く。

「ごめん。あんまりにいい反応を見せてくれたから……」

「先輩、もう、あたし……っ♥」

ラビメアはウサギ耳をへなつと萎れさせながら、シナを作った。

「ラビメア。何がしたいか、はつきり言って？」

「も、もうセックスしたいっ♥」

「ボクもだっ！」

ノルンはギンギンに昂ぶっているペニスを、ラビメアの秘処へ押し当てた。

「せ、先輩い♥」

ラビメアは机に両手を突き、お尻をぐつと突き出す。

秘裂から本気汁がとろとろと滲む。

ラビメアのウサギの尻尾が、フリフリと揺れる。

ノルンは、ラビメアの逆ハート型の肉感的なお尻をむんずと握りしめる。

「ん……ッ♥」

「お尻ぷりぷりだ。いくよ」

「先輩、きてっ！」

ラビメアの激しい欲情の声を聞きながら、後背位で怒張を秘処へ埋める。

「ひiiiiiiiiiiiiiiンッ♥♥」

ラビメアは身悶える。

彼女の肉感的なプロポーションは汗ばみ、銀色の美しい髪が、グラマラスな身体に艶めかしく絡みついていた。
ズンッと最奥を突く。

「せ、先輩のおちん×ん、行き止まりまできてるううっ♥」

重たげなおっぱいが腰遣いに合わせて、振り子のようにぶるんぶるんと前後に揺れ、汗の雫を飛び散らせた。

ぬるぬるの柔肉にペニスを咥え込まれる。

「う……!!」

ノルンは顔を引き攣らせる。

「ラビメアのおま×こやっぱり最高だよ。引きずり込まれるみたいで……」

「せ、先輩のおちん×んがすごいから、いやらしくなれるのお♥」

ノルンは肉感的な桃尻を腰で叩くように弾く。

「ひiiiiiiiiんっ♥」

抜けるか抜けないかのところまで引き、一気に挿入する。

「先輩のおちん×んにゴリゴリ削られるううっ♥」

パチュン！ パチュンツ！ パチュンツ!!



力強く腰を前後に動かしながら、お尻を弾くたび、ふるんぷると尻たぶがたわんだ。

ノルンの激しい腰遣いで、秘処を掻き混ぜられてしまう。

「ああんっ♥ あああっ♥ ひいっ♥ んんんっ♥ あああああんっ♥ すごい♥ おま×こがグチャグチャに掻き混ぜられるうう♥」

ラブジュースを攪拌されるたび、背筋にゾワゾワした快感の震えが走った。

「ラビメアのおま×こ、熱々だっ」

「それだけ昂奮してることだからあ♥」

ラビメアは、ノルンの律動に合わせて腰をクネクネと動かす。

と、胸に手がかかった。

「先輩いっ♥」

胸に指が食い込み、パン生地でも捏ねるみたいに揉みしだかれる。

鮮烈な快感電流が弾ければ、ラビメアは軽く上り詰めてしまう。

「ラビメアのおっぱいふわふわで、揉んでるうちに蕩けちゃいそうだっ」

「んんっ♥ 先輩のおつきい手でグニュグニュされるだけで、クラクラしちゃう♥ おっぱいが、先輩の手の痕だらけになっちゃう……ヒイイインッ!?」

突然乳首をつねられれば、頭が真っ白に染まってしまう。

「も、もっとおま×こを掻き混ぜてえっ♥」

溢れる蜜汁が、床を濡らした。

ノルンも苦しそうな声を漏らしながら、ペニスで子宮口を圧迫する。

と、次の瞬間、耳を撫でられると全身に鳥肌が立った。

「先輩!？」

「ラビメアの耳、綺麗だね。毛がふわふわしてて気持ちいいよ」

「ちょ、だ、だめ……っ♥」

「耳に触れられて、感じちゃってる?」

「そうじゃなくって……くすぐりたい……っ♥」

過敏な耳の内側を撫でるように触れられてしまえば、自分でもよく分からないが、戸惑ってしまう。

「だ、だめえ♥」

「おま×この締めつけが強くなった。気持ちいいんだね?」

「そ、そういうわけじゃ……アアアアン♥」

耳に注意が向いていたところに、すかさずペニスが最奥を突く。

「ヒイイインッ♥ いきなりだめ……っ♥」

肉棹が秘処をこじあけるように侵入し、ラビメアの弱い部分がこれでもかとかばりに抉られてしまう。

「あぁっ♥　だ、だめ♥　あぁんんんっ♥　イジメないでっ♥」

ラビメアはますます上半身を仰け反らせた。

ノルンが耳をまさぐると、膣圧も痛いくらい高まった。

まるで耳が性感帯のよう。

「んんっ♥　耳もおま×こも、どっちもいじめられたらダメになっひゃう……♥」

胸をまさぐり、乳首を圧迫すれば、ラビメアは快感に溺れた。

教室でのエッチなんて、エロマンガくらいでしか見たことのない夢のシチュエーション。

「ラビメア、もっと感じてっ」

ラビメアの膣内を貪るように腰を動かし続ける。

逆ハート型のお尻が胸に負けずおとらず、ぶるんぶるんと弾む。

「ああああんっ♥」

しかしラビメアが下半身を大きく動かした拍子に、ペニスが抜けてしまう。

「あぁん♥　もう……♥」

「もう一回入れ直すよ」

「先輩、待って」

ラビメアは仰向けに寝転がったかと思えば、大きく股を開帳した。

「先輩っ♥　どーぞっ♥」

「ラビメア」

ノルンがラビメアにのしかかるように逸物を秘裂へ密着させれば、そのままズブズブッと挿入を遂げる。

「んんっ♥」

お互いの身体を隙間もなくびったりと重ね合わせ、ラビメアの方から唇を求めてくる。

唇を塞げば、ピチャピチャと唾液の絡まり合う粘着音が弾けた。

唇を重ねながら、腰を叩きつける。

ペニスにニユルニユルとヒダが絡みつき、子種を熱烈に求められる。

「うう！」

そのお陰で、加速度的に快感が高まっていく。

「あぁんっ♥　おにーさん！」

「先輩じゃなくって？」

「もう演技してられないからぁ♥」

ラビメアは無我夢中でノルンの唇を奪い、逸物を締めつけた。

早くノルンの精液を欲しいと訴えてくるように、ますます蜜壺が圧迫する。

「深いいつ♥ おにーさんのおちん×ん、深い場所を執拗に押してくるううつ♥」

「ラビメアの子宮が、下がつてきてるんだよっ」

「もう……おにーさんっ♥」

ラビメアが涙ぐみ、声を上擦らせた。

その艶めかしい表情に、ペニスが限界に達する。

「ボクも！」

腰の動きの幅も短くなり、腰が引き攣った。

「い、一緒にいつ♥」

「出るっ!!」

ビュルルッ！ ドビュッ！ びゆるうつ！ びゆくう！

「イクッ！ イっちゃうッ♥ ンンンン……ッ♥ ルン、ノルン……♡」

プチャッ！ プシヤッ！

潮を吹きながら、ラビメアはぐったりしてしまう。

ノルンはラビメアの胸に顔を埋めながら、絶頂の余韻に身を任せた。

「おにーさん……」

「ふえ？」

「すぐよかったよ♥」

「ボクも……幸せだよ。教室でエッチできて……っ」

ラビメアはノルンの右腕に抱きつき、幸せそうに微笑んだ。

第四章 母乳おっぱい体質にしたらミルクまみれ

「ハァ。のどかですね」

「本当だね」

「こういう日もいいかも」

チセ、ノルン、ミーシアの三人は午後ののんびりした時間を、自宅でお茶を飲んで過ごしていた。

今日はミーシアがお店が休みだからということ、どこかに出かけようか、と考えていたのだが、三人でのんびり過ごすというのも最近していなかったのも、自宅で過ごすことにしたのだ。

お茶を飲みつつ、お菓子を食べる。

そんな風に時間を潰していると、扉がノックされた。

「はい」

ミーシアが玄関に向かえば、

「こんにちは」

顔を出したのはラビメアだった。

「ミーシアちゃんとチセちゃん、いるわね」

ラビメアは、室内を覗きながら言った。

「私たちに用？」

「洋服を買いに行かないかなって。ほら、今日はミーシアちゃんもオフでしょ？」

「あー……そうだけどー……」

「ん？ どうしたの？」

「でも今日はノルンとまったり過ごす予定で……」

「えー、せっかくの休みなんでしょ？ たまには女の子同士で出かけよう。——チセちゃんはいいでしょ？」

チセはあわあわしながら、ラビメアとノルンとを交互に見る。

「あ、あの、私はお兄ちゃんのお嫁さんですから、ちゃんとおそばにいないといけませんので……」

「ミーシア、チセ。いいよ。せっかくなんだから出かけなよ」

「でも……」

ミーシアとチセはそれでも迷う。

しょうがないな、とノルンは立ち上がると、ミーシアとチセの背中をぐいぐいと押す。

「ちよっと、ノルン!?」

「お兄ちゃん……!?!」

そうして二人をラビメアに押しつける。

「せっかくのお誘いを無下にしちゃダメだよ。行つて来なよ」
ラビメアは二人を見る。

「ね？ おにーさんもこう言ってるんだしっ」
二人はうなづく。

「ノルン。できるだけ早く帰ってくるから」

「ゆ、夕食までには戻りますのでっ」

「女同士、楽しんできて」

ノルンは手を振って、三人を見送った。

（夫としていいことをしたなっ）

「……………」

ぽつんと一人。

「……………」

しーんと静まり返った室内。

（暇すぎる！）

一人で家にいるのは馴れない。

前の世界では、ぜんぜん苦ではなかったはずなのに。

ミーシアとチセと、常に一緒にいるせいだろうか。

一人だと、あまりにも手持ちぶさたになってしまう。

しかしあれだけ快く送り出したというのに、さすがに追いかけるのは気が引ける。

（バレなきゃいいのか……）

よし、と思い至ったノルンは、『認識阻外』の魔法を使う。

簡単に言えば、透明人間化だ。

善は急げと駆け出したノルンは、すぐにミーシアたちに追いつく。

三人は恋バナで、盛り上がっているようだ。

「いいなあ。二人とも、毎日おにーさんと愛し合ってるんでしょ？」

「そうよっ」

「そうです」

ミーシアとチセは断言した割に、モジモジした。

「二人とも、初々しい若妻って感じね♪」

「もう。からかわないでよ」

「からかいたくもなるわよ。こーんなにお肌をつやつやさせちゃってーっ」

ラビメアは、ミーシアとチセのほったをツンツンとつついた。

二人は満更でもない顔をした。

「はいはい、ごちそうさまです」

そんなラビメアたちは、とあるお店へ入っていく。

それは女性下着の店。

「え、ここなんですか……？」

チセがモジつけば、ラビメアが笑う。

「チセちゃんってば女同士なんだから、恥ずかしがらなくても大丈夫だって」

「そ、そうでしょうか……」

「おにーさんが好きそうな下着を見つけれれば、エッチの時も昂奮してくれると思うけど？」

「本当ですか？」

「そうそう。ね？ みんなで、あーだこーだ言いながら下着を選ぶのも、楽しいよ？」

普段は入ってはいけないようなお店でも、今のノルンであれば誰に怪しまれることもなく、ラビメアたちを追いかけられる。

（おお！）

ノルンは色とりどりの下着の数々に、目を輝かせてしまう。

ラビメアたちは最初にパンツを選ぶようだ。

最初は消極的そうだったチセだったが、なんだかんだ入念に選んでいる。

「これいいかもっ」

ミーシアが手に取った下着は、黄色いフリルのついたもの。

ラビメアは首を傾げた。

「えー。ちよつと子どもっぽくない？」

「そうかな……」

「おにーさんはどういうのが好きなの？」

「うーん……。染みのこととか言うから、白かなあ？」

思わぬミーシアからの言葉に、ノルンは「違う違う」とジェスチャーで訴えるが、当然、意味がない。

（いやいや、それは誤解だから！）

ミーシアはチセの顔を覗く。

「チセはどうするの？」

「私は……。ミーシア、これはどう？」

ミーシアははつとする。

「スケスケじゃない」

「……う、うん」

ラビメアがニヤニヤする。

「おー。チセちゃんってば攻めるねー。スケスケで、それも黒とかっ！」

「お、お兄ちゃんが悦んでくれると、思いまして……」

（うん！ うん！）

ノルンは大いにうなずく。

「だ、だったら、私はこれっ！」

ミーシアは負けじと、別のパンツを取った。

「み、ミーシア……」

「わおー！ ミーシアちゃん、頑張るわね♪」

（す、すごい……）

チセやラビメアに続いて、ノルンも唖然としてしまう。

今ミーシアが手にしているのは、布面積がかなり削られたTバック。色は赤。

「ノルンが悦んでくれるなら頑張る……！」

「だったら、私も！」

ミーシアに負けじと、チセも同じ下着を手にした。

（二人とも、そこまでボクのことを……）

ノルンは感動してしまう。

「次はブラねっ」

ラビメアが、ミーシアとチセをリードして向かうのは、ブラジャーコーナー。

こっちもパンツ以上に色とりどりで、様々なデザインのもものが揃っている。

「さ、どれにする？」

ラビメアは水を向けるが、ミーシアとチセは困ったような顔をするばかり。

「どうしたの？」

ミーシアとチセは顔を見合わせ、代表してミーシアが言う。

「……わ、私たち、胸が小さいから……」

「えー。小さくてもブラを着て楽しまなきゃっ。あたしはこういうのもいいかなあ」

ラビメアが手にしたブラジャーは花柄。

「どう？ 似合う？」

ラビメアは自分の胸にあてがってみせる。

「……………」

「……………」

二人は何も言わず、チラチラと見る。

「二人とも、どうしたの？」

「そのブラジャー、おっきい……っ」

ミーシアがぼつりと呟けば、

「私ならかぶれちゃいそうです」

チセがびつくりして言った。

「うーん。どうかな」

「うわわっ……!？」

実際、ブラをチセにかぶせると、チセは慌ててじたばたする。

なにせ、目を隠すくらいブラがかぶさってしまったのだ。

「もう。ラビメア。チセをからかわないでよ」

「ごめんごめん」

ノルンは感動してしまう。

（す、すごい……。チセの頭がほとんど隠れちゃうくらい大きいブラジャーを、ラビメアはしてたんだ。どうりで大きいわけだ……）

ミーシアはラビメアのブラを手にして、

「はあ、私もラビメアちゃんみたいにおっぱいが大きかったら、もーっとノルンが悦んでくれるのになあ」

ミーシアは猫耳を伏せ気味にしつつ、言った。

「……私も、ラビメアちゃんみたいにもっと大きくなりたいですう……」

チセもミーシアと同じように、狐耳と尻尾を垂らす。

「揉んだら大きくなるって聞くわよ」

「そんなこと……ひゃあ！」

ラビメアは、ミーシアのおっぱいを揉んだ。

「ちょ、ちよっと、ラビメア、やめてったら……っ!?」

「服の上からなのに敏感なんだ。おにーさんのお陰？」

ラビメアが挑発的なことを言うのと、

「もう、ふざけないでっ」

ミーシアは頬を染めながら声を上げた。

（ラビメア！　なんてエッチなことを！）

ノルンは関係ないのに、ハラハラしてしまう。

「ハイハイ。だったら今日の夜にでも、おにーさんに揉んでもらったらいわ」

「もうっ」

「じゃ、あたしはこのブラを試着するね」

「ラビメアちゃん！」

チセが一步前に入る。

「どうしたの？」

「お、おつきなおっぱいがどんな感じか見せてくれますか……？」

「え!？」

これにはさすがにラビメア、さらにミーシアまで驚く。

(チセ!? なんていいこと……いや、大胆なことを……!)

もちろん、ノルンもだ。

「じよ、女性同士だからいいですよねっ」

チセが勢い込んで言うと、ラビメアは面白そうにうなづく。

「いいわ。……ミーシアちゃんは どうする？」

「わ、私も見せて」

第二夫人であるチセの大胆さに触発されたのか、ミーシアもやる気満々に手を上げた。

三人は試着室に入っていく。

ノルンもそのあとに続く。

試着室はぎゅうぎゅう詰め。

真ん中にラビメア、その右にミーシア、左にチセ、背後にノルン（透明）。

ラビメアは服を脱ぎ、ブラジャーを外せば、ぶるんぶるんとダイナミックに揺れながらおっぱいが飛び出した。

試着室の等身大の鏡に、ラビメアの半裸の身体が映り込む。

おっぱいは色白で、その大ききの割に重力に逆らって、ツンと上向いている。

色づいた乳首が一際目を引く。

(……っ)

ノルンはごくつと生唾を飲み込んでしまう。

「うわぁ……お、おつきい。ですう……。ね、ミーシア」

チセが呟く。

「……う、うんっ」

ミーシアは舐めるように眺めた。

「ふ、二人とも、そんなにしげしげ見られたら、恥ずかしいったら」

「ラビメアちゃん。おっぱい触ってもいいですか？」

チセが上目遣いにラビメアを見つめる。

「……別にいいけど」

「失礼します」

チセが、そっとおっぱいに触れる。

「ん……っ」

ラビメアのウサギ耳がピクンと震えた。

「チセ、どう？」

「すごく柔らかくって……気持ちいいです……」

「でしょ？——ミーシアは？」

「そ、それじゃあ、私も……」

ミーシアもおっぱいに触れる。

「うわっ！ 本当……。すごく柔らかいっ」

ノルンは生唾を飲み込んだ。

（エロすぎる光景だ）

ノルンは股間をパンパンに膨らませた。

（ラビメア！）

ノルンはラビメアの背中に抱きつく。

「ひあっ♡」

ラビメアは上擦った声を上げる。

「ラビメア？」

「ラビメアちゃん……？」

ミーシアとチセは、きょとんとした顔をする。

「おにーさん!？」

ラビメアはキョロキョロしているが、当たり前が見えない。

「ノルンがここにいるわけないでしょ？」

ミーシアが言えば、ラビメアは小首を傾げる。

「あ、あれ？ 今おにーさんのおちん×んが、お尻に押しつけられたような気がしたんだけど……」
（ドキドキするっ）

テントを張った股間をお尻に密着させる。

「んっ♡」

ラビメアの反応に、二人はますます困惑した。

「ほ、ほんとうに、なにが起こってるの……ああっ♡」

ラビメアは瞳を潤ませ、口を半開きにする。

ノルンはラビメアのスカートをたくし上げると、ベルトを外してズボンを脱ぎ、下着を下ろして、ペニスを露わにすると、剥き出しの逸物をパンツに包まれたヒップに押しつけた。

「ふぁあっ♥」

「ね、ねえ、ラビメア。大丈夫？」

「だ、大丈夫じゃない、かもお……っ♥」

お尻をペニスでぐいぐいと圧迫する。

（ラビメアのお尻、大福みたいにむにゅむにゅしてて柔らかいっ。股間を押しつけると、押し返される……っ）
尻フェチになってしまいうるくらい気持ちいい。

（こんなことしたりっ）

ノルンは、お尻を両手でむんずと握りしめる。

「ちよっとお尻、掴んじゃだめえ♥」

「誰も触つてないよ？」

「ええっ!? じゃあ、この感じなにいつ♥」

ラビメアの下着を脱がせれば、割れ目に逸物の切っ先を挿入した。

「んんんんん~~~~っ♥」

ラビメアはウサギ耳をへたつと萎れさせながら果てた。

（ラビメアのおま×こ、アツアツのヌレヌレだっ！）

ネットリと蜜にまみれている柔褰を圧迫するように、ゆっくりとした動作で秘処を掻き混ぜる。

「ああっ♥ なんだか、お、おかしいのっ♥」

ラビメアは熱い吐息をこぼす。

「まるでエッチしちゃうってみたいっ♥」

ラビメアが瞬きするたび、目の端に涙の粒が盛り上がる。

ミーシアは慌てた。

「も、もう帰る？」

「わ、分かんない♥」

ラビメアは豊満なおっぱいをぶるっぶるっつと激しく弾ませながら、ますますいやらしく振る舞う。
糸引くラブジュースが床に、滴った。

「やだあ♥ せ、セックスしてるみたいで頭が真っ白になっちゃうっ♥」

ラビメアの表情に、陶酔の色が表れる。

（ラビメア、イケ！）

ノルンは、ラビメアの秘処めがけ射精する。

ビュルウウッ！ ビュルッ！ ビュクッ！

「んんっ♥ イっちゃううう……っ♥」

ラビメアは背筋を仰け反らせ、絶頂を遂げた。

糸が切れたみたいに膝から崩れ落ちそうになるのを、ミーシアとチセが驚きながらも抱き留める。

「平気!？」

「大丈夫ですか!？」

「ら、らめえ……♥」

ラビメアは肩で息をする。

「ラビメア、ごめん!」

ノルンは魔法を解除して姿を見せる。

「あ、お兄ちゃん! 魔法を使ってたんですねっ。ダメですよっ!」

チセに叱られ、ノルンはうな垂れた。

「ごめん。ちよつとやりすぎちゃったよ……」

と、袖を引かれてそちらを見ると、ミーシア。

「もちろん、私たちにも精液、くれるよね?」

「こ、ここは下着のお店だから……」

「——お兄ちゃん。ラビメアちゃんとはせつくすしたんだから、いいですよね?」

「そうそう。妻の特権、よね♥」

目を輝かせるミーシアとチセに抱きつかれ、ノルンは押し倒されてしまった。

——と、そんなことがあった数日後。

ノルンは暇な時間を活かして、面白いことを考えていた。

（まさかミーシアたちが、おつきいおっぱいに対する憧れを持ってたなんてなあ。どうにか二人に悦んでもらいたい……）
そこでノルンはあることを思いつく。

（よし、これなら……）

その日の夜。

ノルンの部屋に、ミーシアとチセの二人が姿を見せた。

二人は以前ノルンがプレゼントした、ワンピースタイプのシースルーキャミソールを着ている。

その服では二人のささやかな膨らみや、ショーツ、縦長のおへそなどが透けて見えている。

一方、ノルンは全裸。

「二人とも、ようこそ。さ、ベッドに座って」

ノルンのいつもと違う様子に、二人は少し戸惑う。

「ノルン。今日はどうしたの？」

「お兄ちゃん、なんだかニヤニヤしてます……」

「すぐに分かるよ」

ノルンが呪文を唱えれば、二人の胸が光を帯びていく。

「へ!？」

二人の顔が驚きに包まれれば、たちまちシースルーの胸元がパンパンに膨れ上がっていく。

「私たちの胸……!？」

ノルンはこっそりとガッツポーズした。

（成功した!）

ノルンがかけた魔法は『状態変化』。

二人のおっぱいを巨乳に変えたのだ。いや、実はそれだけではない。

「どう、二人とも？」

二人はパンパンにはちきれんばかりの自分自身のおっぱいに触れながら、「おお……」と甘いため息をこぼす。

「す、すごく重たい……。胸が大きい人が肩が凝るって本当なんだ……」

ミーシアは呟く。

「お兄ちゃん、すごいですっ♥ ううん……。お、おっぱいが重たいです……。っ」

「二人がラビメアのおっぱいに憧れてたみたいだから」

「ふふ♥ ノルン、ありがとっ♥」

「大きいおっぱいで、お兄ちゃんを気持ちよくしますねっ♥」

二人は四つん這いになって、両腕で巨乳を絞り出すように強調しつつ、ノルンを挑発的な眼差しで見やる。

ノルンは、二人のおっぱいをキャミソールの上からむんずと握った。

「ああっ♥ ノルン……。っ♥」

「お兄ちゃんの手、温かいですっ♥」

二人は悩ましい表情を見せた。

「うわあ、すごい。おっぱいが破裂しそうなくらいパンパンになってるね……。っ」

ノルンは、二人のおっぱいをまさぐりつつも、乳首は決して弄らなかった。

二人はもどかしそうな顔をする。

「ね、ノルン。焦らさないで♥」

「そうです、お兄ちゃん♥」

「どういことかなー？」

ノルンがとぼければ、

「もう。ノルン、分かってるでしょっ♥」

ミーシアはムツとして、頬を膨らませた。

「はっきり言って」

「乳首ですうっ♥」

声を上げたのは、チセ。

狐の尻尾を、ぶんぶんっとしきりに揺らした。

「よく言えました。——ミーシアは？」

「んん、乳首なのお♥ さっきから乳首がジンジン痺れて疼いちゃって、たまらないのおっ♥」

ミーシアは猫耳を萎れさせる。

「ミーシアもいい子だ」

ノルンは二人の乳首を、コヨリでも作るみたいに刺激した。

「ふにやああああんっ♥」

「お兄ちゃああああんっ♥」

二人の艶めかしい嬌声が室内に響く。

「胸が大きくなってるせいかな？ 乳首がいつもより過敏になっちゃってるみたいだね」

「んんっ♥ そう、かもお♥ 胸がパンパンに膨れるたび、おっぱい全体がジンジンしちゃう♥」

「お兄ちゃんに弄って欲しいって胸が疼いちゃってるんです♥ おっぱいまで発情しちゃうってみたいですよ……♥」

二人は物欲しげな顔で、おっぱいをどんどん密着させる。

「よし！ もっと弄ってあげるっ」

ノルンは、おっぱいに指を食い込ませる。

「「ひひひひひんっ♥」」

二人は、耳や尻尾を豪快に動かしながら身悶える。

おっぱいはまるで水風船のような弾力を、手のひらに伝えてくれた。

もにゅつもにゅつと揉みしただけで、ぶるんぶるんという小気味いい感触が手のひらに広がっていく。

「ノルン、もっと揉んで、めちやくちやにしてえ♥」

「お兄ちゃん、ノルンだけじゃなくって、私も弄ってえ♥」

乳肌はじつとりと汗をかく。

と、ミーシアは不意にビクンツと全身を震わせる。

「ふにやあ!？」

「ミーシア、どうしたの……ンッ♥」

二人は不意に動きを止めると、自分のおっぱいを手ずから揉んだり、触ったりし始めた。

「んんんん……っ♥」

ミーシアは柳眉を顰めて息を荒げ、チセは何かをこらえるように表情を曇らせる。

「胸がウズウズしちゃう……っ♥」

ミーシアが上擦り声を漏らした次の瞬間、
プチャアアアアアアア!!

二人の真っ赤に腫れ上がった勃起乳首から、勢いよくミルクを噴く。

「ふにやああ……♥ おっぱいいいい……♥」

「はあああっ♥ おっぱい、溢れちゃいますうう♥」

どんどんミルクが飛沫を上げた。

濃厚なミルク臭が立ちこめる。

「どうして母乳が出ちゃってるのお……？」

ミーシアは戸惑う。

「母乳が出るようにしたからね」

「え！」

「お兄ちゃん、母乳は余計じゃないんですかあ？」

「でも二人はボクの子どもを産んでくれるでしょ？ おっぱいはどうせ出るんだから、予行演習だと思えばいいよ」

「だ、だからって、こないきなり……っ♥」

ミーシアがおっぱいに触れるたび、母乳がこぼれる。

「お兄ちゃん、乳首の先っぽがジンジンしちゃいますっ♥」

二人は母性の証であるミルクが出るたび、どんどん淫らな雰囲気強めながら媚びた視線をノルンに向ける。

（二人とも、すっかりメスになっちゃってるっ！）

これにはノルンもびっくりだ。

「ミーシアっ」

ノルンがミーシアのおっぱいに吸いつけば、口の中にたちまち甘い母乳が溜まる。

「にやううっ♥ ノルン、いいのおっ♥ ミルクをもっとゴクゴク飲んでえ♥」

ミーシアは、クネクネとシナを作った。

ぷっくりと勃起している乳首に歯を立てて、頬をへこませれば、母乳がビューツとさらに噴く。

「ノルン……っ♥」

ミーシアはノルンの頭を抱えて、おっぱいへ頭を埋めさせる。

「お兄ちゃんっ♥ わ、私も出したいんですっ♥ 私のおっぱいも吸って下さいいいいっ♥」

「よしっ」

「ノルン!？」

ノルンはミーシアのおっぱいから顔を離すと、今度はチセのパンパンにはちきれんばかりのおっぱいに顔を埋める。

「お兄ちゃんっ♥」

チセがたちまち上り詰めるのが、その余裕のない声から分かった。

ノルンは乳首に吸いつき、ミーシアにしたのと同じ要領で搾乳を促す。

「ンンンンンン♥」

チセの母乳はミーシアのコンデンスミルクのようにネットリしたものは少し違って、さらさらして喉越しがいい。その分、どんどん飲めてしまう。

「お兄ちゃん♥ ああああ♥ すごいですうっ♥」

チセは頭を揺さぶり、狐耳をピクピクさせながらまたも達する。

「搾乳でイっちゃうなんて、チセは敏感なママだね」

「ち、違いますっ♥ お兄ちゃんの吸い方がうまいから……♥ あああ、もっと吸って下さいっ♥」

チセは小さな手足をバタバタとさせながら、淫らな声でノルンを求めた。

「ノルン♥ 私のおっぱいも……お願いっ♥」

ミーシアも、おっぱいをノルンの身体に擦りつけてくる。

そのたびにブシャブシャッとおっぱいがしぶいて、ノルンの身体をヌラヌラと濡らしていく。

「ミーシア。そんなに迫らなくても、ちゃんと弄ってあげるよ」

ノルンはチセのおっぱいを吸いつつ、右手でミーシアのおっぱいを握りしめる。

「手じゃなくて、ちゃんとお口でイジって……にやううううん……っ♥♥」

ミーシアは涙目になりながら身悶える。

ミーシアの乳首を少しいじめるだけで、母乳がブチャップチャツと勢いよく噴いた。まるでウシの搾乳みたいだった。

普段は可愛い秘めやかなおっぱいが今はパンパンに膨れ上がって、蠱惑的な雰囲気がある。

「二人の母乳なら、いくらでも飲みちゃうよっ」

ノルンは無我夢中で、二人のおっぱいにむしゃぶりつく。

ミーシアもチセも、悦びに表情をだらしなくさせる。

「ノルンに吸ってもらいと気持ちいいお♥ ああ……もっと吸ってえ♥ ゾクゾクしちゃうっ♥」

「お、お兄ちゃん♥ おっぱいが出るようになってから、胸がいつもよりも敏感になっちゃってますっ♥」

二人はもつともつとノルンを求める。

と、夢中で吸っていたノルンだったが、不意に股間に快感が走った。

「うう!？」

ペニスにミーシアの手が触れていたのだ。

しなやかな指が、ギンギンに昂ぶった逸物を扱く。

「んんっ!」

「ノルンのおちん×ん、ビクビク震えちゃってて可愛い……っ♥」

ノルンは、チセの乳首を無我夢中でしゃぶり回す。

「ああああんっ♥ お兄ちゃんっ♥」

チセは涙目になって悶えた。

「ノルン！ 私のことでも忘れないでっ♥」

ミーシアは、豊富なおっぱいで逸物を挟んでくる。

「み、ミーシア!?」

下半身で弾けた快感で、ノルンは呻く。

「ノルンのおちん×んの熱さが、胸に染みるう♥」

我慢汁を潤滑油にしながらも、おっぱいで抜かれてしまう。

（ミーシアのおっぱいの熱気が、股間に染みこんでくるう!）

ノルンは下半身からこみあげる快感から意識を背けようと、ますますチセのおっぱいにしゃぶりつく。

「お兄ちゃん……ヒアア♥」

思わず強く嚙んでしまえば、チセのおっぱいから母乳が盛大に噴く。

「ノルンのおちん×ん、私のおっぱいが大好きみたいね♥ おっぱいで挟んであげると、ビクビクした震えが伝わってきて

イイツ♥」

ミーシアは激しいバイブリをする。

我慢汁がグチョグチョと白く泡立った。

「ううううう……!!」

ノルンはミーシアにバイブリされながら、チセのおっぱいに顔を埋める。

「あああんっ♥ お兄ちゃん♥」

ミーシアは微笑む。

「もう、ノルンってばしょうがないんだから。——チセも、一緒にノルンを気持ちよくしよ」

「うんっ♥」

チセはいきなり体位を変えたかと思えば、シックスナインの格好になった。

「チセ!？」

「お兄ちゃんにおっぱいをしゃぶられて、あそこも昂奮しちゃってるんですう♥」

チセの秘裂は蒸れて、濡れそぼっていた。

（チセが、ここまでボクを貪欲に求めてくれてるなんてっ）

ノルンは割れ目に吸いつく。

「ひああああああんっ♥」

チセの割れ目に舌をねじこみ、デュルデュルツと食べる。

「お、お兄ちゃんに食べられちゃってるうっ♥」

チセは、たぷうんぷるうんと悩ましく波打つおっぱいをさらに密着させた。

「うぐ!？」

ノルンの乳首に、チセの勃起乳首が刺さった。

ムニユツと乳丘がひしゃげれば、熱いミルクがプチャーツと勢いよく弾けた。

「お兄ちゃんの乳首い♥ こうやって刺激しちゃいますからあ♥」

チセは上半身を悩ましく身動がせながら、ノルンの乳首を念入りに刺激する。

そのたびに、ノルンの身体がミルク臭くなった。

「お兄ちゃん、もつとおま×こ、ナメて下さいい♥」

ノルンは割れ目だけでなく、陰核も攻め立てた。

表面を撫でながら、右手の人差し指を割れ目に挿入し、ぢゅぽぢゅぽと抉った。

「ふあああああ♥ イっちゃいますううう♥」

全身を汗とミルクまみれにしながら、チセは達した。

「チセ、気持ちよくしてもらってよかったね♥」

「うん♥」

ミーシアに言われ、チセはうつとりした顔でうなずいた。

「それじゃ、次は私♥」

ミーシアに亀頭冠を啜え込まれてしまえば、ペニスに快感電流が迸った。

「うううう!？」

「ほらほらあ♥ おしつこの孔もゼーんぶホジホジしちゃうからあ♥ れろお♥ んぢゅう♥ ちゅばあ♥」

ミーシアはツインテールを振り乱し、口の周りをヨダレまみれにしながら無我夢中でしゃぶった。

尿道を舌先でつつき、ずつしりと重たい巨乳で挟んで搾ってくる。

プシャップシャツと母乳が弾け、ペニスもまたミルクまみれになってしまう。

そんな快感にさらされてしまえば、我慢なんて無理だ。

「出る……っ!」

「んん♥ ノルン、出して♥」

ミーシアは射精を促すように、おっぱいで圧迫してくる。

瞬間、ビュルルッ!! と勢いよく子種を弾けさせてしまう。

「んぐぐううっ!!」

ミーシアは、ごきゅっごきゅっと呼ぶように子種を飲んだ。

尿道に一滴も残さないように、おっぱいをうまく使いながら搾られた。

「んー♥ ノルンの精液、濃おーい♥」

ミーシアは「はあーっ」と湿ったため息を漏らして悦に入る。

「チセ、ごめんね。精液に一番ノリしちゃったあ♥」

「うん。いいの。だって次は私が、お兄ちゃんの精液をもらうからぁ♡　そうですよね。お兄ちゃんっ♡」

チセは、膨れ上がった蠱惑的なおっぱいをノルンに誇示した。

「うん！　次はチセに精液をあげるからっ！」

「嬉しいですっ♡」

チセははしゃぎながらノルンの腰の上に乗って、ビンと勃起した逸物を愛おしげに弄くり回す。

「やっぱり、お兄ちゃんのおちん×んすごいですっ♡　一度出したのに、まだすごくカチカチ♡」

「うう、今はまだ射精したばかりで敏感だから……っ」

「大丈夫です。私がちゃんと気持ちよくしますから♡」

チセは腰を調節して、ペニスを呑み込もうとする。

（巨乳を見上げると、すごい迫力だ）

たわわな豊胸が今にも落ちてくるのではと思ってしまうほど、ぶるんぶるんと大きく弾むのだ。

チセは腰を落とし、ペニスを頬張っていく。

「お、お兄ちゃんのおちん×んがきてくれますうううっ♡」

グデュグデュ！

「ひいひいインンッ♡」

根元までペニスが埋まった。

「お兄ちゃんのおちん×んが、お腹でつつかえちゃってますう♡」

チセは豊乳をぶるんぶるんと上下に揺らしながら、仰け反る。

ペニスを呑み込んだ秘裂は、ぱつんぱつんに拡張された。

「チセのおま×こ、すごく締めつけてくるよっ」

ぬるぬるの膣壁に、ミチミチと圧迫された。

「お兄ちゃんっ♡」

チセは甘えた声を漏らし、口づけを求めてくれる。

「チセっ」

ノルンはチセの唇を奪い、舌を絡めた。

チセは、ノルンの舌を啄むように吸いつく。

（お兄ちゃんの舌と絡めただけで、すごく気持ちいい……っ）

ノルンの全身が粟立った。

「ノルンの舌、すごく可愛いね」

「んちゅ♡　れろおっ♡　ああん♡　ちゅぴいっ♡　んふっ♡」

艶めかしい口づけを繰り返せば、乳首がジンジンと熱を含んで、疼いて我慢ができなくなってしまう。

「お、お兄ちゃん……♥」

チセはおっきいおっぱいを重たげにふるふると揺らしながら、盪惑げな眼差しをノルンへ向けた。
ノルンは、両方の乳首をつねる。

「ひiiiiiiiiiiii♥♥♥」

プチャツ！ プチャツ！ プチュウウウツ！！

母乳が勢いよく噴き出す。

金色の毛先を揺らし、チセは身悶えた。

「チセのミルク、すぐく溢れちゃうね。チセにも飲ませてあげる」

「ふえ……？」

ノルンに乳首に吸いつかれてしまえば、背筋に快感電流が閃く。

プシャアアツツ！！

ノルンの口いっぱい母乳が噴く。

口の中いっぱいミルクを溜め込んだノルンは、チセの唇を塞ぐ。

「ンンンツ!?」

ノルンに唇を塞がれ、ミルクを飲まされる。

「ンツ♥ ンウウツ♥ ンキュ……ツ♥」

チセは狐耳をへたと萎れさせながら、小さい喉をコクンコクンと動かして自分のミルクを飲む。

（甘い味がして、美味しい……）

チセは目尻を緩め、とろんとした。

「どう？ 美味しい？」

「お、美味しい、ですう……♥」

「チセっ」

「あンツ♥」

抱きしめられると、たわわに膨らんだおっぱいが胸板で潰れ、頭の中でビリビリッと快感の電流が迸ってしまう。

「ふああああ♥」

同時に、さらにミルクが噴いた。

（む、胸も快感も、どっちも大きくなりすぎちゃってるう♥）

ノルンとの密着感が深まると、チセはますます幸せになった。

「お、お兄ちゃん、おっぱいをどんどん吸ってくださいいっ♥♥ ミルクが溜まりすぎて、苦しいんですうっ♥」
どれだけ出しても、もっと出したいと思うってしまう。

（本当は赤ちゃんにあげるものなのに、身体がゾクゾクしちゃうう……♥）
ますますチセは高揚感を覚える。

「あむっ！」

ノルンは左右の乳首をいっぺんに咥えてくれた。

プチャアアアッ!!

「ひいひいひいひいンッ♡」

一気に母乳を吸われれば、頭が真っ白になって上り詰めてしまう。

「チセ、乳首を吸われただけでイっちゃったの？」

「ンッ♡」

チセは下唇を噛みしめながら、こくこくとうなずく。

「敏感なママだな」

「い、言わないでください♡」

「昂奮しちゃう顔だねっ」

ノルンは腰を叩きつけた。

「ふああっ♡ あああ……っ♡ は、はげしい♡ お兄ちゃんのおちん×んがあそこの深い場所を突いちゃいますぅ♡」

チセは腰をくねらせながら、ノルンの逸物を奥へ誘う。

子宮口をズンズン突かれるたび、その刺激で母乳が溢れた。

「お兄ちゃん♡ お兄ちゃん、イっちゃってるんですぅ♡ あああんっ♡ や、休ませて下さいいっ♡」

チセは半泣きになりながら腰を引こうとするが、ノルンががっちりと掴んでしまっているせいで身動きが取れない。

「さっきは自分から、ボクのを受け入れたクセにっ」

「気持ちよすぎてしまっつて、何をしてるのか、自分でも分からなくなっちゃってるんですぅ♡♡」

絶頂するたび、チセの言葉とは裏腹に、陰裂は逸物をますます締めつけ、射精を促す。

「チセの身体は、まだ気持ちよくなりたいって言ってるけど？」

「あああんっ♡ 許して下さいいっ♡」

チセは、半ばろれつが回らない状況で困惑する。

しかしノルンは休まず、チセを気持ちよくしてきた。

ミルクでパンパンに膨れたおっぱいに、ノルンが顔を埋めてきたのだ。

プシャッ！ プチャッ！ プツチュアアアアア!!

さらに母乳が噴き上げて、ベッドをグチャグチャに濡らしてしまう。

「ごめんなさいいっ♡ ミルクでお兄ちゃんのベッドを汚しちゃって、ごめんなさいいっ♡」

「平気だよ。それだけチセが感じてるって証なんだからっ」

ノルンはますます乳首に吸いつき、さらに腰を激しく前後に動かして蜜汁を掻き出す。

「ああああっ♡ ああん♡ ひやあああんっ♡ あああっ♡ だめだめえっ♡ お兄ちゃんのおちん×んでおかしくさせられ

ひやいますぅぅぅぅっ♡ ひいんっ♡♡」

チセは桃尻を揺さぶり、おっぱいをたふんたふんと揺らしながら、全身でペニスの挿入を悦んだ。反射的に、逸物をぎゅっと締めつける。

「チセ！　すごくいい締めまりだねっ！」

「お兄ちゃんに気持ちよくなってもらうためですう……♡」

「それじゃ、この格好は気に入ってくれるかな？」

「ひあああん♡」

激しい体位の変化に、チセは嗚咽した。

チセをバックで犯す格好になったのだ。

「深いですう♡」

ノルンが腰を振れば、胎内を引っ搔くように前後に動くペニスを、全身を使って気持ちよくする。

ペニスが柔肉を挟るように動けば、快感電流が弾けた。

「ひいん♡　お兄ちゃんっ、もっと動いてくださあい……♡」

チセも自ら下半身をクネクネと揺らしながら、ペニスを貪った。

グチュッ！　ヌチュッ！　ズチュ！　ギュチュッ！

男根で攪拌され、愛蜜が白く泡立つ。

「チセ、いいよっ！　気持ちいい！」

ノルンも一層昂奮して腰を激しく動かす。

「ああ♡　はあ♡　お、お兄ちゃん♡　お兄ちゃん……♡」

「チセ！」

「お兄ちゃん……？」

ノルンは、チセの両腕を掴めば、ぐっと後ろに引っ張る。

強い力で引っ張られたことで、ペニスがより子宮口をぐっと押し上げた。



「ふあああ~~~~んっ♥」

チセは、酔い痴れたようなとした表情をして身悶えた。

絶頂を遂げたことで、痙攣する媚肉が逸物をぎゅっと握りしめる。

「この体勢だと、より一体感があるよねっ!」

「この体位、イイですうッ♥ お兄ちゃんをより感じられますうっ♥」

本来なら痛みもあつていいような荒っぽい抽送だったが、溢れる本気汁もあいまって快感が増幅された。

(お兄ちゃんとのせつくす気持ちよすぎて、頭がバカになっひゃううっ)

そこへミーシアが現れる。

「チセ。ノルンのおちん×んで、気持ちよくされて羨ましいにゃあ」

ミーシアは猫尻尾をぶんぶんとかししながら、チセの右胸に吸いつく。

「だめえええええええええ♥♥」

チセの胸から母乳が噴く。

「ううん♥ ミルク、おいしいっ♥」

ミーシアは鼻の下にミルクの痕をヒゲのようにくつつけながら、ますます搾乳に熱中した。

「だめですう♥ 二人にいつぺんに攻められちゃったらあ……またすぐにおかしくなっちゃいますう♥」

と、胎内深く埋まっている肉棒が、膨張する。

「チセ、出る! 出るよっ!」

「出してくださいっ♥」

ノルンが呻いた次の瞬間、子種汁がビュルルッビュルウッ! と勢いよく迸った。

「お兄ちゃんのお汁をもらいながらイっちゃいますう♥ ああああ、幸せになれちゃうんですう♥ またたくさん、

おっぱいでりゅうううううう♥」

プシャアアアアアアアアアア!!

チセの乳首から母乳が噴く。

「ああ……だ、だめえ……♥」

チセは前のめりになって、その場に崩れ落ちてしまう。

「チセ、大丈夫!」

ミーシアとノルンは駆け寄るが、チセは「幸せですう♥」と甘えた声を漏らした。

「よかった……」

ノルンが胸を撫で下ろしていると、

「ノルン、次は私っ♥ ミルクがパンパンに溜まりすぎちゃって苦しいんだから、しっかり搾ってくれるよねっ♥」

ミーシアが、甘えた声で喉を鳴らした。

「にやうんっ♥　ねえ？」

「そうだね。次はミーシアだっ」

ノルンはミーシアを優しく仰向けに押し倒すと、おっぱいをむぎゅっと握りしめる。

プシャアアアア!!

「ふああああんっ♥」

少し握っただけで、真っ赤な勃起乳首から真っ白なミルクが噴く。

「本当にミルクがたくさん溜まってたんだねっ」

「そ、そうなのおっ♥　苦しくって大変だったんだからあ♥」

「ごめん。待たせた分まで気持ちよくするからっ！」

「ふにやあああんっ♥」

ノルンはミーシアの唇を塞ぐ。激しいディープキスを紡ぎながら、むぎゅむぎゅっとおっぱいを揉みしだく。

豊満に育ったおっぱいがふるんぷるんと艶めかしくたわみながら、手のひらにマシュマロのように吸いつく。

「おっぱい、むにゅむにゅしてて気持ちいいよ。……あむっ！」

ノルンは右胸に顔を埋めながら、乳首を吸う。

「ひああッ♥」

ミルクを出したくしょうがない乳首がパンパンに勃起して、少し歯を立てるだけでミルクが噴く。

ネットリとして、甘いミルク。ノルンは頬をへこませてごきゅごきゅっと呼ぶように飲み、左乳首を摘みながらコリコリと

まさぐった。

「にやああああんッ♥　ミルクが、止まらないのおおお♥　あああ♥　ノルンに飲んでもらうと嬉しいのおっ♥……ひあッ♥」

♥

「どうしたの？」

「……あ、当たってるう♥」

ギンギンに昂ぶった逸物が、ミーシアの身体に触れていた。

「ノルンのおちん×ん、すごく熱い……っ♥」

「ミーシアのおっぱいが魅力的だから、昂奮できてるんだよ」

ノルンは肉棒をミーシアの太腿に押しつけ、我慢汁を塗りたくった。

ミーシアの身体がビクンッと反応する。

「ノルンのおちん×ん、すごく硬い♥　ビクビクしちゃってるう……♥」

ミーシアは目元を紅潮させ、肩を上下させる。

「あそこがジンジン疼いてるのおっ♥　ノルンのおちん×んが欲しい……♥」

ミーシアは秘裂を手ずから開き、誇示する。

「でも普通の格好じゃつまらないよね」

「え？」

「……こうしよう！」

「へ!？」

ノルンはミーシアを横臥の格好にさせた。

「ノルン!？」

ミーシアの左足を抱きしめながら、ペニスを挿入する。

「ああああああッ♥ ノルンのおちん×ん……ッ♥」

ズブズブとペニスを埋めれば、母乳がビュルルツとこぼれた。

深い場所まで逸物が達すれば、ミーシアは蕩けるように幸せそうな顔をする。

「ああッ♥ すごく深いっ♥」

ミーシアは満足そうに下腹を撫でた。

「ミーシアのおま×こ、すごく締めつけてくるよっ」

「うんッ♥ ノルンとセックスできるのを、待ってたからあ♥」

ぬるぬるの秘処が、ノルンの男根を圧迫する。

膣圧で多少動きにくかったが、ミーシアを気持ちよくしたい一心で動き続ける。

ブリュッ! グチュッ! スチュ!

「あああッ♥ しゅ、しゅごいにやあ♥ ノルンのおちん×んがブスブス刺さりゅうう♥ ひiiiiいんっ♥」

ミーシアは猫耳や尻尾を激しく揺らしながら、快感に溺れる。

「ノルン! もっとミルクを、搾って……!♥」

「分かった！」

ノルンは腰を動かしながらおっぱいを握りしめれば、すぐに手のひらはミルクでベトベトに濡れた。

漂う甘い香りに、劣情がなおさらくすぐられる。

「にやう!? ノルンのおちん×ん、大きくなったあ!？」

「ミーシアとのエッチが、気持ちいいからだよっ！」

ノルンは激しく腰を動かし、蜜汁を掻き出す。

「ひいんッ♥ ノルンのおちん×ん、ゴリゴリすごいいいっ♥」

ミーシアはツインテールを振り乱して、悦美を訴えた。

ますます柔肉に、ペニスを啜え込まれてしまう。

（ヤバッ! すぐに出そうになる!）

大きい腰振りができず、ミーシアの秘処を引っ掻くように、小刻みに動くくらいしかできない。

そうすると、ミーシアの発情した膣内が余計に、射精を催促してくる。

「ノルン、急に動かなくなっただうしたの？」

「ごめん、ミーシア。出ちゃいそうになって……」

「何度出してもいいよ♥ ノルンの精液だったら、何度でも欲しいんだからあ♥」

ミーシアは甘えた声を漏らす。

「出して、ノルン♥」

「——ミーシア」

「チセ!？」

ノルンとミーシアは同時に驚いた。チセはまだ絶頂の余韻から抜け出していないようで、ぼんやりした表情でミーシアの胸に顔を埋めてくる。

「あああんっ♥ チセ、おっぱい吸っちゃだめええ♥ んうううんっ♥」

チセは、まるで本物の赤ん坊のように乳首に吸いつく。

「アアアアンツ♥ チセ、赤ちゃんじゃないんだからあ♥」

しかしチセはおっぱいから離れない。

「ミーシアのおっぱい、美味しいいっ♥」



そう無邪気な顔をする。

膣圧が緩んだ瞬間を逃さず、ノルンは最奥を突く。

「今はだめえ♥ ああああ♥」

「ミーシア、たくさんおっぱい出てるうつ♥」

「ち、チセえ♥ イっちゃってるからあ♥ 吸わないでえ♥」

「おっぱい♥ ちゅぱっ♥ ちゅぱあ♥」

チセはますます吸いついているようで、ミーシアは身を振った。

「ミーシア！ 二人だけで楽しむなんてずるいよ！」

「私はノルンのおちん×んで気持ちよくなりたいだけなのおっ♥」

ミーシアは肌を汗ばませ、総身を戦慄させる。

股を広げ、ノルンと繋がっている場所を示す。

「こんなにグチョグチョになっちゃってるのっ♥ ノルン、もっと激しく奥を突いてっ♥」

射精欲求が盛り上がり、ノルンは奥歯を噛みしめる。

「も、もう……！」

ミーシアがうんうんとうなずく。

「ノルン、ちょうだいっ♥ 精液でイかせてえっ♥」

ビュルッ！ ビュルルッ！ ドビュッ！ ビュウッ！

「イクッ♥ イっちゃやううつ♥ ああああ、子宮が精液で燃えちやうう……イクウウウウウッ♥」

次々と放たれる精液に、ミーシアはますます母乳を噴き上げながら上り詰めた。

「あ、れ？ わたしい……？ チセ、すごい幸せそう……」

はっと我に返ったチセは、ぼんやりした声を漏らしつつ我に返る。

ノルンは笑ってしまう。

「あははは。チセ。ミーシアを幸せにできたのは、チセのお陰なんだよ？」

「わ、私……ですか？ ぜんぜん覚えてません……」

「それだけエッチで気持ちよくなってくれたってことだね」

と、二人のおっぱいはあつという間に可愛らしい元のサイズに戻っていく。

「やっぱりそのおっぱいも可愛いね」

ノルンは二人を抱きしめた。

（うーん……。どうしたらいいんだろう）

とある日。ノルンはミーシア、チセとエッチした後、すうすうと静かに寝息を立てている二人の顔を覗き込んだ。二人の愛らしい寝顔に思わず口元が緩んだものの、ノルンはすぐにうな垂れた。最近、心配事があった。

というのもセックスのプレイに関して、マンネリを感じていたのだ。

（もっというろいろなプレイをしたいけど、この世界じゃ道具がなかなか見つからないし……）

ミーシアたちが、毎回気持ちよくなってくれてるのは救いだけれど。

（ラビメアに相談してみようかな）

彼女ならこの世界に詳しいし、ノルンと同じ転生者で価値観も共有できる。

相談するなら、ラビメア以外ないだろう。

（よし！ 明日、訪ねよう！）

翌日、ミーシアとチセが外出したのを狙って、ラビメアの家を訪ねた。

いつもラビメアの方から訪ねてくるから、ノルンがいきなり訪ねてきたことに、少しびっくりしたようだ。

「あれ、おにーさん、どうしたの？」

「ラビメア!?」

しかしノルンはラビメア以上に驚いてしまう。

なにせ、ラビメアは裸エプロンのような格好をしていたのだ。

「その格好……」

「えへへ♪ 可愛いでしょ？」

ラビメアはくるとノルンに背中を向け、綺麗な肌と豊満なヒップをこれでもかと主張してみせる。ウサギの尻尾がぽんぽん揺れた。

「どう？ 似合う？」

「う、うん」

「ありがと♪ どうぞっ♪」

居間に案内されて席に着くと、紅茶とお茶請けのクッキーを出してくれる。

「ありがと」

「いいえ。でも突然どうしたの？」

「えーっと……」

「んー？」

ラビメアは小首を傾げた。

「エッチのことなんだけど！」

「へ!？」

さすがにラビメアはびっくりする。

ノルンは言葉足らずなことを反省して、悩みを打ち明ける。

「なあに、おにーさんっ！ そんなことで悩んでたの！」

思いっきり笑われてしまった。

「ら、ラビメア、そんなに笑うことないよ……」

がつくりとうな垂れた。

「ふふふ ごめんね。でもおにーさんも真面目なんだね」

「そ、そうかな？」

「だって、あの二人が気持ちよくなってるんだから、普通はマンネリなんて考えないんじゃない？」

「でもどうにかしたいんだ」

「どうにかって言うてもなあ。あたしもエッチに精通してるわけじゃないんだし」

「ボクだってそうだよ」

「体位を変えるとか……罵倒プレイは？」

「罵倒？」

「ミーシアちゃんかチセちゃんに罵ってもらうの」

「いや、それはさすがに……。二人もそんなことしたくないだろうし」

「それじゃあ、道具を使うとか……？」

「道具……。そっか、道具か」

ノルンはとあることを思いつく。

「ラビメア、この町に工房みたいなものはある？」

「あるけど、何を作るの？」

「ちよっと、ね」

ラビメアは妖しく笑う。

「もー。おにーさんってば顔に出すぎ。すぐエッチなこと考えたでしょ？」

「え!? いや、それは……! ラビメア、くれぐれもこのことは内緒に……!」

「そんな動揺しなくてもいいから。おにーさんが何をしようとしてるのか楽しみだから、黙っててあげる」

「あ、ありがと」

ノルンがほっと胸を撫で下ろしたのも束の間。

「ただし」

「な、何……？」

「あたしもそれに参加させて？」

「いいよ」

ノルンは即答した。

（そっちの方が楽しくなりそうだし……）

そんなことを考えていると、

「あ、またエッチな想像してるでしょ」

「え!？」

「ふふ。おにーさんってば、面白い♪」

ラビメアは、くすくすと笑った。

数日後、工房でデザインしてもらった商品が、ノルンの元に届く。

デザインは頼んだ通りの形——男性器。いわゆるディルドだ。

材質は木材。

（よしっ）

ノルンはミーシアを部屋に呼ぶ。

「ノルン、どうしたの？」

「今から出勤だよね。……これ」

「あ。それ……。お、おちん×ん、みたいな形、ね……」

ディルドをまじまじと眺めたミーシアは、頬を染めた。

「これをおま×こに入れて、職場に行って欲しいんだ」

「え!? む、無理よっ」

「でもハラハラして、きつと楽しいよ。ボクもあとでカフェに行くから。ね？」

「ううう……」

ミーシアは困惑しながらも、ディルドを受け取ってくれた。

「いきなり入れるのは大変だろうから……」

ノルンはその場に跪くと、ミーシアのスカートをまくり上げ、ショーツを膝下まで下ろす。

「の、ノルン……出勤しないといけないのに……♥」

ミーシアはそう言いながらも、身動き一つせず、ノルンに従う。

「大丈夫。すぐに終わらせるから……エロッ」

「ひいんッ♥」

「しーっ。チセに聞こえちゃうから」

ミーシアは、はっとして口を両手で覆った。

無毛の秘処に鼻を寄せて、くんくんと嗅げば、少しおしっこの匂いがした。

「んんッ！」

ミーシアがうなり声で訴えてくる。

「ごめんごめん」

ノルンは声に出さず口の形だけで言えば、もう一度秘裂の表面を撫でるように舐めた。

「ンウウッ♥」

ミーシアは小鼻を膨らませ、頬を染めた。

「んちゅっ、レロレロッ」

「んんんッ♥」

ミーシアは艶めかしい嬌声を漏らして身悶える。

ぢゅんっ。割れ目から透明な蜜汁が滲んだ。

ノルンが割れ目を優しく開けば、鮮紅色のぬるぬる肉が顔を出す。

夢中で吸いつく。

「んうううっ♥ うううんっ♥ んっ♥ んぐっ♥」

ミーシアは膝をガクガクさせながら、背中を壁に押しつける。

とろーっとな蜜の雫が垂れて、内股を滑り落ちていく。

「のるうん……♥」

ミーシアが鼻にかかった蕩けた声をこぼす。

「指を入れるよ」

「んっ♥」

ミーシアがうなずけば、右手の人差し指を潤んだおま×こに挿入する。

クチュッ。

「ングウッ♥♥」

昨夜もエッチしたせいか、柔肉が指にネットリと絡みついてくる。

（吸いつかれるっ）

温かな蜜汁をなすりつけるようにしながら、指を奥へ奥へと引きずり込むとする感触がたまらず、股間が膨らんでしま

う。
（最後までやれないのはつらいけど、今は我慢！ 本番はこれからなんだから！）
ノルンは自分に言い聞かせながら、指を抜く。

ラブジュースの糸が長く伸びた。

「ひあっ♥」

ミーシアが名残惜しそうな声を漏らしながら、『そのままイかせて』と言わんばかりの熱っぽい眼差しを向けてきた。

（ミーシア。あとで気持ちよくしてあげるから、待ってて）

そうしてデイルドを膣の入り口に押し当てた。

「ああっ♥ つ、冷たい……っ♥」

「入れるよ？」

「う、うん……っ♥」

グチュグチュツ！

「ンンン……ッ♥♥」

挿入すると同時に、ミーシアが達するのが分かった。

秘処がぎゅっと締まるのが、デイルドごしに伝わる。

「よし。仕事、いつてらっしゃい」

「へ？ お、終わり……？」

ノルンは、デイルドが半ばくらいまで秘処から露出している上からショーツを穿かせる。

「ううう……い、いつてきまあす……っ♥」

ミーシアはやや内股気味で家を出ていく。

「お兄ちゃん。ミーシア、ちょっと変じゃありませんでした？」

チセはミーシアを見送ると不思議そうな顔で言った。

「大丈夫。気のせいだよ」

ノルンは「ちよつとラビメアのところへ行ってくるよ」とチセに言って、家を出た。

ノルンはラビメアの家の戸を叩く。

「はぁーい。——あ、おにーさんっ！」

ラビメアがすぐに出てくる。

今日も相変わらず、裸エプロンのような過激なファッションだ。

「入っていい？」

「もちろん。——悪だくみ開始、ね」

「悪だくみなんて心外だな。セックスを盛り上げるための演出だよ」

「ふふ。で、あたしはどうすればいいの？」

「これをおま×こに入れて」

ノルンが差し出したのは、ウズラの玉子より一回り大きい球形の物体。

「あーっ」

ラビメアはすぐにピンときたらしい。

「ローターね♪」

「正解」

「それで、ミーシアちゃんもローター？」

「ミーシアにはデイルド」

「いいなあ♥」

「それじゃ入れて」

ラビメアが流し目でノルンを見た。

「おにーさんに入れてもらいたいなっ♪」

「しょうがないなあ」

「チセちゃんには、なんのオモチャ？」

「チセにはやらないよ」

「えー。奥さんなの？」

「考えてもみてよ。チセにこんなことしたら、きっと泣き出しちゃうよ。それに、チセは大人だと分かっている、あの見た目の子にやるにはちよつと鬼畜すぎるなーって……。あはは」

「いろいろ考えてるんだ♪」

「奥さんのことだからね」

「もー。妬けちゃうなっ♪」

「ふふ。それじゃあ、ラビメア、おま×こをほぐすよ」

「んん、どうぞ♪」

ミーシアの時と同じようにしゃぶる。

「んんっ♥ 舌遣い、優しいっ♥」

ラビメアはウサギ耳をフラフラと揺らし、ビクンツと反応する。

「あれ？ もうおま×こが、ぬるぬるだよ？」

「……おにーさんに何をされちゃうのかってずっと考えてたら、こらえきれなくなっ……」

「しょうがないな。オナニーしちゃうなんて」

「ごめえーんっ♥」

「ローター入れるよ？」

「きてっ……ああっ♥ 冷たあいっ♥」

ローターを入れると、下着を穿かせる。

「どんな感じ？」

「ううん……っ♥ な、なんか……あんな小さいものが入ったはずなのに、すごく……違和感……っ♥」

ラビメアは頬を染めて、モジついた。

「それじゃ、ミーシアのお店に行こう」

「そ、そうねっ♥」

ラビメアはミーシアと同じように内股気味で、歩くのが大変そうだった。

ミーシアは職場に向かう途中も、チラチラと辺りに目を配ってしまう。

秘処には今、ノルンのおちん×んくらい大きい怒張が埋まっている。

誰かに指摘されたらどうしよう――。

そんな風に、疑心暗鬼に囚われてしまう。

「あら、ミーシアちゃんっ」

「ひゃっ!？」

「驚かせてごめんねー。今からお仕事？」

それは雑貨屋さんの男性店主。

「そ、そうです……」

「今日もお昼に行くからね。いやあ、ミーシアちゃんに給仕してもらうと、料理が何倍も美味しく……」

「あ、ありがとうございます……。あ、あの、私、急いでますのでえっ」

啞然とする常連さんを尻目に、ミーシアは逃げるようにその場を去らなくてはいけなかった。

（ノルンってば、こんなことをさせるなんて……っ）

でも少しでも感情的になっていきめば、デイルドを締めつけてしまい、全身に快感の電流が迸ってしまう。

（ああ♥ イっちゃううう……♥）

ミーシアは肌を粟立てながら、ヨロヨロと覚束ない歩みで職場に向かった。

「お、おはようございます……」

（よ、ようやくついた……）

ミーシアは今にも崩れそうになる身体に活を入れ、オーナーに挨拶をした。全身に、じつとりと嫌な汗をかいていた。

「あれ、ミーシアちゃん、大丈夫？」

「え。な、なんですか？」

「すごく疲れてるみたいだけど……」

「ちょ、ちょっと寝不足気味で」

「あはは。大丈夫？」

「はいっ。何も問題はありません。……着替えてきますねっ」

ミーシアは引き攣った笑みで頭を下げると、更衣室に飛び込んだ。

「はあっ」

ため息が出た。

疲れているのは当然。

なにせ、ここに到着するまでに五回は達したのだ。

（ダメッ。足りない……っ）

絶頂しているが、物足りない。ただただムラムラするだけだった。

我を忘れてしまうくらいの快感を与えてくれるのは、ノルンしかない。

しかし今はどうにもならなかった。

服を着替えようとして、おもむろにスカートをまくれば、

（グチャグチャになっちゃってる……っ）

ミーシアは息を呑んだ。

下着はお漏らしでもしたみたいにな、ベチョベチョに濡れていた。

ミーシアがショーツを脱げば、秘処の深い場所まで挿入された異物が少し露出しているのが見えてしまう。

（もう、ノルンってば、あとで怖いんだからっ）

そう心の中でノルンへの怒りを募らせながら、制服に着替えた。

（大丈夫ね……。スカートでちゃんと隠れてる）

鏡に自分の姿を映しながら、しっかりと点検する。

今すぐデイルドを抜いてしまいたいのは山々だったが、ノルンとの約束がある以上、妻としては破りたくなかった。

と、その時。

「ミーシア、おはよー」

突然声をかけられて、びくっとしてしまう。

恐る恐る振り返れば、同僚だった。

「あ、おはよう……」

「オーナーが、体調が悪そうって言ってたけど本当？」

「ううん、平気」

「そっか。まあ、つらかったら言って。サポートするから。それじゃ、今日もよろしく」

「よ、よろしく」

ミーシアは同僚と一緒に、フロアへ出ていった。

ノルンたちは、ミーシアの働いているカフェに向かう。

（ミーシア、ちゃんとやれてるかな？）

自分でしておきながら、変な心配をしてしまう。

「いらっしやいませーっ！」

席に案内される。

ノルンがキョロキョロしてミーシアを探せば、彼女は料理を席に運んでいった。

「ミーシア、ご新規さんのテーブルをお願い」

「はい……」

と、ミーシアと目が合った。

彼女が内股気味にやってくる。

「……の、ノルン」

「具合はどう？　ちゃんと入れたままにしてる？」

「ん……っ♡」

ミーシアは瞳を潤ませながらも、うなづく。

「仕事の調子はどう？」

「どうもこうもないよお……♡　おま×こはジンジンしちゃうし、ムラムラしちゃうて、まともに考えられないしい……っ♡」

「ミーシアの顔を見れば、どれくらい発情しちゃってるかがよく分かるよ。いつもの発情顔」

「もう……！」

「あはは。ごめんごめん。怒らないで」

「……そ、それで」

「なに？」

「もう抜いてもいいの？」

「まだだめ」

「そ、そんなあ」

「——ミーシアちゃん。一緒に楽しみましょ？」

「え？」

ミーシアは、今さらラビメアに気付いたようだ。

「ラビメア？　どうして？」

「……あたしもあなたと一緒に」

「一緒……？」

ミーシアは意味を計りかねた顔をする。

「……あたしも、おま×こに入ってるの」

「ノルン!?」

ミーシアは、ノルンを睨んでくる。

その目には嫉妬の光があった。

「あははは」

「笑って誤魔化さないっ」

ミーシアは周りに聞こえない、それでも怒りの籠もった声でうなった。

と、ラビメアが助け船を出してくれる。

「ミーシアちゃん。そう怒らないで。あたし、おにーさんに事前に相談を受けてね」

「ラビメアが？ ノルン、どうして私に相談してくれないの？」

「落ち着いて。おにーさんは、ミーシアちゃんたちのセックスがマンネリ気味だって悩んでて、それであたしに相談したの。そんなことミーシアちゃんは相談されても困るだろうし、おにーさんだって相談しにくいだろうし」

「……ま、まあ、そういうことだったら……」

ミーシアは口ごもる。

「あたしは、面白そうだから便乗させてもらったの。――で」

「なに？」

「注文お願いできる？」

「う、うん……。それじゃあ、何にする？」

ノルンとラビメアは注文をする。

「わ、分かった……」

注文を取ったミーシアは、来た時とおなじような慎重な歩みで、厨房に向かっていく。

ラビメアが話しかけてくる。

「ね、おにーさん。もしかしてこれで終わり？ おにーさんにしては大人しいんじゃない♥」

「ボクをなんだと思ってるの？」

「で、どうなの？ 終わり？」

「まだまだ。これからだよ」

ノルンが手のひらサイズのスイッチを押した瞬間、

「ああああああんっ♥」

艶やかな声が店内に反響した。

店のお客さんたちが、びっくりしたようにキョロキョロする。

声を上げた一人は、ラビメア。

彼女はテーブルに突っ伏し、ウサギ耳をへたとさせながら肩で息をしていた。

何かをこらえるように、下唇を噛みしめている。

「ラビメア、イった？」

「い、今のなに……？」

「面白いこと」

「……あたしだけじゃないよね？」

「当たり前だよ」

ノルンは不敵に笑った。

ミーシアはノルンたちのオーダーを厨房に伝え、他のお客さんの接客に当たっていた。

（ノルンってば何考えてるんだろ……。誰かに見つかったら大変なことを、妻にさせるなんて……）
そこへ、オーナーから声がかかった。

「ミーシアちゃん。三番の席、お願いねー」

「あ、はいっ」

ミーシアがメニユーを持っていこうとした次の瞬間、突然、快感が全身を貫いた。

「ひiiiiiiiiいんっ♡」

頭が真っ白になれば、メニユーを落としてうずくま蹲ってしまう。

「だ、大丈夫ですか？」

そばにいたお客さんが恐る恐る触れれば、

「ンンンッ♡」

小さな絶頂を覚えてしまう。

秘裂がジクジクと疼き、蜜が床に滴った。

「だ、大丈夫です……♡ 少し、立ち眩みがしただけで……」

ミーシアは頬を染めながら、お客さんのところにメニユーを届け、ノルンの元へ直行する。

「ミーシア、大丈夫？」

「もうっ。と、とぼけないでっ。ノルンの仕業でしょっ」

「うん。このリモコンを使ってね」

「も、もうやめてっ。おかしくなっちゃうからあ♡」

「加減は気をつけるね」

「ノルン……！」

「ミーシアちゃん。あたしも、ミーシアちゃんと同じ状況だから」

「ラビメア、どうにかノルンを止めて」

「ごめん。あたし、楽しいし♡」

「ひどい……っ」

そこに、オーナーの声がした。

「——ミーシアちゃん。四番さんの注文でした！」

「は、はいっ！……ンツ♥」

食事を取りに行った直後、ディルドが震えれば、ミーシアはびくんと全身を震わせ、反応してしまう。どうにか下唇を噛みしめ、ギリギリこらえる。

秘処はもうビショビショで失禁しているも同然。

今すぐにでもディルドを動かして、快感を貪りたくてしょうがない。

このお店にいる誰も、ミーシアがあそこをラブジュースでビチャビチャにしていることを知らない。

（私、すごく悪いことしちゃってるう……）

そんなことを思いながらも、今にも快楽に流されてしまいそうだった。

「お、お客様、ご注文のカルボナーラでございます」

それでも順調に接客をこなしていく。

だんだんと快感にも馴れてきた。

本当ならそれを悦ぶべきなのだが、今度押し寄せてきたのは、もどかしさ。

フラストレーションに、太腿を擦ってしまう。

（今すぐ、ノルンのおちん×んが欲しい……っ♥）

そんな淫らなことを考えていたところに、すぐそばで人の気配を感じてはっとする。

それは同僚だった。

「ね、トイレに行ってくれば？」

「へ!？」

「さっきから落ち着きないじゃん」

「ううん、我慢するよ」

「遠慮しないで。フロアは私一人でも……」

「——八番さんの注文、上がりました」

「本当に大丈夫だから。注文を運ばないっつ」

ミーシアはやりわりと礼を言くと、八番——ノルンたちの元へ向かう。

「お待たせ」

料理を置く。

「ありがと、ミーシア。具合はどう？」

わくわくした顔でノルンが聞いてくる。

最初は素直に「ノルンが欲しい」と言ってしまうようになったミーシアだったが、ノルンにイジワルしなくなってしまった。

「ぜ、ぜんぜん平気よ？」

「えーっ」

「なに残念な声出してるのよ。あ、言っておくけど、今度さっきみたいに刺激を強くしたら、もう口をきかないからねっ」
ミーシアはふいっと顔を背け、さっさとその場をあとにした。

ノルンはミーシアの背中を見送りながら、がっくりした。

「あー……。やりすぎちゃったかあ……」

ノルンががっくりとうな垂れれば、ラビメアが笑った。

「今の信じたの？」

「もちろんだよ」

「おにーさんのおちん×んが今すぐ欲しいって、顔に書いてたよ？」

「え！」

そういうラビメアもミーシアと同じ刺激を受け続けたせいで、物欲しげな顔をしている。

「だって、あたしも今すっごく発情しちゃってるし……♡ ミーシアちゃんだって、ぜーったい同じ気持ちだよ？」

「そっか。強がってたんだ」

「うん。触っただけで、何も考えられなくなるくらい……んんっ♡」

ラビメアの左手をぎゅっと握りしめれば、彼女は、「ああっ♡」と甘い嗚咽をこぼして、身悶えた。

「ラビメア、イった？」

「……んんっ♡ んん……っ♡」

ラビメアはこくこくとうなずいた。

（すごい！ まるで催淫薬でも飲んだみたいだ！）

ノルンはにんまりしてしまう。

本当はノルンが欲しくて欲しくてしょうがないのに、強がってしまうミーシアが愛おしかった。

「あ、すみません。注文おねがいしまーすっ」

ノルンは食事をさっさと終えると、ミーシアを呼んだ。

「なに？」

「デザートが欲しいんだけど」

「何にする？ アイスやパンケーキ、パフェ、それから……ひあっ♡」

ミーシアは無防備に喘ぎをこぼし、赤面した。

なにが起きたのか。

ノルンがミーシアの右手にそっと触れた。それだけ。

「ミーシア、どうしたの？」

「んんっ♡ べ、別に……っ♡」

口でこそそう言っているが、頬は染まり、瞳は潤んでしまっている。

「ふうん」

「な、なに？」

「こうしても大丈夫？」

「あああっ♡」

手をぎゅつと握った瞬間、ミーシアは我慢できないと言うように声を上擦らせた。バランスを崩し、倒れそうになるところをノルンが抱き留めた。

「大丈夫？」

「……ノルンっ。ひ、ひどいっ♡」

「でもミーシアも望んでくれてるでしょ？」

「んんっ♡」

ミーシアが潤んだ眼差しで、ノルンを見つめる。

ノルンもミーシアを見つめる。

二人の唇がゆつくりと近づく――。

「はいはい。二人とも、ここは飲食店よ」

「きゃっ」

「うわっ」

二人の間にラビメアが割って入ってくる。

「ウエイトレスさん、パフェとパンケーキ、よろしくね」

「ううう……」

「ね、おにーさんもすぐにデザート食べたいよねっ」

「う、うん……」

「それじゃあ、も、持ってくるね……っ」

チラチラとノルンを見ながら、ミーシアは去っていった。

「ラビメア、キスくらい……」

「本当のデザートはあとで取っておかなくちゃっ♡ ね？」

ラビメアの言葉に、ノルンはうなずいた。

「お会計おねがいしまーすっ」

ノルンが会計をする間、ラビメアは意味ありげな笑みを浮かべながら、ミーシアに向かって手を振っている。

（ノルンが帰っちゃう……!）

ミーシアは他のテーブルのメニューを回収しながら、二人の姿から目を離すことができなかった。

二人が店を出ていってしまふ。

「オーナー！ す、すみませんっ！ 私……早退させてください……っ」

ミーシアは伝票をオーナーに押しつけると、制服のまま店を飛び出した。

キョロキョロと辺りを見回し、ちらりと見えたラビメアの後ろ姿を追いかけていく。

と、角を曲がったところで、ノルンとラビメアが待っていた。

ミーシアは、はっとして立ち止まった。

「ふ、二人とも!？」

ウサギ耳を垂らしたラビメアが、艶めかしい視線を向けてくる。

「ミーシアちゃんが来るんじゃないかって、待ってたの……っ♥」

ラビメアの色気をたたえた艶めかしい姿に、ミーシアはごくくと唾を飲み込んだ。

（今の私も、あんな発情した顔になっちゃってるんだ……）

ミーシアは、ノルンを見た。

「ミーシア。ごめんね？」

「もう……っ♥」

「さあ、セックスできる場所に行こう」

向かったのは、ラビメアの家。

家に飛び込むなり、ミーシアはノルンに抱きつく。

「もう我慢できないのおっ♥ ノルンに犯して欲しくて、たまらないっ♥」

ミーシアはノルンの唇を塞ぐ。

「んん……っ♥」

唇を重ねながら、舌を絡め合う。

「んちゅっ♥ ちゅぴいっ♥ ちゅばあっ♥ れろれろおっ♥ んんっ♥ ちっぱあっ♥ んんふうっ♥ もっと♥ ノル

ン、もっとツバをちょうだい♥」

クチュクチュと淫靡な音と一緒にヨダレが泡立つ。

「ミーシア、激しいねっ」

ノルンが微笑んだ。

「ずっと私で遊んでたんだからあ、これくらいのは、受け入れてえっ♥」

ミーシアは舌っ足らずに言いながら、全身をノルンにスリスリと擦りつけ、マーキングをする。

「ちよっと、ミーシアちゃん！」

「きゃっ!？」

ラビメアが割り込んできて、ノルンの唇を奪い返す。

「あたしだって、ずーっと我慢してたんだからあ♥」

「ラビメア!？」

驚くノルンの唇を塞ぐ。

「ンンッ♥ チュパアツ♥ おにーさあんっ♥ あたしだって発情しちゃってるんだからねっ♥」

ラビメアはウサギらしからぬ噛みつくような口づけを紡ぎながら、そろそろとノルンの股間に手を伸ばす。
「んぐっ!？」

ミーシアとの口づけの影響か、股間がパンパンに膨らんでいた。

「あぁっ♥ おにーさんってば、すごいことになっちゃってるうっ♥」

「ら、ラビメア……!」

ラビメアによつてペニスが引っ張り出された。

青筋を浮かべた陰茎の前に、ラビメアが蕩けた声を漏らせば、

「ノルン、すごく大きいっ♥」

ミーシアも、ギンギンに昂ぶった逸物に目が釘付けになった。

男根はビクビクつと戦慄きながら、我慢汁を漏らす。

ラビメアはペニスに口づけをする。

「おにーさん、あたしが気持ちよくしてあげるからねっ♥」

「だめえっ♥ ノルンは、私が気持ちよくするんだからあっ♥」

ミーシアもラビメアと並んで、ペニスをしゃぶった。

ペニスの右側にラビメア、左側にミーシア。

(ノルンってば、すごく昂奮しちゃってる♥)

ミーシアの欲望はさらに、高まった。

ノルンは優越感いっぱい、自分の逸物に顔を寄せるミーシアとラビメアを見下ろした。

(すごい光景だ!)

ミーシアは甘いため息を漏らす。

「あぁ♥ すごくいい匂いっ♥」

ミーシアは小鼻を膨らませ、舌を這わせてくる。

「レロオツ♥ ンチュツ♥ おちん×ん、美味しいっ♥」

ミーシアは肉棒に舌を這わせ、無我夢中で我慢汁をしゃぶった。

「あたしだって負けてないからあ♥」

ラビメアも負けじと、肉棒に舌を這わせてくる。対抗心もあいまってか、いつもより激しく貪る。

「れろっ♥ れおっ♥ ノルンの我慢汁、おいしいっ♥ もっと昂奮して、気持ちよくなって♥」

たちまちペニスは二人のヨダレで濡れてしまう。

「いいよ、二人とも。すごく気持ちいいっ」

「でしょっ？ あ、こっちもイジってあげるっ♥」

ミーシアは玉袋にそっと口づけをする。

「うう!? ミーシア!?」

「こっちもヒクヒク震えちゃって可愛いねっ♥ 今までこんなことしたことないけど、んん……ノルンが気持ちよくなってるのが分かるよ♥」

夢中で睪丸をしゃぶられ、吸いつかれ、ノルンは奥歯を噛みしめて呻く。

肛門を締めていなければ、すぐにでも射精してしまいそうだった。

ラビメアが潤んだ眼差しで、ノルンを見上げる。

「もう。そんなに玉袋をいじめられるのがいいの？ 我慢汁がすぐく出ちゃってるよ？ 変態なんだからっ♥」

「そ、それは……」

ミーシアが得意げに言う。

「私は奥さんだから、ノルンを感じる場所もちゃーんと分かるの♥ ノルンを気持ちよくできるのは私だけっ♥」

「でも、あたしには武器があるんだから♥」

ラビメアが胸元をはだければ、はちきれんばかりのおっぱいを露わにした。

「おお……」

真っ白で綺麗な形のおっぱいを、ノルンはガン見する。

「ンンッ!? ノルン、どうしてラビメアのおっぱいでおちん×んを反応させちゃうの!?」

「っ、っい……」

「っいなんて、私の口がいいんじゃないの？」

「おにーさんは、大きいおっぱいが好きなんだよ」

ラビメアは、おっぱいでペニスをむぎゅっと挟んだ。

「ラビメア……っ」

ラビメアは頬を染めた。

「おにーさんってば。そんなに分かりやすく気持ちよくなったら、ミーシアちゃんが可哀相だよっ♥ んん……っ♥ 胸の中でペニスが『気持ちいい』って、ビクビクって反応しちゃってるね……っ♥」

ラビメアは棹をおっぱいで扱きながら、亀頭冠を舐る。

「ぢゅるるっ♥ ぢゅぼっ♥ ぢゅううっんっ♥ んふっ♥ ちゅぱあっ♥ れろれろおっ♥ 我慢汁で濡れちゃいそうっ♥ もっと昂奮して、もっと感じてえ♥」

「うううう!!」

逸物が、おっぱいで揉みくちやにされてしまう。

溢れた我慢汁が掻き混ぜられて、白く泡立った。

「おにーさんのゴツゴツしてるおちん×んを擦ってるだけで、あたしも気持ちよくなれるのお♡」

ラビメアは、銀色のロングヘアやウサギ耳を振り乱して身悶えた。

乳頭はビンビンに勃起している。

「ラビメア！」

ノルンはたまらず、ラビメアの両方の乳首を思いつきり抓んだ。

「ひiiiiiiiiんっ♡♡」

ラビメアは呆気なく、上り詰めた。

「ノルン！」

ミーシアは立ち上がったかと思えば、唇を押しつけてくる。

それだけではない。

ミーシアはいつの間にか、胸元をはだけさせ、可愛らしいおっぱいを露わにしていた。そして、そのまま、ぎゅっと抱きついてきた。

硬く痼^じった乳首の触感が心地いい。

「ノルンっ♡ 好きっ♡ 好きっ♡ 大好きいっ♡」

「ミーシア、ボクも、好きだよ」

「さつきからおま×こがジクジク疼いてるの♡ ノルンに気持ちよくして欲しいって、身体が言ってるっ♡」

ミーシアはスカートをまくり上げると、秘処を強調する。

その可愛らしい秘処には似つかわしくない、グロテスクな張り型がハマっている。

「これ、ノルンに動かして欲しいの♡」

「分かった」

ノルンはミーシアのデイルドを手に取ると、ゆっくりと引く。

「ンンンンンッ♡♡」

デイルドを締めつける膣内の感触が、手に伝わった。

ズルズルと抜けば、デイルドがラブジュースで変色している様を見ることができた。

「あああっ♡ これ、すごいっ♡ おま×こがビリビリ震えちゃうっ♡」

「もつと気持ちよくしてあげるからっ」

ノルンはデイルドを再び挿入する。

「ひあああああっ♡ は、入ってきちゃうっ♡」

「ミーシアのおま×こがすごく締めつけてくるね」

「んんっ♡ んんっ♡ すごいっ♡ オモチャのおちん×んで、おかしくなっちゃうっ♡」

ミーシアはツイントールを振り乱して、身悶えた。

「よし。もっと動かすぞ……うぐ!？」

ノルンはびくつと身体を強張らせた。

ラビメアがバイズリしながら、尿道口を舌先でつついてきたのだ。唇を尖らせて、我慢汁をしゃぶる。

「おにーさんを気持ちよくするのは、あたしのっ♥」

ウサギ耳を揺らしながら、ラビメアは声を上擦らせた。

「ラビメアってば、そんなに圧迫されたら、股間がおっぱいで潰れちゃう……っ!」

「いいもんっ♥ 潰れても、おにーさんのおちん×んを、あたしのものにしちゃうんだから♥ ほらあ♥ おしっこの穴をこ
うしてグリグリしちゃうよっ♥」

「ラビメア……!」

ノルンは、たまらず腰を突き上げた。

ラビメアは、戦慄く逸物を豊満なおっぱいで包み込みながら、ますます抜き立て、蕩けさせる。

「ビクビクしてるしっ……いい匂いで、咽せちゃううっ♥ 我慢汁でおっぱいや口がベトベトになっちゃう♥」

「ノルン! ラビメアに負けないでっ♥ 私のおま×こをほじくってっ♥」

「わ、分かった!」

射精欲求に背中を押されながら、ノルンは激しくデイルドを動かす。

グチュツ! ズチャツ! ヌチュツ! ヒュブツ!

「あああっ♥ そ、そうっ♥ そのまま私をイかせてっ♥」

ミーシアは秘処に泡立ったラブジュースを滲ませながら、もっとデイルドでほじくって欲しいと、柳腰をクネクネさせた。蜜汁がこぼれ、滴り落ちる。

ノルンの手も愛液でベトベトになった。

しかし次の瞬間、ラビメアに切っ先を啜えられてしまう。

「ラビメア!？」

温かな口内に呑み込まれれば、もうダメだった。

「うううううう!!」

ラビメアの口内めがけ、盛大に射精を遂げた。

「んぐっ!？」

ラビメアは悶え顔をさらしながら、ごきゅっごきゅっと一生懸命飲んでくれる。

「んん……っ♥」

ラビメアはゆっくりと頭を持ち上げれば、まだまだ力強いままのペニスがビインツと弾けるように口の中から飛び出した。ラビメアは満足そうにお腹を撫でた。

「おにーさんの精液、ぜーんぶ飲んじゃったあ♥ さすがは一番搾りだけあって、すっごく濃くって最高うっ♥」

ラビメアはこれみよがしに、舌なめずりした。

「おにーさん、どうだった？」

「うん、すごくよかつ……え？」

頬をツンと突つつかれてそちらを見れば、

「もうすぐでイけたのにい♡」

ミーシアが恨み言を呟けば、

「——あたしが最初に精液をもらえたから、ミーシアが最初にセックスしていいよ？」

ラビメアがウインクして言った。

「ありがとう、ラビメア♡ ……ノルン♡」

ミーシアは壁に両手を突くと、ノルンにお尻を突き出す。

逆ハート型のお尻を揺らし、蜜まみれの秘裂を強調した。

「ノルン、イかせてっ♡」

「その前に、これを抜かないと……」

ノルンはデイルドを、勢いよく抜く。

「ひあああっ~~~~♡」

デイルドと柔肉の間に愛蜜の糸が架かった。

膣内がぽっかりと空いた様が卑猥だった。

「本物のち×ぽをあげるよ！」

ノルンは男根を挿入した。

ぐちゅっ！ ぬちゅっ！ 力強いペニスが押し入ってくる。

行き止まりを切っ先で力強く突かれれば、ミーシアの頭の中が真っ白になって上り詰めてしまう。

「あああああんっ♡」

ノルンは、最初から激しく腰を前後に動かす。

まるで頭の中まで掻き混ぜられているような鮮烈な快感に、ミーシアは喘ぎを止められない。

「やっぱり本物がイイッ♡ 偽物なんかより、ノルンのおちん×んが一番っ♡ もっと突いて♡ もっとお……っ♡」

ノルンの腰で、お尻を圧迫される。

お尻を弾くような腰遣いに、パンパンパンと乾いた音が響き渡った。

「ミーシアのおま×こ、締まりがすごい！」

「ずっと待ってたからあ♡ お店にいる間、ずーっとあの偽物おちん×んで子宮を刺激されて、ノルンに犯されたいって妄想しちゃってたから♡」

「なら、思う存分犯すよ！」

「うれしいいいいい♥♥♥」

ノルンはミーシアの背中にのしかかってくると、乳首をぎゅっと握った。

「ひいいいいいいンッ♥♥」

またも呆気なく絶頂してしまう。

ツインテールを振り乱し、ミーシアはますます乱れた。

「——ミーシアちゃんっ♪」

そこにラビメアが現れる。

「ら、ラビメア、邪魔しないで♥ 最初にせつくすしていいんじゃないのっ!」

「先に譲ったけど、二人が激しくセックスしてるの見て、もう我慢できなくなっちゃったの♥ 安心して。おにーさんを盗ったりしないから♥」

ラビメアは、ミーシアの目の前におっぱいを突き出した。

「吸って♥ 乳首がジンジンしちゃってるからあ♥」

「ラビメアのおっぱいいっ♥」

ミーシアは快感に酔いしれ、ラビメアのおっぱいに吸いつく。

「ああああんっ♥ ミーシアちゃんの吸い方、いいっ♥」

ミーシアは赤ん坊に戻ってしまったみたいに勃起乳首に歯を立てたり、舌をうまく使って吸いつく。

「ラビメアの乳首、カチコチになっちゃってるうっ♥」

「ミーシアちゃん、まるで赤ん坊ねっ」

ラビメアはミーシアの頭を撫でる。

「ふ、二人とも!？」

突然始まった女同士の睦み合いにノルンが声を上げれば、ペニスがビクンッと震える。

「ノルンのおちん×ん、震えたあ♥」

「オスとして負けられないよ!」

ノルンが激しく腰を前後に動かす。

グチュッ! ヌチャッ! ズチュ! グチャッ!

「は、はげしいっ♥ もっときてっ♥ もっとおま×こをめちゃくちやにしてっ♥ イかせてえっ♥」
繋がっている部分から蜜汁が泡立ちながら、滲んだ。



「の、ノルン……♡」

ミーシアはラビメアのおっぱいから口を離すと、ノルンを振り返った。

ノルンはミーシアの期待に応えて、口づけをする。

「ンンン……ッ♡」

キスをして、子宮口でペニスを受け止めて——呼吸をするのを忘れてしまうくらいの愉悦に酔い痴れた。秘処が子種の気配を感じ取って、伸縮する。

「うぐっ！」

それまで激しくくねっていた、ノルンの舌の動きが止まった。

「ノルン、もしかして出ちゃいそう……？」

「うん、ミーシアの中に出したいっ！」

ラビメアがそんなやりとりを見て、微笑んだ。

「もう。妬けちゃうな♡」

「すぐにラビメアにも出してあげるから……うあ、ミーシア!」

ミーシアの膣圧が増せば、ノルンは声を上げてしまう。

「奥さんを差しおいて、そんなこと言うなら、出させてあげないよ!」

「ご、ごめん……っ」

「ンンッ……分かれば、よろしィッ……!」

ミーシアは桃尻を揺すりながら、男根を搾り上げる。

「出るううう!!」

ノルンは、ミーシアの膣内めがけ思いの丈を解き放った。

熱い樹液で、深い部分を熱く燃やされてしまう。

「イク♡ イクウツ♡ ノルンの熱い精液がくるうう♡ イっちゃうっ♡」

頭の中が真っ赤に燃え上がり、プシャッと潮を吹いた。

「ああ♡ しゅ、しゅごい……っ♡」

ミーシアは全身を痙攣させ、前のめりになって倒れてしまう。

ズルツとペニスが抜ければ、これまでずっと膣内を埋めていた挿入感がなくなった寂しさで、疼いてしまう。

ラビメアは二人の激しいセックスシーンに、子宮をキュンキュンさせていた。

ローターを入れっぱなしで発情させられた膣肉が、ヒリヒリと疼く。

「おにーさん♡」

ラビメアはノルンに抱きつくや、熱烈にキスをした。

「ちゅばあっ♡ れろっ♡ おにーさん、あたしだってミーシアちゃんに負けないくらい、オモチャを入れられて感じちゃっ

てるんだからあっ♥」

「うん。ずっと待たせてごめん……！」

「平気。最初におにーさんの精液を飲ませてもらったからあ♥」

ノルンは、ラビメアを仰向けの格好で寝かせた。

ラビメアは両足を大きく開く。右手で割れ目を開いて、ローターを取って欲しいと訴えれば、

「ラビメア、よく頑張ったね」

ローターを取ってもらっただけで、小さく上り詰めてしまう。

「ンンン……♥」

ラビメアは頬を染め、柳眉をたわめた。

「おにーさん、あたし頑張ったあ♥」

「うん。お店にいる間、よく我慢できたね。えらいえらい」

ウサギ耳が、ぺたんと寝る。

ノルンはラビメアにのしかかれば、正常位の体勢でペニスを秘処に押し当てた。

「いくよ！」

「きてっ♥」

ズブズブッとペニスが押し入ってきた。

「ンンンッ♥」

逞しい肉塊が深い場所を叩けば、ラビメアは簡単に上り詰めてしまう。

ノルンは絶頂もかまわず、腰を激しく前後に動かしてくれる。

「ンッ♥ アアッ♥ ンウウウッ♥」

柔肉を間断なく抉られてしまえば、両足が爪先までピーンと伸びた。

「おにーさんのおちん×ん、あたしの中でビクビク震えてるっ♥」

たわなおっぱいがノルンの胸板で潰れ、乳首を通して快感の電流が迸った。

「うう！ ラビメアのおま×この締めつけ、やばい……っ！」

「おにーさんに、気持ちよくしてもらってるからあっ♥」

ラビメアは、ノルンの胸に顔を埋める。

（おにーさんのオスの匂いがすごいいっ♥ 発情が止まらないよおっ♥）

ますます身体の芯が燃え上がっていく。

勃起乳首はもっと蕩けるように感じる器官になり、身体を密着させているだけで恍惚としていく。

ズンッとペニスが突き刺されば、目から甘い火花が爆ぜた。

「ひいひいんっ♥」

「ラビメアの子宮、下がってきた！」

ノルンは、ラビメアの両手をぐつと握りしめると激しく腰を動かす。

「ああっ♥ はああっ♥ んんっ♥ 刺さるうっ♥ 突き殺されちゃう♥ すごいっっ♥」

「ラビメアを死んじやうかって思うくらい、気持ちよくするから！」

「嬉しい♥」

「——ノルン、頑張ってお尻を振ってるのね♥」

「ミーシア!?」

「ミーシアちゃん!」

ノルンとラビメアは、同時に声を上げた。

ミーシアはラビメアの顔を跨いで、ノルンと向かい合ったかと思えば、キスを紡ぐ。

「ミーシアちゃん、邪魔しないでっ♥ ……おにーさんも、なにキスされておちん×んを大きくしちゃってるのぉ!」

ラビメアが抗議の声を上げた。

「こ、これはただの生理反応で……」

ノルンが口ごもれば、ミーシアが唇を尖らせた。

「おにーさんってばひどいつ。あたしのキスじゃ物足りないのおっ!」

「そ、そういうわけじゃ」

「もう。ノルンは私のキスでメロメロだって、ラビメアにはつきり言ってあげたほうが……ひああっ♥」

ミーシアはツインテールを振り乱して、仰け反った。

ラビメアが、ミーシアの秘処をしゃぶっていたのだ。

「ミーシアちゃんってば、貪欲すぎるんだからあっ♥」

それまで余裕のあったミーシアだったが、顔色を変えた。

「ラビメア、だめっ! ノルンに出してもらった子種を吸わないでえっ♥」

「ぢゆるっ♥ ぢゆるるるっ♥ おにーさんのお汁、こんなにもらえて羨ましいっ♥ あたしもこれくらい欲しいっ♥」

「ら、ラビメアもすぐにもらえるからあっ♥ あああっ、飲んじやらめええ♥」

柔肉の反応から、ミーシアが上り詰めたのが分かった。

すかさず、ラビメアが声を上げた。

「おにーさん! 今よお! あたしをイかせてっ♥」

ノルンの腰の拙速な動きが、射精が近いことを教えていた。

「出して、おにーさんッ♥ 出してえ♥」

「出る……!」

膨張したペニスが膣内で爆発する。

「精液、くるううっ♥ いくううっ♥ し、子宮が燃えちゃうっ♥ あああああああっ……イクウウウウウッ♥♥」

ラビメアは涙目になり、よがった。

下腹が温もりに包まれば、ラビメアの身体だけでなく、ウサギ耳までビクンビクンと痙攣を紡ぐ。

「ふぁ……♡ あぁ……っ♡」

ペニスを抜けば、ノルンと繋がった場所からゴポゴポツと濁った音をたてながら、逆流した子種汁があふれた。

「はぁーっ。あぁ……っ」

ラビメアは幸せそうな顔で、気絶した。

第六章 ボクの理想の新婚旅行〜温泉ケモ耳ハーレム

ノルンたちは、自宅で午後のおやつの時間を過ごしていた。

ラビメアも誘ってすごく賑やかだ。

「ん〜。二人とも料理が上手っ♡」

ウサギ耳を揺らしながらラビメアが、手作りクッキーに舌鼓を打った。

「ふふ、でしょ♪」

「えへへ。ありがとう♡」

ミーシアもチセも嬉しそうに微笑んだ。

「ね、おにーさん。今度みんなで、どこかに出かけない？」

「いいね。――あ、新婚旅行って、まだしてなかったっけ」

「新婚旅行……？」

ミーシアとチセが一緒に首を傾げ、

「あ、そっか」

ラビメアはうなずいた。

「もー。二人だけ分かったような顔しないで」

ミーシアの抗議を受けて、ノルンは説明する。

「結婚を記念して、みんなで旅行に行くんだ」

「それは素敵ですねっ」

チセも乗り気になってくれたようだ。

「ミーシアはどうする？」

「もちろん行きたい！ どうして結婚したら旅行に行くかは分からないけど……」

「じゃ、どこに行く？」

ラビメアも話に参加する。

「もー。ラビメアは、ノルンと結婚してないでしょ？」

「えー。今さら仲間はずれ？ ひどーい」

「でもラビメアは、ノルンと結婚してないし……」

ミーシアは意見を聞きたがるように、ノルンを見る。

「ラビメアには目頃からよくお世話になっているし、一緒に行こう」

「やった！」

ラビメアはウサギ耳を感情豊かに動かして、はしゃいだ。

「どこに行く。みんな、どこか心当たりはある？」

「お兄ちゃん、しんこんりょこうはどこに行くものなんですか？ ピクニックみたいなものですか？」

「いや、ピクニックじゃなくって、ホテルや旅館とか……。どこかみんな一緒に宿泊できて、温泉なんかがあると尚いいよね」

「みんなが思いつかないから、あたしに心当たりがあるんだけどいい？」

「ラビメア、本当？」

「うん」

「どこ？」

「それは行つてからの楽しみ。きつとみんな、気に入ってくれるはずだから」
こうして目的地は当日までのお楽しみになった。

数日後。ラビメアの案内で向かったのは、山の上にあるホテル。

そのホテルは、温泉が自慢らしい。

ノルンやミーシア、チセはびっくりしてしまう。

「すごいよ！ まさか、ラビメアがこんないところを知ってるなんて。前に来たことがあるの？」

「実はくじ引きで招待券を当てたんだけど、一人で行ってもなあって思つて。ちようどよかった」

「ラビメアのくじ運に、感謝だね」

「――二人ともー。何してるのー。早く早く！」

先に行くミーシアとチセが手を振つて、ノルンたちを急かす。

（二人も気に入ってくれたみたいでよかった）

「今行くよ！」

ノルンとラビメアは、ミーシアたちを追いかけた。

部屋に通されると、そこからは見事な絶景を望めた。

遠くの湯煙に煙った山並みや青空のコントラストがとても綺麗で、谷川の流れが日射しを浴びてキラキラ輝いている。

「ノルン。しんこんりょこうって何をするの？ 作法はあるの？」

「作法なんて小難しいものはないよ。ただ一緒に楽しむ、かな？」

「それだけでいいの？」

「うん」

「それじゃあ、家と同じじゃない？」

「でも普段と違う環境を楽しむのも、大事だと思うんだ」

「どうぞ、お兄ちゃん」

チセが早速、紅茶をみんなに出してくれる。

「ありがと、チセ」

「お兄ちゃんとうして一緒にいられるだけで、嬉しいですよ♥」

「もう。チセってばいい子なんだから。もちろん私だって、ノルンと一緒にいられるだけで幸せだよ？」
右腕にチセ、左腕にミーシアがしがみついている。

「二人とも。あははは……。照れちゃうなあ」

ノルンは思わず苦笑いしてしまう。

「ふふ。ごちそうさま♪ —— でもせっかく来たんだから楽しもう。お風呂に行こっ」

ラビメアは、立ち上がった。

「でも、ノルンが一人になっちゃう……」

ミーシアは、ラビメアとノルンとを交互に見る。ノルンは笑った。

「ミーシア。楽しんできて。チセもね」

「おにーさんとは、いつでもべったりできるでしょっ」

ラビメアはミーシアとチセをぐいぐい引っ張りながら、

「ノルン、すぐ戻って来るから！」

「行つてらっしゃーい！」

ノルンは見送ると、仰向けに寝転がった。

（ラビメア、気を遣ってくれたのかな？）

最近のエッチばかりで、ちよつと疲れ気味だったのだ。

目を閉じると、すぐに眠りに落ちた。

ラビメアたちは、露天風呂に到着する。

みんな脱衣所で服を脱ぎ、タオルで前を隠しつつ、浴室へ。

靄の向こうに、木材で作られた浴槽に満たされた緑色のお湯が現れた。

「ん？ この匂い、なんでしょう……？」

「ラビメアちゃん。これが温泉の匂いよ。うーん！ この香りを感じてると、温泉に来たーって感じ！」

チセがくんと鼻を動かせば、ラビメアが言った。

「これが温泉なんだ……」

ミーシアはかけ湯をして、お風呂に足から入る。

「あちっ……」

ふふ、つとラビメアが微笑む。

「温泉って少し熱めだから。でもこれがいいのよね」

チセもかけ湯をして、ミーシアたちに続く。

「熱いけど……すっごく気持ちいいですう♥」

ラビメアは肩まで浸かると、甘いため息をつく。

「うん、本当。癒やされるう♥」

「普通のお風呂とは全然違いますね。静かですし」

ミーシアとチセは、うっとりした顔をする。

「今はオフシーズンだから、こんな豪華なお風呂をあたしたちだけで独占よ？」

「そっかー。あー、幸せーっ」

ミーシアがうーん、と伸びをする。

「ラビメアちゃん。でもせっかくなんですから、お兄ちゃんと一緒に入ればよかったんじゃないですか？」

チセの言葉に、ラビメアは肩をすくめた。

「女同士、いろいろと語り合うこともあるでしょ」

「たとえば？」

ミーシアが首を傾げる。

「たとえば……結婚生活はどう？」

ラビメアが好奇心に目を輝かせる。ミーシアとチセは顔を見合わせ、笑った。

「すぐ幸せに決まってるじゃない。ノルンは、私たちをどっちも大切にしてくれるし。ね、チセ」

「そうです。お兄ちゃんと一緒にいられて、すぐ幸せなんです。ラビメアちゃんは結婚しないんですか？」

二人の幸せそうな姿に、ラビメアはやれやれという顔をする。

（もー。自分で聞いててなんだけど、結構ノロけてくれるじゃない。あたしだっておにーさんと……）

そんなことを考えつつ、

「まあ、素敵な旦那様が現れたら、ね」

そんなことを言った。

「えー。ラビメアってばもったいないなあ。そんなに可愛くて……」

「可愛くて、なに？」

ミーシアが、そろそろとラビメアの元へ近づく。

「これとか、かなっ」

「ひゃっ！」

胸をそつと触れられれば、ラビメアはあられもない声を上げてしまう。

「ちょ、ちょっとミーシア♥」

「ね、どうしたらこんなに大きくなったの？」

「どうしたらって言われても……。自然と、ということくらいしか……」

「羨ましいですーっ」

「チセ!？」

いつの間にか、チセがそばに近づいていた。

チセも、おっぱいを優しくふにふにと揉んでくる。

「ちょっ♥ くすぐったいってば……っ♥」

ミーシアは頬を染めて、身動ぐ。

「大きいおっぱい……♥ 私もラビメアくらい大きいおっぱいがあったら、ノルンのおちん×んを挟んで気持ちよくしてあげられるのに……っ」

「大きいのは不便なだけだよ。肩は凝るし、男の人にジロジロ見られるだけだし、いいことなんて少ないよ?」

「むうっ。ずいぶん余裕ねっ」

ミーシアは唇を尖らせる。

「もう。なにいじてるのよ」

ラビメアは笑った。

その時、人の気配を感じて、ラビメアたちははっとする。

「——三人とも、面白いことしてるんだね。ボクは小さいおっぱいも好きだよ?」

現れたのはノルンだった。ラビメアはびっくりした。

(せっかく休める時間を作ってあげたのに)

顔に出してしまったのか、ノルンはラビメアに向かって小さく手を合わせると、ミーシアたちに言う。

「やっぱり一人でいるのって、落ち着かなくて」

「ね、ノルン。大丈夫なの? オフシーズンって言っても、女湯だよ?」

「うん。ホテルの人に見つかったら大変だから静かに、ね……」

ノルンは唇に指を当てると、かけ湯をしてゆっくりとお風呂に浸かれば、

「温泉さいこーっ!」

自分で静かに、と言いながらもはしゃいだ。

ミーシアとチセ、ラビメアはどつと笑う。

「ノルン。私たちと同じこと言ってる」

「私も、お兄ちゃんと同じ気持ちですよ」

「おにーさん、最高!」

ノルンは、ラビメアたちの元まで泳いでくる。

「ふふ。ノルンってば子どもみたい」

ミーシアが笑う。

「これだけ大きな風呂だと泳ぎたくない？」

「気持ちは分らないでもないけど」

と、ノルンの右肩にミーシア、左肩にチセが身を寄せる。

「ノルン。さっきの話だけど」

「さっき？」

「おっぱいのこと」

「ああ、それがどうしたの？」

「ノルンは小さい胸でも好きになってくれるけど、ラビメアのおっぱいを見てると羨ましくなっちゃう♥」

「お兄ちゃん。もっと私のおっぱいを揉んでくださいっ。そうしたらきつと、びっくりするくらい大きくなるはずですからっ♥」

「♥」

「二人とも、分かったから。そう慌てないで。とりあえず、そっちの方は身体を洗ってからに……」

「おにーさん、待って！」

ラビメアは、ノルンの背中にぎゅつと抱きつく。

「ラビメア!？」

背中に密着するおっぱいの感触に、ノルンはびくつと反応した。

「あたしが、おにーさんを洗ってあげる。隅々まで、ね♥」

「わ、私だって！」

「お兄ちゃんの身体、洗いますっ！」

ミーシアやチセも参加することになった。

ノルンは、ミーシアたちによって風呂椅子に座らされた。

「み、みんな。一人で洗えるよ？」

「ノルン。お互い身体の隅々まで知ってるのに、今さら恥ずかしがることないでしょ？」

「まあ、そうかもしれないけど」

ノルンの右側にラビメア、対面する格好になっているのはミーシア、左側にはチセ。

「それじゃ、洗うね」

ミーシアは手の中でボディソープを泡立たせて、ノルンの身体にソフトタッチする。

「気持ちいい？」

「うん、いいよっ」

チセも小さな手で一生懸命泡立てて、ノルンの左腕を優しく洗ってくれる。

「二人とも、いいっ」

「ふふ。ミーシアちゃんもチセちゃんも、大人しいんだから」

そう言ったのはラビメア。

彼女はボディソープを泡立てると、自分の身体に塗り始めた。

(え、ラビメア!?)

大きいおっぱいが、たゆんたゆんと弾んだ。

「二人とも。よく見てて♥」

頬を染めたラビメアが、右腕に抱きついてくる。

モチモチしたおっぱいがふにゅつと変形しながら、腕を包み込んだ。

「こうすれば、すぐ気持ちよくなるんだから♥」

ラビメアはおっぱいを擦りつけつつ、身体を上下に動かす。

「どう?」

「さ、最高……っ」

「ノルン!」

「ごめん、ミーシア!」

「……そっちがいいなら、私たちだって……っ!」

ミーシアたちも負けじと、ボディソープを手の中で泡立てた上で身体に塗りたいくれば、ノルンに抱きついてくる。

スベスベした柔肌と、ツンと勃った乳首が心地いい刺激を生み出してくれた。

(控えめなおっぱいはそれはそれで……イイ!)

「ノルンっ♥」

ミーシアが濡れた眼差しを向けてきたかと思えば、口づけを求めてくれた。

「んんっ♥　ちゅぴいっ♥　ノルンのお口も、しっかり気持ちよくしなきゃ♥　れろっ♥　れろっ♥　ちゅばあ♥　あああ

……っ♥」

舌を絡め、唾液を交換する。

「お兄ちゃん、わ、私もお!♥」

「おにーさんっ♥」

チセやラビメアもキスをねだってくる。ノルンは二人の唇を奪った。

ミーシアは、ノルンを促して仰向けに寝そべらせた。

「こういう洗い方もあるんだからっ♥」

ミーシアはノルンにぎゅつと抱きつければ、身体を激しく上下に揺らすように擦りつけてきた。

ボディソープでぬるぬるになった桃尻で、ペニスを圧迫されてしまう。

「うう!?　ミーシア……!!」

逸物が充血して、ググッと膨らんでいく。

「あん♥」

ミーシアが甘い息を漏らすや、ノルンを濡れた眼差しで見つめてくる。

「ノルン。今はせつくすじゃなくって、身体を洗ってるだけなんだよ？」

「ごめん。つい……」

あははは、とノルンは苦笑いを漏らした。

「ふふ。お兄ちゃん、ミーシアですつごく昂奮しちゃってるんですね♥」

ミーシアは、チセに場所を譲った。

「今度はチセの番♥」

「ミーシア、ありがと♥ お兄ちゃん、今度は私が気持ちよくしますねっ♥」

チセはお尻をノルンの顔に向けるシックスナインの体位で、ボディソープまみれの両手で逸物を包み込んだ。

「うう!？」

「ここは大切な場所ですから、ちゃんと綺麗にしないとイケませんねっ♥」

チセが小さな手で一生懸命、扱くように逸物を洗う。

裏筋やカリやくびれを入念に攻められれば、我慢汁が滲んでしまう。

「レロッ♥」

先っぽをしゃぶられた。

「うううう!？」

「ああんっ♥ どんどんお汁が溢れてきちゃいます♥」

チセは男根を綺麗にしているのか、気持ちよくするのか分からないくらいしゃぶる。

「おにーさん、そんなにチセちゃんのお口がいいの？」

ラビメアが笑い混じりに言うと、ボディソープのあわあわまみれのおっぱいで、ペニスを挟む。

「ラビメア……!!」

「ラビメアちゃん、今は私が……っ」

ノルンとチセが同時に声を上げたが、ラビメアはチセにウイंकをした。

「二人でやれば、もーっと、おにーさんを幸せにできるよ？」

「……分かりました」

チセの了解を取りつけたラビメアは、ペニスをおっぱいで包み込んだ上で、切っ先に舌を這わせる。

「ふ、二人同時!？」

ノルンは身体を戦慄かせた。

「ピチャピチャ♥ チュウウウツ♥ おにーさんのおちん×ん、我慢汁でベチヨベチヨ♥」

「お兄ちゃん、んんっ♥ もっと私たちで気持ちよくなってください♥ チュパチュパアッ♥ お兄ちゃん、大好きですっ♥」

「二人とも……!」

ノルンは快感に突き動かされるように腰を動かせば、二人はより一層、艶めかしく身悶えた。

「二人とも、おちん×んに夢中ねっ♥ それじゃ、ノルン。おっぱいをどうぞっ♥ 乳首だって、こんなに勃起しちゃってるの♥」

ミーシアが胸を見れば、ノルンがしゃぶりつく。

乳首をチュパチュパと唾液の音をたてながら、舐った。

「あああんっ♥ ゾクゾクしちゃううう……♥」

ミーシアは身を振りながら、官能的な表情を見せた。

「ミーシアの乳首、ホントにカチコチに勃ってるね」

「ああんっ♥」

ノルンは舐めるだけでなく甘噛みしたりして、ミーシアの乳首を堪能した。

「お兄ちゃん、ミーシアの乳首を舐めて昂奮してるのっ?」

「二人がかりでおち×ぼを気持ちよくしてるのに、おにーさんってば、ミーシアのおっぱいの方が好きだって言うの?」

「そ、そういうワケじゃ……!」

「ふふふ。ノルンは優しいから言えないかもしれないけど、私の乳首がノルンの好みなのっ♥」

ミーシアは猫尻尾を揺らしながら、悦に入る。

と、チセとラビメアが何かしら話をする気配。

次の瞬間。

「うわ!」

ノルンはチセとラビメアに押されて、俯せの格好にさせられてしまう。

「二人ともなにっ!」

四つん這いの格好にさせられ、チセにペニスを握りしめられる。

まるでウシの乳搾りみたいに扱かれた。

「チセ!」

「私たちの気持ちよさで、お兄ちゃんを虜にしちゃうんだから♥」

さらに、お尻に違和感を覚えてしまう。

「こっちもちゃんと、ね♥」

ラビメアがお尻に顔を埋め、舌をくねらせて攻めてきたのだ。

普段意識したことのない場所を攻められて、ノルンは戸惑ってしまう。

「ら、ラビメア、そこ汚いよ……!」

「綺麗にするためにしてるんだから、大丈夫っ♥」

体験したことのない妖しい感触に、パニックになってしまう。

(頭がおかしくなっちゃいそうだ!)

全身がぞわぞわしてしまふ。

「おにーさんのお尻、キュンキュン震えてて可愛いつ♡」

ラビメアはますます舌を動かす。

「ラビメアあつ！ それ、ヤバイ！」

チセが声を上げる。

「お兄ちゃん、私の手はどうですか？」

「チセももちろん、気持ちいい！」

「たくさんお汁が出てきてますっ。ぢゅるるっ！」

「うううう!？」

チセに扱かれながら尿道口を舌でつつつかれてしまえば、我慢の限界はあつという間にきてしまふ。

「出る！」

ビュルルウツ！ 勢いよく射精を遂げた。

全身が脱力して、ごろんと仰向けに寝そべってしまう。

「チセ、ラビメア……今の反則だって……」

「もう。ラビメアとチセで、出しちゃうなんてっ」

ミーシアがほっぺたを膨らませる。

「ごめん……。でも今のは予想外すぎて……っ」

ノルンは肩で息をしながら呻いた。

一方、ラビメアとチセは満足げ。ミーシアは頬を染めて、もじつく。

「でもね、ノルン。まだ終わってないから。だって私たちのおま×こだって、洗って欲しいんだからあ♡

ん×んも、まだやる気満々だしっ♡」

ノルンの逸物はギンギンに勃起したまま。

「よし！ 今度はミーシアの身体を綺麗にするよっ！」

「ありがとっ♡」

ミーシアは仰向けの格好で、両足を開き、秘裂を強調してみせた。

「舐めてっ♡」

ノルンは、割れ目に舌を這わせる。

「ああっ♡ い、いいよおっ♡」

ミーシアが艶めかしい嬌声を上げた。

秘裂はネットリと濡れそぼり、舌を這わせれば、甘酸っぱい風味が広がった。

「ノルン！」

ミーシアは緩やかに仰け反りながら、ノルンの頭を割れ目に押しつけた。

——ノルンのおち

「んぐ!？」

「も、もっとしやぶってっ♥　ンンンンッ♥」

しゃぶればしゃぶるほど、発情したメスの臭気が強まっていく。

逸物がジンジンと熱く疼いた。

「ミーシアのおま×こ、すぐく火照ってるねっ」

「ノルンと触れ合っているうちに、どんどん身体が熱くなったの♥」

割れ目に指を入れ、蜜を掻き出すように指を使う。

「あああんっ♥　イイイツ♥」

ミーシアの両足で、ノルンの頭を抱えるように挟まれた。

「…発情してくれてる？」

「ノルンといるだけで、発情しちゃうのっ♥」

ミーシアの膣内は糸引くほどにネットリと潤んで、指を優しく食いしめてくれる。

淫らな温もりに、劣情が高まった。

「魅力的な奥さんでよかった」

ノルンは、温んだラブジュースをじゅるじゅると無我夢中で舐った。

「ンンンン♥　イクウウウウッ♥」

ミーシアは涙目になりながら、絶頂を遂げた。

浴場中に、ミーシアの糸を引くような淫らな声が響く。

ミーシアはハアハアと息をする。

「おま×こ、すっかり蕩けてるね」

「ノルン、きてえ♥　ノルンが欲しいの…っ♥」

「分かったっ」

瞳に懇願の色を浮かべたミーシアに覆い被さり、ペニスを挿入する。

ズブズブッ！

「ああっ♥　き、気持ちいい♥」

ぬるぬるの膣壁が、貪欲に締めつけてくる。

「ノルン、イイツ♥　おちん×んがビクビク震えてるうっ♥」

「ボクもミーシアのおま×こを感じるよっ」

腰を動かしながら、ミーシアとキスをする。

「おっぱい弄って♥　乳首がビンビンしちゃってるから♥」

「よしっ」

ノルンは、秘めやかなミーシアのおっぱいをまさぐりながら、左右の乳首を交互に優しく甘噛みする。

「もっとおっぱい弄って、おっぱい大きくして♥」

「ミーシアってば貪欲なんだねっ」

「ノルンが私を貪欲なメスに変えたのお♥」

ミーシアの乙女心を微笑ましく思いながら、腰を動かし続ける。繋がっている場所から、グデュグデュと淫らな音が爆ぜた。

ペニスで、ミーシアの奥を突くほど膣圧が高まる。

「ミーシアちゃん、すごく幸せそうなんだから♥」

「私もミーシアのおっぱいが、大きくなるのに協力するねっ♥」

ラビメアとチセが、ミーシアのおっぱいに吸いつく。

「二人ともお!？」

ミーシアは髪を扇のように広げ、全身をびくびくつと戦慄かせた。

「んー。ミーシアの乳首、可愛いね。ツンと勃起してて……ちゅっ♥」

ラビメアとチセはまるで授乳される赤ん坊のように、ミーシアの乳首に吸いつく。

「だめだめっ♥ 二人じゃなくて、ノルンに吸って欲しいのおっ♥」

ミーシアは目尻に涙を浮かべ、快感に上がった。

「ミーシア。すっかりボクのおちん×んも感じてっ」

ノルンはこれまでがアイドリングだと言わんばかりに、腰を激しく前後に動かす。

「ブデュッ! グデュッ! ズチャッ!

「あああっ♥ はあああんっ♥ もつときてっ♥ す、すごい♥」

いつもはツインテールに結っている髪を下ろしているせいか、普段のミーシアとは雰囲気違って、よりいやらしかった。

「も、もうイっちゃいそう……っ♥」

ミーシアが嗚咽混じりに、全身を戦慄かせた。

「おにーさん。ミーシアちゃんに精液をあげてっ♥」

「お兄ちゃん。ミーシアはもうイきたくてたまらないみたい♥」

「イっちゃうっ♥」

「ミーシア、イって!」

ノルンはミーシアの膣内めがけ射精する。

「あ、熱いの出てるうっ♥ イグッ♥ イっちゃううううっ♥」

ミーシアは、両足を爪先までピーンと伸ばしたまま派手に上り詰める。

「ミーシア、大丈夫?」

ノルンは、ミーシアの顔を覗き込んだ。

「……す、すごく気持ちよかったあ♥」

ミーシアは口を半開きにして、目尻に涙を浮かべて呟いた。

「湯冷めしちゃうから、お風呂に浸かろう」

ノルンはミーシアをお姫様だっこすると、一緒にお風呂に入った。そこへチセとラビメアが、ノルンの背中に抱きついてきた。

「うわ!? 二人とも!？」

「お兄ちゃん、次は私と、してください♥ お願いしますっ♥」

「もちろん」

「待って、おにーさん♥ あたしたち二人を相手にしてくれる?」

「二人? 順番に、じゃなくって?」

ラビメアはチセに耳打ちする。

チセははっとした顔をしたが、すぐにうなずく。

「お兄ちゃん、ラビメアちゃんと一緒に……してください♥」

「分かった。でもどうしたらいいの?」

するとラビメアとチセは浴槽の縁に手を置くと、お尻をぐいっとノルンに向かって突きつけた。

「うお!？」

思わず変な声が出た。

二人のお尻の穴はもちろん、水飴を塗りたくったように淫らなヌメリを見せた割れ目が一望できる。

唾然としていると、ラビメアが振り返った。

「おにーさん。どっちが先かなんて考えないで、一緒に犯して♥」

「分かった」

ノルンは、二人の秘処へ指を挿入する。

二人の陰裂は艶めかしく蕩けて、指先に吸いついてくれた。

チセのおま×この方が窮屈だ。

圧迫感がすごく、肉ヒダもいやらしく絡みつく。

と言っても、ラビメアのおま×こが緩いというわけではない。



彼女の膣肉は優しく包み込んでくれて、ヒダヒダに吸われていると生々しく実感できて、それがたまらなく最高だった。

「お兄ちゃん……ンッ♥ おま×こがゾクゾクしちゃいますう♥」

「いいわ、おま×こがおにーさんの指でまさぐられて、悦んでるうっ♥」

二人は頬を染め、涙ぐみ、身悶えた。

そんな淫らな表情に、劣情はさらに盛り上がる。

「二人とも、この格好最高だよ!」

指をますます動かせば、グデュグデュと糸引くような音をたてた。

「二人のお尻の穴も、おま×こと同じようにヒクヒクしてるね」

「お兄ちゃん、そ、そこ、見ちゃだめですうっ♥」

「そ、そうよ。おにーさん。そこは本題じゃないから♥」

二人の動揺する様は、見ていて最高だ。

「二人の方からお尻を突き出して、弄って下さいって望んでるんでしょ?」

「そ、そうですね……!」

と、チセがうつとりした顔で、ラビメアを見つめる。

「ラビメアちゃん」

じっと見つめられたラビメアが落ち着かないように、身動く。

「な、なに、チセちゃん……♥」

「ラビメアちゃんの気持ちよくなる顔、すごく魅力的です……♥」

「そ、そんなの……。チセちゃんと同じよ♥」

と、ノルンが口を挟む。

「全然違うよ。ラビメアの方がもつと蕩けてる感じで……」

「もう。おにーさんったら。……ところで指だけでいいの? しゃぶったりしてもいいんだよ?」

「よしっ」

ノルンは、ラビメアの秘裂にしゃぶりつく。

「ああああんっ♥ そんなにがつつかなくっても大丈夫だよ♥ に、逃げないからあ♥」

舌を挿入しながら、肉ヒダをくすぐるように動かす。

「ああっ♥ イイツ♥ 熱々の舌が入ってきちゃうっ♥」

ラビメアは身動く。

「ヂュルルルルウッ!!」

ノルンは音をたてて、蜜汁をしゃぶる。

「あああっ♥ イクウウウッ♥」

ラビメアはあっさりと絶頂した。

ウサギ耳がピーンと伸び、一拍後には芯がなくなってしまうみたいに、ふにやつと垂れてしまう。同時に、ラビメアの上半身もがくつと沈んだ。

「おにーさんってば、すごいっ♥ ううん、すごすぎイッ♥」

目元を紅潮させたラビメアは、肩で息をしながら振り返る。と、チセが可愛らしいお尻を振った。

「お兄ちゃん……っ♥」

その切なげな声や表情で、何を望んでいるのかは分かる。

「チセ、待たせてごめんね」

「大丈夫です♥ 奥さんだから、いくらでも我慢できますからあ♥」

「よし、いくよ！」

今度はチセのおま×こに口を寄せた。

「アアアンツ♥」

チセが悦びの声を上げ、しつとりと濡れた毛先を揺らす。

「ボクの舌を感じて、チセのおま×こ、キュンキュン動いちゃってるね！」

「お兄ちゃんがイジってくれてるから、あそこが喜んでるんですう♥」

チセは円らかな瞳を潤ませた。

「これも、勃起しちゃってるし……」

ノルンは指で優しく陰核に触れる。

「だめですうううっ♥♥」

狐耳と尻尾を激しく動かしながら、イってしまふ。

本気汁が真っ赤に熟れた割れ目から、とろりと垂れた。

「チセ、すぐにイっちゃったね」

「お兄ちゃんがうまいから……ですうっ♥」

「——ね、おにーさんっ♥」

ラビメアとチセの二人はモジモジして、太腿をすり合わせた。

ノルンは微笑む。

「セックスしたいんだね、二人とも。でも、まずはどっちに入れようかなーっ。なんちゃって」

ノルンが笑い混じりに言えば、

「お兄ちゃんっ♥♥」

「おにーさんっ♥」

チセとラビメアはさっきまで一緒にイジって欲しいと言っていたのに、今ではお尻を振ってアピールして、ノルンの男根を我先にと求めている。

どちらも魅力的なヒップ。そしておま×こ。

「よし、最初はチセだ。次にラビメアに入れてあげるから、待ってて。——いくよっ」
ノルンは怒張を、チセの秘処に挿入する。

「ああああっ♥ おにいーちゃんっ♥」

ネットリとした蜜汁があぶくを作りながら、滲んだ。

「アアアンツ♥ お兄ちゃんのおちん×ん、すごく硬いっ♥」

チセのお尻を握りしめながら、奥を突いた。

「き、気持ちいいいっ♥ お兄ちゃんのおちん×んでグチャグチャにされると、幸せになれまひゅううッ♥」

狐尻尾をブンブンと振り回しながら、チセが身悶えた。

ノルンは、窮屈な膣内をこれでもかと蹂躪する。

「チセのお汁で、股間がふやけちゃいそうだっ!」

「お兄ちゃああんっ♥」

桃尻を弾くように腰を前後に動かせば、大きなお尻の表面にたふったふつと波紋が走った。

ラビメアが羨ましげな顔をする。

「いいなあ、チセちゃん。おにいーさんのおちん×んを、堪能できてっ♥」

「ラビメアちゃん、見ないでください♥」

「見合うのはお互い様♥ あ、乳首がツンと勃起しちゃってる♥」

ラビメアが、チセの乳首に吸いつく。

「アアンツ♥」

「チセちゃんってば、素敵な声で鳴くんだからあ♥」

「ラビメアちゃん、本当にだめなんですよ……♥」

チセが快感によがれば、膣圧がいやが上にも高まった。

「だって、おにいーさんとせつくすができないせいで、子宮が寂しがって……♥ こうでもしなきゃ、おかしくなっちゃいそ

うなんでもおんっ♥」

ラビメアはノルンに対して、「キスして」と訴えるように唇を突き出した。

ノルンは、チセとエッチしながらラビメアとキスをする。

舌を絡ませ、唾液を貪るように交換する。

「お兄ちゃん、ラビメアちゃんに夢中にならないでください♥」

「チセを、放ってなんてないよっ」

「腰が止まっちゃってますう♥」

嫉妬するみたいに膣圧がさらに高まれば、ペニスが子宮口を突いた。

「ヒイイイインツ♥」

狐耳がへたと萎れる。

ノルンは、これまで以上の速度でチセの秘処を掻き混ぜた。

「はあああんっ♥ ひいいっ♥ すごいっ♥ お兄ちゃんのおちん×ん、すごいですうっ♥ もっと突いてっ♥ おかしくて
くささいい♥」

チセの柔肉を攪拌しつつ、二つの乳首を優しくタッチした。

「お、お兄ちゃ……ああんッ♥」

優しく乳首をまさぐりながら抽送を繰り返せば、チセの喘ぎは蕩けた。

「お兄ちゃんっ♥」

チセが振り返り、唇を求める。

ノルンはそれに応じて唇を塞ぎ、舌を絡め合った。

唾液が泡立った。

「んちゅっ♥ れろおっ♥ と、蕩けちゃうっ♥ お兄ちゃん、すごいいっ♥ 頭が変になっひゃうっ♥」

ノルンの腰の振幅が明らかに短くなった。

ラビメアが、ノルンの顔を覗き込みながら微笑む。

「チセちゃん。おにーさんが切ない顔してる。すっごく変態な顔♥」

「わ、分かりますう♥ おちん×んがビクビク震えちゃってますからあっ♥」

「チセ、出る……!」

逸物がぐぐつと膨張した。

「お兄ちゃん、イっちゃいますうッ♥」

膣穴の締まりが一段と増した。

「うううう!!」

搾り上げられるがままに、チセの秘処めがけ思いの丈をぶちまけた。

ビュルルッ! ビュルルッ! ビュクウッ!

「熱いお汁が……ああああンンンンッ♥ イくうッ♥ お兄ちゃんのネットトリ精液、しゅごいでしゅうううううッ♥
♥♥」

上半身を仰け反らせ、チセは上り詰めてしまう。

ンンンンッ……そう、喉の奥から声を絞り出すようにして。

「大丈夫?」

全身から力を抜いて崩れるチセを、ノルンが抱き留めた。

「んん……っ♥ へいきいれすうう……♥」

チセはしばらくろれつの回らない声で独りごちていたが、突然「ああ♥」とそれまでとは違う、蕩けた声をこぼす。

「どうしたの、チセ?」

「んっ、んんっ……♡ やだやだ、お兄ちゃん、見ちゃらめですうう♡」

同時に、ひくつく尿道からプッシャアアアアア!! と、勢いよく潮をちびらせた。

「すごい量の潮だね」

「お、おにいちちゃん、言わないでくたしやいい……♡」

そこでチセは意識を失ってしまう。

「——おにーさん♡」

ラビメアが淫らに潤んだ眼差しで浴室の縁に腰かけ、大きく両足を広げる。

「次はあたしっ♡ ねっ♡」

「お待たせ、ラビメア」

ノルンを仰向けの格好にさせたラビメアは、ノルンに背中を見せる格好でペニスに腰かけるように咥え込んだ。

グヂュッ! グヂュッ!

「ああああん♡ おにーさんが……♡」

火照って蕩けた膣肉が、根元まで逸物を咥え込んだ。

「んんん♡ おにーさん、どうっ♡」

繋がった部分で濁った蜜音が爆ぜる。

吸いつかれ、奥へと引きずられる快感に、腰を動かさないわけにはいかなかった。

「ああああん♡」

ラビメアは上半身を仰け反らせ、お尻をぶるぶると震わせる。

「あん♡ いい♡ おにーさんのおちん×ん、あたしのおま×こにぴったりなの♡ もっもっもっ……♡」

ラビメアは銀髪を波打たせ、豊満なおっぱいをたぶうんと上下に弾ませた。

（ラビメア、エロすぎ!）

ノルンの昂奮はさらに高まる。

「おにーさん、もっもっ♡ もっと奥にきてえ♡」

汗の雫を弾けさせ、ラビメアは身を振る。

さらに両足を広げて、逸物をますます深くへと導く。

（魅力的な後ろ姿だ!）

ノルンは、子宮口をズンッと突き上げた。

「ああああん♡」

激しく腰を動かし膣内を蹂躪する。

ラブリュースが糸を引き、膣圧が高まった。

ラビメアが立て続けに上り詰めるのが、はつきりと分かった。

「おにーさん、イイ♡ おま×こに響くうう♡」

「もっとボクのおちん×んで気持ちよくなつて！」

「な、なってるからあ♥ 充分すぎるくらいなってるうっ♥ イきすぎて死んじゃう……♥」

温泉の匂いは、瞬く間にメスの発情臭に塗り替えられていく。

ノルンはラビメアの背中に抱きつくと、おっぱいをむんずと握りしめた。

食い込ませた指の間から、乳肉がはみ出す。

「ひいひいひいんっ♥」

ノルンの手の中にとっても収まりきれないくらい豊満なおっぱいを揉みくちやにしながら、腰を動かしては臀部を圧迫しながら乳首を抓んだ。

「ラメツ♥ ラメラメエツ♥」

発情したラビメアの身体は芯からじわりと、火照っていく。

「おにーさん……っ♥」

ラビメアが嬌声をこぼせば、何を求めているかは分かった。

ノルンはラビメアの腰を掴んで、向かい合う。

ラビメアはノルンの腰に両足を回して、改めて密着を果たす。

おっぱいが、ノルンの胸板で淫らに潰れた。

「きすうっ♥」

唇を重ねる。

舌を這わせ、唾液の交換をしながら、腰を突き上げた。

「ンンウウウウツ♥」

ラビメアは跳ね飛ばされまいと、ますます深く絡み合う。

「おにーさんのおちん×ん、あたしの中で暴れてるうう……ああああんっ♥」

ノルンはおっぱいに顔を埋め、むしゃぶりつく。

「ヒイヒイヒン♥」

濡れた身体に、銀色の髪が絡みつく。

「イクウツ♥ お、おにーさあん♥」

「ボクも、もう！」

「い、一緒に……お願いいっ♥」

「出るううううツ!!」

ビュルルツ！ ビュクツ！ ドピュウツ！

ラビメアの胎内で果て、子種汁が秘壺めがけドロドロの樹液を弾けさせる。精液が逆流してきた。

「イクうううううううツ♥♥」

ラビメアは喜びの声を漏らして、上り詰めた。

ノルンがペニスをゆっくり抜けば、

「ああっ♥」

ラビメアはぶるりと全身を震わせたかと思えば、浴槽の縁に突っ伏した。
ウサギ耳がへたと萎れる。

「……すごかった」

ノルンは尻もちをつくように、風呂に肩まで浸かった。

「ノルン、すごくよかったあ♥」

「お兄ちゃん、幸せですう♥」

「んんっ……♥ おにーさんとセックスできて、幸せえ♥」

三人の女性たちが、身を寄せてくる。

ノルンは、幸せな気持ちで胸がいっぱいになった。

ふふっ、とミーシアが微笑んだ。

「どうしたの？」

「新婚旅行って楽しいねっ」

「でしょ？」

（もうずーっとこのままでいたい……）

ノルンは三人の柔らかく、魅力的な身体を抱きしめながら、そう思うのだった。





ボクの理想の異世界生活 幸せいっぱいケモ耳ハーレム！

2021/6/1 電子版発行

著 者 上原りょう

原作・挿絵 イチリ

発 行 株式会社フランス書院

東京都千代田区飯田橋3－3－1

複製・頒布・転売等、著作権を侵害する行為は法律で禁じられており、違反した場合は刑事罰および民事罰を招来することになります。

(c)2021 Ryoh Uehara, Ichiri, Printed in Japan.